

更識家の流夏君

NO!

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

更識流夏君——彼は織斑一夏——いえ、更識楯無と更識刀奈の間に生まれた零歳五ヶ月の男の子。

とつても元気でパパとママが大好き。でもでも時には機嫌が悪くなる事もあるけど、母乳を飲んだり、オムツを取り替えられたり、外にもお出かけします。

さてさて今日は、流夏君はどの様に過ごすのでしょうか？

追記、そして6話から妹の春奈ちゃんもですが主役は流夏君です。

目次

流夏君、玩具があるお部屋でご機嫌良いみたいです。	1
流夏君、お父さんとお母さんが何をしているのか解らないのですが、ご機嫌は悪くはないみたいです。	3
流夏君、お母さんと伯母さんが何を話しているのには判らないのですが、お母さんに甘えることができ、嬉しいみたいです。	9
流夏君、お出かけ先のある事で嬉しいサプライズに遭って、ご機嫌いいみたいです	16
流夏君、パパと遊びたいみたいですですがパパは寝ているみたいで、遊べないみたいです。	25
流夏君、ある事をして笑っていましたが、それはとても嬉しい出来事であり、ご機嫌良いみたいです。	32
楯無さん、刀奈さんにある事を言われ恥ずかしそうですが、刀奈さんは嬉しいみたいです、	36
春奈ちゃん、大好きなお兄ちゃんに好きな人がいる事が知らないようですが、脅威とは未だ判らないみたいです。	40
春奈ちゃん、濡ちゃんに嫉妬しますが、流夏君は濡ちゃんに有る事をしながらもご機嫌はいいみたいです	46
流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、前編）	50
流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、中編）	56
流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、篠ノ之箒編）	62
番外編。元旦編、流夏君と春奈ちゃん、これからもご機嫌がいいみた	

いです。

69

流夏君、大好きなヒーロー物の続きが気になり、ご機嫌は良くないみたいです。

74

流夏君、パパに逢えてご機嫌はいいみたいですが、騒動を起こした事は知らないみたいです。

78

澪ちゃんと春奈ちゃん、流夏君を巡って戦いましたが、負けたみたいです。

85

流夏君、パパとママに対して恥ずかしい思いをさせているのに気づかないみたいけど、ご機嫌はいいみたいです。

90

松岡さん、彼、護衛人の過去は悲しくも、流夏君と春奈ちゃんを守ろうと再び決意したみたいです。

94

流夏君、公園で遊んでいます、周りには気づかないみたいです。

97

流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、鳳鈴音編）

103

第21話

108

流夏君、春奈ちゃんにある事をして、更にはある合体ロボを手にしてご機嫌いいみたいです

110

流夏君と春奈ちゃん、自分達はお昼寝している為、周りは何かをしているかには気づいていないみたいです。

116

流夏君、一人の従者の心を少し救ったことには気づいておらず、ご機嫌はいいみたいです。

121

流夏君と春奈ちゃん、其々の飼い犬の相手をして、ご機嫌はいいみたいです。

126

春奈ちゃん、亡き犬の姿を見て、ご機嫌はいいみたいです。

130

楯無さん、姉に父親としての義務を褒められ嬉しそうでした。(暴力表現あり)

134

流夏君と春奈ちゃん、其々の犬と遊ぶ中でご機嫌がいい中、二頭の弟である犬と新しい赤ちゃんが来ても判らないみたいです。

139

流夏君、玩具があるお部屋でご機嫌良いみたいです。

五月某日の昼間、此所は日本の某所に建てられ、広大な敷地が特徴的な和風の家、更識家。

その更識家にある、とある和室——とても広く、畳や襖等の和室に欠かせない物がありました。

西洋にない東洋の、日本の独特な造りと、古来から続く日本としての特徴を汚す事なく、それを続ける意味でも、後世にも残す意味でも存在していました。

でも、そこは何もない訳ではありません。そこには三角、四角と言った色んな形をしている幾つもの積み木や、車の玩具、クマのぬいぐるみ等の人形がありました。

和室のイメージを崩し、西洋のイメージを取り入れる様な物ばかりではありますがそこは只の和室ではありませんでした——そこは子供の遊び部屋でもあったのです。

なのに部屋には誰もいませんでした。これでは玩具は何の意味もありませんね？——おや？ 襖の外から誰かの声が聴こえました。

その声はどんどんと大きくなっていきますが和室の方へと近づいて行きました——そして、開きました。

その部屋の襖を開けたのは、一人の二十代前半の、外側に跳ねた空色の長い髪に、ルビーの様な紅い瞳が特徴的な女性でした。

白のブラウスを着て、下には水色のジーンズを穿いていました。

勿論、その人は、この部屋に来たのには理由があります——何故ならその女性は、いえ、その人は、ある赤ん坊を片手で抱き抱えています。

その赤ん坊はまだ一歳にも満たないのか、髪の毛は少ししかありませんでした。

でも、瞳は黒ですがとても綺麗で穢れなく、水が含んでいるような

頬が特徴的な赤ん坊でした。

しかし、顔立ちは抱き抱えてくれる女性に少し似ていました。そんな赤ん坊に、女性は微笑ましそうに見ていました。何故なら、赤ん坊を抱き抱えている女性は、赤ん坊のお母さんだからです。

「ほら流夏、貴方の大好きな玩具があるお部屋に来たわよ？」

その女性は赤ん坊を流夏と呼びました。でもその赤ん坊は、女性を、お母さんをじっと見ていましたがお母さんが何を言ってるのか理解していません。

だってまだ赤ちゃんですから——お母さんが何を言ってるのかは判らないのです。

けど、お母さんはクスツと笑うと、襖を閉め、少し歩くと、その場で正座し、その赤ちゃんを畳の上に置く様に放しました。

「フアアアア~~~~」

あらあら、赤ちゃんったら部屋にある玩具を見て嬉しそうに徐々に笑顔を浮かべ始めました。そうです——この赤ちゃんは玩具が大好きなのです。

でもそれは全ての赤ちゃんに共通する事——仕方ありませんね。そんな赤ちゃんにお母さんは「仕方ない子ね、流夏ったら」と嬉しそうに言っていました。

そして、その赤ちゃんの名は更識流夏（りゆうか）君——この家の当主でもありお父さんは更識楯無（旧姓は織斑、旧名は一夏）と、その妻でもありお母さんは更識刀奈の間に生まれた零歳五ヶ月の男の子です。

そして、流夏君は部屋にある玩具を見て喜びながら四つん這いで進み、玩具を遊び始めました。

そして、そんな流夏君を見たお母さん——刀奈さんは我が子を微笑ましそうに見ていました。

そして今日も、流夏君はご機嫌いいみたいですなね。

「ウフフフフー！」

流夏君、お父さんとお母さんが何をしているのか解らないのですが、ご機嫌は悪くはないみたいです。

五月の中旬。ここは更識家のとある部屋。そこには私服姿の刀奈さんと、刀奈さんの息子、流夏君と、ある男性がいました。

それは二十代前半か後半に差し掛かる男性であり、爽やかな男性でした。

白いシャツに青いズボンを穿いていました。そして、その人物は更識楯無、前の名前は織斑一夏であり、更識刀奈さんの夫であり、流夏君のお父さんであり、更識家の現当主でした。

しかし、当主でありながらもどこか恥ずかしそうでした。なぜなら……。

「うぐっ、ちゅぱ、うぐっ、ちゅぱ」

「う〜ん」

「ふふっ」

流夏君はお母さんの刀奈さんに授乳されていたのです。ですが、気持ち良さそうに音を立てていました。

妻の刀奈さんはお父さんの前で流夏君に母乳を与えていました。でももお父さんの楯無さんは少し恥ずかしそうでした。

それもその筈です——楯無さんは妻が自分の目の前で息子に母乳を与えているのです。

これにはお父さんも恥ずかしいに決まっていますが、お父さんは誰にも見せない様に奥さんを自分の目の前に正座させていたのです。

「なあ刀奈？ もうすぐ終わるか？」

「まだよ？ それに急かさないの？ 流夏が困るでしょ？」

「それはそうだけど……刀奈の肌を、授乳を誰にも見せたくない」

楯無さんはそう言うと、少し恥ずかしそうに俯きました。耳まで真っ赤にしていますが楯無さんは刀奈さんを、最愛の奥さんを大事に思っているからこそ、そう述べたのです。

結婚して数年、楯無さんは楯無を襲名してから、楯無だった刀奈さんを大事にしない日はありませんでしたから。

楯無さんの言葉を聞いた刀奈さんは微笑むと『貴方』と楯無さんを呼びました。

「うっ？ ……っ!？」

あらあら、楯無さんが顔を上げた直後、刀奈さんは楯無さんにキスしました。

それは不意打ちとは言え、楯無さんは刀奈さんの行動を素直に……いえ、突然的な事で驚いていますが刀奈さんは頬を紅くしながらクスツと笑いました。

「うふふ」

「……か、刀奈く」

楯無さんは刀奈さんを見て恥ずかしそうに声を上げました。ですが、刀奈さんは微笑んだ後、視線を流夏君へと向けます。

流夏君は今だ母乳を飲んでいますが……あら？ 流夏君はお腹いっぱいなのか飲むのをやめたみたいにお母さんの胸から放れませんでした。

「あら？ 流夏、もう飲まないの？」

刀奈さんは流夏君の様子に気付きましたが流夏君はお母さんを見ると「うわあ」と何かを訴えるように言いました。

これには刀奈さんは微笑むと、楯無さんに差し出します。

「はい、貴方。私、服を整えたいから抱っこしてて」

「あつ、あ、ああ」

楯無さんは刀奈さんから差し出された流夏君を抱き締めると、流夏君を見ます。

「あううくくあわあ」

流夏君はお父さんに抱っこされているかと思っっているのか笑っています。これには楯無さんは笑います。我が子の笑う姿は父としての喜びでもありました。

でも、楯無さんは家族は姉しかいませんでした。両親は幼い頃に蒸発してしまい、姉弟の二人で生活していました。お姉さんは……千冬

さんは自分のために家計をやりくりしたりして、楯無さんはそんな姉を助けるべく家事をしていました。

二人で生きていくしかなかったのです。ですが周りも助けたりしていました。寂しくはありませんでした。今の自分がいるのも周りのおかげでした。

ふと、楯無さんは目を閉じました。周りのことを思い出しているのです。IS学園で出会った幼馴染みにイギリス、フランス、ドイツからやってきた級友達。そして妻の刀奈さんの妹である簪さんや二人の従者達に同級生や先輩方、教員方。色んな人を思い出していました。

苦しくも楽しい思い出がありました。楯無さんはその思い出に耽っていました。

「貴方、貴方？」

そんな中、楯無さんを誰かが呼びます。妻の刀奈さんでした。楯無さんは妻の呼ぶ声に我に返る意味で現実を引き戻されると、刀奈さんを見ました。

刀奈さんは服を整え終えていたのです。しかし、夫の様子に気づきキョトンとしていたのです。どうかしたの？ そう訴えていたのです。そんな刀奈さんに楯無さんは微笑みました。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない……ただ」

一夏は流夏君を見ます。流夏君はお父さんに甘えるように抱き着きながら笑っていました。天使のような無邪気な笑顔に笑い声。それだけでも父親としての喜びを感じました。

「嬉しいんだ……父親になるって言うのは……」

楯無さんはそう言いながら流夏君は人差し指を差し出します。あらあら？ 流夏君ったら、お父さんの人差し指を両手で掴みながらじっと見ていました。

誰の手なんだろう？ そう思っているみたいです。そんな流夏君に楯無さんは微笑みますが刀奈さんも釣られるように流夏君の行動を見て微笑んでしまいました。

我が子の行動に親としての喜びを表していました。

「なあ、刀奈？」

「何？」

刀奈さんは楯無さんを見ます。楯無さんは流夏君を見続けながらも視線を刀奈さんに向けました。

「ありがとう……流夏を産んでくれて」

楯無さんはそう言いました。嬉しくもどこか恥ずかしそうでした。父親としての喜びと愛する妻が我が子、流夏を生んでくれたことへの感謝の言葉でもありました。

そんな楯無さんの言葉に刀奈さんは目を見開きますが直ぐに微笑むと、首を左右に振りました。

「違うわ、それは違うわよ？」

「えっ？」

楯無さんは目を見開きますが刀奈さんは流夏君を見ます。

「違うわ……貴方の言ってることは間違っているわよ？」

「それって……どういうこと？」

「……だって」

刀奈さんは一夏さんを見ます。そして言葉続けました。

「だって私も感謝してるのよ？」

「えっ？」

楯無さんは驚きますが刀奈さんは笑みを崩さないまま言葉続けました。

「私もね……嬉しいのよ……流夏が生まれて、母親としての喜びを感じたのよ」

「母親……」

「ええ。流夏は私と貴方の大切な宝、それだけでも嬉しいのよ。母親になれただけでなく、貴方の妻になったことや、貴方が私のために楯無を継いでくれたことにも」

「……刀奈」

楯無さんは哀しそうに笑います、刀奈さんの言葉が嬉しかったのです。ですが刀奈さんは言葉続けます。

「私は貴方の妻で、流夏の母親。それだけでも充分幸せ、でも、貴方や流夏と過ごす時間はもつと嬉しい……それに」

刀奈さんはとびつきりの笑顔で言いました。

「ありがとうございます。私に幸せを与えてくれて……ありがとうございます！」

刀奈さんはとびつきりの笑顔でそう言いました。彼女なりの本音でもありました。楯無……いえ、一夏さんの妻になったことを誰よりも嬉しく、流夏君を産んだことで母親になれたことを誰よりも嬉しく感じたのです。

一夏さんの妻になれた。流夏君を授かった。それだけでも幸せなのです。そんな刀奈さんを観た楯無さんは驚いていましたが直ぐに微笑むと、深く頷きました。

「刀奈……ありがとうございます」

楯無さんはそう言いました。妻の言葉を嬉しく思っていたのです。結婚して、彼女を伴侶にして良かった……再びそう思ったのです。

「う、にゅ……」

あら？ 流夏君ったら声を上げてしまいました。二人は流夏君を見ると、流夏君は眠たそうに瞼を閉じていました。お腹いっぱいだったのです。

そんな流夏君に二人は微笑みませんが楯無さんはあることを思い出し、刀奈さんに訊ねました。

「そうだ刀奈、お願いがあるんだ」

「何かしら？」

刀奈さんは楯無さんの言葉を聞いて首を傾げました。すると、楯無さんは流夏君を差し出しました。

「流夏を抱いてくれ」

「えっ？ いいけど……」

刀奈さんは楯無さんから流夏君を受け止めると、流夏を見て微笑みます。流夏君は眠たそうでありました。

「刀奈……ここにきてくれ」

「えっ？」

刀奈さんは楯無さんの言葉を聞いてキョトンとしながら楯無さん

を見ました。一方、楯無さんは自分の膝を指差していました。

「……あつ、ふふつ、ええ！」

刀奈さんは何かに気づいたのか立ち上がると、楯無さんの膝の上に座りました。そうです、楯無さんは流夏君を刀奈さんに頼んだのは、刀奈さんを膝の上に座らせるためでしたのです。

自分の膝の上には妻の刀奈さん。刀奈さんが抱っこしているのは我が子、流夏君。愛する妻と我が子を同時に膝の上に座らせる意味でもそうしかかったのです。

刀奈さんは楯無さんの言葉に気づきましたが楯無さんに対して横向けになる意味でも膝の上に座ります。一方、楯無さんは刀奈さんの背中に手を回しました。

落つこちないようにするためでした。刀奈さんは楯無さんを見て微笑んでいます。頬を微かに赤くしていました。嬉しかったのです。

そんな刀奈さんを楯無さんは嬉しそうに微笑んでいました。二人は互いの相手を見合っていました。

「……す〜」

おや？ 流夏君たら寝息を立ててしまいました。お母さんの腕の中が気持ちよかったみたいです。これには二人も気づきましたが、我が子を微笑ましそうに見ました。

我が子が安心そうに眠っている。それだけでも親としての喜びを感じました。ですが……そんな流夏君を見た後、二人は何を思ったのか、再び互いの相手を見合いました。

「……」

二人は何も言わず見つめ合うと、顔を近づけ……キスをしました。とても長くもなく、短くありません。少し経った後、離れました。

どちらも頬を赤くしていました。そして、再びキスをしました。今度はとても長かったのです。

でもそれは……二人が互いを愛し合っている証拠でもあるため、それを行動で表す意味でもありました……。

そんな二人に流夏君は寝ていますが、二人の愛情を受け継ぐ限り、立派な子になりますね……。

流夏君、お母さんと伯母さんが何を話しているのには判らないのですが、お母さんに甘えることができ、嬉しいみたいです。

ある日の昼下がり。ここは更識家の、流夏君の遊び部屋。そこには私服姿の刀奈さんと息子の流夏君がいました。

「ほらおいで流夏、もうちよつとよ」

刀奈さんは部屋の中央で正座しながら手を叩きます。目の前の少し先には我が子の流夏君が笑いながらママの刀奈さんの所へと進んでいました。

でも、四つん這いで進むのは少し難しいのです。もうちよつと先であり、今はなんとか頑張って進んでいました。お母さんの刀奈さんは手を伸ばして促しています。

「あ〜う〜」

流夏君はなんとかママの所まで来ました。お母さんの膝下まで来ると……。

「流夏、よく頑張ったわね」

刀奈さんは微笑むと、流夏君を引き寄せるように抱っこすると流夏君を抱き締めました。

「あうあ〜う〜」

流夏君はお母さんの温もりを感じているのかキヤツキヤツと笑っています。ですが、刀奈さんは流夏君を見て笑みを零しますが流夏君の頭を撫でました。

「流夏……ふふふ」

刀奈さんは流夏君の頭を撫でながら笑みを浮かべ続けていました。それもその筈です、流夏君は愛する夫との間に産まれた子であり、宝なのです。

自分にもお仕事はありますが今日は休日であり、我が子と遊べることは嬉しいのです。夫である楯無さんは書類の仕事をしています。彼は自分に流夏の傍にいます。

これには刀奈さんも嬉しかったのですが楯無さんは流夏は大事な息子であり、愛情を与えたかったからです。刀奈さんは楯無さん、夫に感謝しながらも流夏君と遊んでいました。

すると、刀奈さんは何かを思い出したのか流夏君に言いました。

「あつ、そうだわ流夏、今日、伯母さんが来るわよ?」

「あう?」

お母さんの言葉に流夏君はキョトンとしていました。判らないのです。赤ちゃんですがお母さんが教えてくれました。

「伯母さんって言うのは簪ちゃん、お母さんの妹よ?」

お母さんの言葉に誰かの名前が出てきましたが流夏君には判らないみたいです。同時にその人はお母さんの妹ですが流夏君は知らないようです。

だって仕方ありませんよね? 名前は愚か、逢ってみなきや判らないのです。流夏君はお母さんの言葉にキョトンとし続けています。

「刀奈様」

おや? 誰かが襖の向こう側から、誰かがお母さんと呼んでいました。すると、お母さんが襖の方を見ながら聞き返しました

「どうしたの?」

「はい、簪様がお見えになりました。客間へと案内しておりますが、もうそろそろお願い致します」

「そう……ありがとう」

お母さんは襖の向こう側にいる人と何かを話していましたが直ぐに流夏君を見ると。

「流夏、伯母さんが来たわよ? 私達も客間に行きましょう?」

お母さんは微笑むと、流夏君を抱っこしながら立ち上がりました。

「うああ〜」

あらあら、流夏君たらお母さんに抱っこされていることに気づいて笑いました。お母さんは微笑みますが、流夏君を連れて部屋から出ました。

「……よ流夏」

「?」

お母さんに抱っこされている流夏君はお母さんの言葉に何も解らないみたいです。ですがここは客間を出入りできる襖の前です。流夏君はここがどこかは判らないみたいです。刀奈さんは微笑むと、襖を開けました。

「あつお姉ちゃん」

客間には一人の女性が座っていました。白いブラウスに、膝まである青いスカートを着いていました。ですが見た目はお母さんそっくりでした。

水色の長い髪で紅い瞳。お母さんソックリですがどこか大人しそうで眼鏡をかけていました。

「ふああ〜」

あらあら、流夏君ったら、その人を見て破顔してしまいました。そんな流夏君にその人は微笑みますが立ち上がると、刀奈さんに近づきました。

「ひさしぶり、流夏君」

その人は流夏君を知っていました。そうです、その人が伯母さん、つまり刀奈さんの妹である更識簪さんでした。簪さんは今日は近くに来たから寄ったのです。勿論、少し前に連絡したために刀奈さんは了承したのです。

「久しぶり、お姉ちゃん」

「久しぶり、簪ちゃん」

そんな中、簪さんは刀奈さんと話をしました、久しぶりの再会でしたが、流夏君は簪さんに必死に手を伸ばしていたのです。

「それで、学園の方は色々大丈夫だよ？」

「そう……良かったわ」

あれから数分後、刀奈さんは簪さんとお話をしていました、勿論、姉妹での話でもあります。が仕事のことや世間のことでした。二人は客間にあるテーブルの近くで正座しながらお話をしているのです。

それは、楯無さんは仕事が終わった後に来るまでの間ですがね。

「あうあ〜」

流夏君は刀奈さんに抱っこされながら刀奈さんに甘えていました。これには刀奈さんも微笑みますが簪さんも微笑みます。

「流夏君、相変わらず、お姉ちゃんが好きなんだね?」

「ふふつ、流夏はお母さんが好きだからね?」

「う〜〜」

お母さんが言うのと、流夏君は理解したのか更に笑いました。刀奈さんは頭を撫でました。流夏君は嬉しそうでありましたが刀奈さんは微笑んでいます。

そんな二人に簪さんは微笑んでいましたが、あることを思い出し、それを言いました。

「そういえば、あれは大変だったね?」

「あれ?」

簪さんの言葉に刀奈さんはキョトンとしました。でも、簪ちゃんは微笑むと、あることを言いはじめました。

「結婚式の時、凄く大変だった……」

「……あれ?」

「うん」

刀奈さんの言葉に簪さんは頷きましたが刀奈さんは「あっ……」と少し驚きましたが直ぐに苦笑しました。それは、あの時とは結婚式の日でした。

でも、それはそれは大変でした。あれは数年前の織斑一夏……つまり更識楯無と更識刀奈の結婚式の日。この日は快晴で大安吉日。結婚式の日にはうってつけの日でした。

しかし、一夏さんと刀奈さんの結婚式はマスコミにとってはうってつけでした。世界初の男性操縦者とロシア代表の結婚式。周りから見れば羨ましく、恰好のネタでもありました。

マスコミは記事を得ようと、撮影しようとして押し寄せてきたのです。勿論、それはお姉さんや従者達のお陰で黙らせたのです。どうやって黙らせたのかは伏せておきましょう。

同時に招待客も有名人ばかりでありますが一夏さんのお姉さん、刀奈さんの両親や簪さんに従者達、IS学園でお世話になった学園長夫

妻に教員方、同級生達に顔見知りの人達もいました。

皆さんは二人の結婚を祝っていました。祝っていましたが……。

「あの時……お姉ちゃん凄く綺麗だったよ?」

「そう……ありがとう」

刀奈さんは簪さんに褒められて少し嬉しそうでした。流夏君はお母さんを見てキョトンとしていますが刀奈さんは流夏君を見て微笑むと、流夏君の頭を撫でました。

「あうあう」

流夏君はお母さんに頭を撫でられて嬉しそうに声を上げていました。刀奈さんと簪さんは微笑みますが、刀奈さんは何かを思い出したのか、それを簪さんに言いました。

話が逸れているのと、本題に入る意味でもです。

「でも、確かに……あれは凄かったわね……」

「うん……箒達、物凄く悔しそうだった……呪わんばかりに」

「ううん、あれは、彼が私を選んでくれたから……」

刀奈さんは頬を紅くしていますが、流夏君の頭を撫で続けていました。流夏君はキャツキャツと笑っていますが、刀奈さんは簪さんと共に、あることを思い出して、それを耽っていました。

結婚式の日の招待客には一夏さんの幼馴染みの二人、イギリス、フランス、ドイツの五人も招待されていました。ですが五人は一夏さんが刀奈さんを選んだことで失恋したのです。

仕方ないとはいえ、凄く悔しそうに涙を浮かべていたのです。周りも五人に気づきますが近寄り難く、中には苦笑いする人達もいました。幸いなことに武力的な反乱はありませんでしたが式は無事に終わったのです。

ですが最後まで、五人は悔しがっていたのは言う間でもありませんでしたがね……。

「五人はそれぞれの道を進んでいるけど、それぞれの幸せを掴めるよ……きつと」

「そうね……箒ちゃん達は強いわ」

刀奈さんは顔を上げると、簪さんを見ました。

「それより簪ちゃんはどうなの?」

「仕事は、順調だよ?」

「違うわよ?」

「えっ?」

簪さんはキョトンとしていますが、刀奈さんは微笑みます。

「好きな人よ?」

「えっ!」

刀奈さんの言葉に簪さんは目を見開きますが徐々に顔を真っ赤にしました。

「す、好きな人っていないよ!」　そ、それに好きな人は……うぐぐ」

簪さんは顔を真っ赤にしながら唸りました。誰かいるみたいにも思えますが刀奈さんはフツと微笑んでいました。

ですが、刀奈さんは簪さんを見て不意にあることを思い出しました。彼女は一夏……つまり、今の夫でもある楯無さんが好きでした。楯無さんは自分、つまり今の妻である自分を選んだのです。

刀奈さんから見ればつらかったのですが、簪さんは気にしませんでした。なぜなら、簪さんは一夏さんが自分は愚か、刀奈さんを選ぶのが関係なかったのです。

自分を選んでくれなくても、もしも一夏がお姉ちゃんを選んだなら、それでもいい。でも、お姉ちゃんは私のために色々と頑張ってくれた。

お姉ちゃんは幸せになってほしいと願っていました。そしてそれが、一夏さんが刀奈さんを選ばせる切っ掛けともなったのです。刀奈さんを選んだ時には微かに泣いていましたが失恋を乗り越え、二人を祝福しました。

刀奈さんは泣きながら感謝の言葉を述べていましたが、一夏さんは刀奈さんを幸せにし、絶対に守ると約束してくれたのです。因みに五人は一夏と楯無にISを使って襲い掛りましたが千冬さんにボコボコにされ、束さんは千冬さんにきつく言われて泣く泣く諦めました。

そしてそれは現実になり、彼は自分を幸せにくれたのです。

流夏君の父親でもあります簪さんは一夏さんが好きであること

に変わりは無いでしょう。刀奈さんはそう思っていました。が簪さん
は何かを思い出したかのように刀奈さんに訊きました。

「それよりもお姉ちゃん？」

簪さんの言葉に気づき、刀奈さんは表情を戻すように明るく訊き返
しました。

「どうしたの？」

「お姉ちゃんは今、幸せ？」

「えっ？」

簪さんの言葉に刀奈さんはキョトンとしました。ですが、直ぐに笑
いながら頷きました。

「ええー、勿論幸せよー」

刀奈さんはそう言いました。自分はもう、楯無さんの妻であり、流
夏君の母親。それだけでも幸せなのです。それを聞いた簪さんは嬉
しそうです。ありますが姉妹仲は良好であることを意味していました。

「うにゅ？」

そんな刀奈さんに抱き締められている流夏君は何も解らないみた
いです。ですが、そんな流夏君に簪ちゃんは流夏君を見て微笑んでい
ますが何も言いませんでした。

彼がもう少し成長したら教えよう。それも自分がお父さんかお母
さん、他の人に教えられるまで、黙っておこう、と。すると、客間の
襖が開き、二人はそっちの方を見ました。

「久しぶり、簪」

襖を開けたのは楯無さんでした。仕事が一段落したのです。

「ふああ〜」

流夏君はお父さんを見て声を上げました。刀奈さんと簪さんは流
夏君を見て微笑みますが、流夏君は片手だけでも必死に伸ばしていま
した。

ですが流夏君はお父さんやお母さん、伯母さんに囲まれて、嬉しそ
うでした。今日もまた、流夏君は幸せですね。

流夏君、お出かけ先のある事で嬉しいサプライズに遭って、ご機嫌いいみたいです

ある日の昼前頃、ここはとある商店街から数キロ離れた先の道路。ここには多くの車が走っていますがお出かけか仕事、プライベートの目的で走る車ばかりでした。

ですが、そんな車の中には、ある高級感溢れる黒い車が走っていました。その車はある場所へと走っていますがその中には二人の男性と、一人の女性、更には一人の赤ん坊がいました。

「あう〜？」

その赤ん坊は流夏君でした。この子は車の後部座席の左側にあるチャイルドシートに座っていましたでしたがシートベルトもしていました。落ちないようにもしているのです。

でも、流夏君は窓の方を見ているのですが景色を見ているのです。移動しているようにも思えるし、なんか変わってる〜、と、思っているみたいです。

「ふふっ。流夏、お外が気になるの？」

そんな流夏君を隣に座っていたお母さん、刀奈さんが微笑ましそうに訊ねました。無理ありません、赤ん坊は見たことも無い景色には不思議そうにジッと見ているのです。

でも、今日はお出かけなのです。買い物もそうですが、今日はある人たちに会うためでありました。流夏君はお出かけには気づいているかどうかは判りませんが彼はお外の景色を見続けているのです。

それに、そんな流夏君の様子を、助手席から見ている人がいました。刀奈さんの夫であり、流夏君のお父さんである楯無さんです。

「流夏、気になるのか？」

楯無さんは流夏君の様子にも笑いますが流夏君はお父さんの言葉に気づき、お父さんを見ます。お父さんはニカツと笑いますが流夏君はキョトンとしていました。

流夏君は再び外の方を見ますが何も解らないみたいです。

「流夏、やっぱり気になるのね?」

刀奈さんが訊ねると、流夏君はお母さんも見ました。でも、流夏君はキョトンとしていましたが刀奈さんは、あることを教えました。

「今日はお出かけよ? それに貴方の大好きな……ふふっ」

刀奈さんは意地悪そうにその先を言いませんでした。そんなお母さんの様子に流夏君はキョトンとしていますが刀奈さんは何も言わずに微笑みながら楯無さんを見ます。

「貴方、もうそろそろかしら?」

「ああ、済まないが商店街に着く前に近くに駐車場が無いかを見てくれ。その後は運転手さんの自由で良いよ」

「判りました。ですが私は駐車場で停まり次第、ガソリンスタンドでガソリンの補充をしておきます、その後は駐車場に戻り、お三方が戻るまで、車の中で待機しています」

「そうか、頼む」

楯無さんが運転手の男性にそう言うと、運転手さんはそう応えました。その言葉に楯無さんは領きました。そして、楯無さんは後ろを見ます。

流夏君は外を見続けていましたが楯無さんは微笑むと、妻の刀奈さんを見ます。彼女は夫が見ている事に気づいているのか微笑むと領きました。

楯無さんは微笑んでいましたが二人は互いを愛し合っているからこそだからですね。

「うああ〜」

でもでも、流夏君は窓の外の変わる変わる景色を見てキョトンとしていました。そんな流夏君に刀奈さんと楯無さんは微笑みませんが車内は穏やかな空気が流れていますね。

「う〜」

「よし、そろそろ来る頃だな、それに味噌汁も上手く出来たし」

その頃、ここは商店街の中にある、とある食堂屋さん、五反田食堂。その店内では私服にエプロン姿の一人の男性がカウンターの向こう

側にある厨房で何かを作っていました。

勿論、料理です。でも、彼の前には大きな鍋がありますが、料理の出来がいいのか余程嬉しそうなのか、何度も頷いています。その人はとても若いのですが赤髪に黒いバンダナが特徴的な男の人でした。

「もうそろそろ、……あゝ今は楯無か」

男性は何かを言い掛けましたが何故か訂正しました。でも苦笑いしていますが不意に店の奥を見ます。店の奥には何もありませんが何故か微笑むと、鍋の火を消し、口を開きました。

「もうそろそろ終わったかゝゝ?」

男の人はそう言いながら、店の奥へと向かいました。

「うゝゝ?」

数分後、流夏君はお母さんに赤ちゃん紐で抱っこされながら商店街の中に居ました。お母さんの隣にはお父さんもいますが二人は仲良く歩いていました。

でもでも、流夏君は街の中を不思議そうにきよろきよろと見ていました。店が沢山あって、店の人らしき人達が街行く人達を呼んでいました。

買い物をしている人や自分と同じくらいの赤ちゃんか、子供を連れているお母さんもいました。皆、何をしているのかは知りませんが、流夏君には判らないみたいです。

「ここ何所ゝ?」 と思っているかもしれないですね、ですが街を歩き交っていることに変わりはありませんね。

流夏君は街の中を未だ、きよろ、きよろと見ていますが刀奈さんはクスツと微笑みました。

「流夏、気になるの?」

「うあゝゝ?」

「フツツ、やっぱり気になるのね?」

刀奈さんはそう言いながら流夏君の背中を優しく撫でます。

「うあゝゝ」

流夏君ったら、とても嬉しそうに破顔しました。とても気持ちいい

く、そう思っているみたいです。自分の背中を撫でるお母さんの手の平がとても気持ち良いみたいです。

温もりをも感じているみたいですけど赤ちゃんの彼にはそう感じるのも無理はないみたいです。

ですが、そんな流夏君を刀奈さんは微笑みませんが隣にいる楯無さんも流夏君を見て微かに笑みを浮かべていました。我が子が嬉しそうに笑っている。それだけでも幸せを感じていました。

二人は愛息の笑う姿に微笑みませんがそんな彼等と呼ぶ者がいました。

「おや、一坊じゃねえか!」

すると、そんな二人を呼び止める人がいました。二人は不思議そうに声をした方を見ると、そこは野菜や果物等が並べられている八百屋でした。

その店の人らしき中年夫婦が二人を見て驚いています。そして声を上げたのは旦那さんらしき中年の男性でした。

「あつ、熊さん!」

楯無さんがその男の人を熊さんと言いました。熊さんと奥さんらしき人は二人を見て笑っていますが楯無さんと刀奈さんは店の方へと歩きました。

流夏君は抱っこ紐を着けられている為、自然とお母さんに連れられるようになっていました。

「お久しぶりです、熊さんに妙子さん」

「久しぶりだなくく結婚式以来か?」

「そうなりますね」

「そうかそうか、それにしても……」

楯無さんが訊ねると、熊さんは気軽に応えてくれました。すると、彼は楯無さんの隣にいる刀奈さんを見ました。

「一坊の女房か? かあ〜っつ、べっぴんじゃねえか!」

「いえ、私は……」

刀奈さんはべっぴんと言われて嬉しそうでした。でも、熊さんは流夏君に気づきました。

「それに、その赤ん坊も可愛いなく名前は何て言うんだ？」

「流夏です、男の子です」

「流夏か〜可愛いな〜」

熊さんは流夏君を見て笑っていました。

「あう〜」

でもでも、流夏君は熊さんを見てキョトンとしていました。すると、熊さんは耳を引っ張られていました。やったのは女房の妙子さんでした。

「イチチチ！ 何すんだ母ちゃん!？」

「止めなさいアンタ、そんな怖い顔で見られたら泣いちゃうだろ？」

「止めてくれよ母ちゃん〜！ そんな事言われたら俺、傷付くだろうが〜」

「別に良いんだよ！ それに」

すると、妙子さんは熊さんを解放しました。熊さんは引っ張られた耳を抑えますが妙子さんは気にもせず刀奈さんを見て微笑みます。

「相変わらずべっぴんさんね〜一夏君には勿体ないくらいよ！」

「いえ、この人には、その……」

妙子さんの言葉に刀奈さんは頬を真っ赤にしました。それを見た妙子さんは微笑みますが不意に楯無さんを見ます。楯無さんは刀奈さんを見ていますが彼は奥さんの肩を引き寄せます。

あらあら、刀奈さんたら、楯無さんの行動に驚きますがまんざらでもなさそうです。そんな二人に熊さんと妙子さんは愛息と愛娘を見る両親のように見守っていました。

いつ見ても仲良し、そう思っているみたいです。同時に楯無さん、いえ、一夏さんの成長と彼が生涯の伴侶を得た事に嬉しかったのです。

それは勿論、結婚式に招待された事も有ったからです。

「……………」

そんな中、流夏君は八百屋にある果物や野菜をジ〜ツと見ていました。林檎やオレンジ、レタスやきゅうり等の色んな色がありました。何だろあれ〜？ それに見た事もない色も一杯ある〜。そ

う思っているのかもしれないね？

「おや気になるのかい？」

妙子さんが流夏君に気づき、訊ねました。流夏君は妙子さんを見ますがニヤ々ツツと嬉しそうに笑うと同時に恥ずかしそうにお母さんの胸に顔を埋めてしまいました。

「恥ずかしいのです。それに流夏君の癖でもありますけどね？でもでも、熊さんは耳を抑えながら」

「ははは！ 母ちゃんが怖くてそうなったんだよ！」

熊さんはそれを勘違いしたのか笑いました。ですが、それを聞いた妙子さんは熊さんをジツと見ると。

「あんた々々!!」

うえっ!? 妙子さん、熊さんに叩固めをしました。

「あああ々々ツ!!」

熊さんは妙子さんの技に悲鳴を上げました。これには更識夫婦と近くを歩いている人達もビックリしました。突然の事で驚いているみたいです。

「うああ々々」

でもでも、流夏君は笑っていました。とても面白いく々そう思っているみたいです。

「あ、あの……」

楯無さんは二人に尋ねようと思いました。すると、妙子さんは笑いながら応えました。

「ああ気にしないでいいんだよ!? 何時もしているから」

「何時もしているって、母ちゃん、止めてくれよ！」

熊さんはそう懇願しますが妙子さんは怒ると技を更に強くする意味で腕に力を入れました。

「煩いね！ それに昨日、勝手にレジのお金を使おうとしただろ!? 何を考えてるんだい!?!」

「別に良いだろ々々」

「ダメだね！ 勝手に使ったら私でも怒るよ!? それにアンタの相手は後で良いけど、このまま待ってなさい！」

「そんな堪忍してくれよ〜」

熊さんは泣きそうでしたが妙子さんは楯無さんと刀奈さんに対して微笑みました。

「ところで今日はどうしたんだい？」

「あつ……そうだ！俺達」

「ああ〜」

妙子さんの言葉に楯無さんは気づきました。でも、流夏君は妙子さんの技で苦しめられている熊さんを見てキヤツキヤツと笑っていました。

「ダメよ流夏？ そんなに笑っちゃ」

そんな流夏君に刀奈さんは困惑していましたが流夏君は笑い続けていました。

「遅いな……どうしたんだろ？」

その頃、五反田食堂では、バンドナを着けている男の人が厨房に立ちながら店内にある時計を見てそう呟きました。でも、カウンターの向こう側には、一人の女性が立っていました。

男性よりも年上に感じますが赤髪が掛った茶髪に茶色い瞳に眼鏡を掛けていました。女性らしく黄色いブラウスに青いスカートを穿いていました。

背中には、ある赤ん坊を抱っこ紐で抱っこしていました。でもでも、その赤ん坊は背中で抱っこされながらも辺りをきよろ、きよろしていました。

「別に良いじゃないですか弾さん、刀奈様と楯無さんが来るまで、もう少し時間がありますよ？」

「それはそうだけど……」

「それに厳さんは今、お出掛けしていますし、お義母さんも厳さんと一緒にですからね」

「そうだよな〜〜じいちゃんがいたらお玉もんだけど、今は大丈夫だし」

「そうですよ」

「でもな〜少し心配だからだな……」

女性の言葉に男性、五反田弾さんは納得しているみたいです。ですが何処か不安そうでした。無理ありません、今日は新作の味噌汁を親友でもあり、悪友でもある一夏、つまり楯無さんに試食してもらおう為でした。

楯無さん達のお出かけとは、弾さんに呼ばれたからです、空いてる時間を彼が楯無さんに聞いた為に何とかなりましたが弾さんは楯無さん達を待っているのです。

でも、そんな弾さんは女性、いえ、彼の奥さんである虚さんは宥めていました。でも、弾さんは話題を変える意味で笑いました。

「それに虚、背中にいる……」

すると、扉の開く音が聴こえました。これには二人も扉の方を見ました。

「悪い、悪い、遅くなった」

「ごめんね虚ちゃん」

「あう〜」

楯無さんと刀奈さん、流夏君でした。更識夫婦は妙子さんの言葉に思い出し、ここへと来たのです。

「どうしたんだ一夏？ 遅かったな」

「ごめんごめん、八百屋さんとの妙子さんと少しお話をね」

「あ〜あのおばあさんか、判るぜ？ 気が良い人だけど、お前が久しぶりに来たからな〜」

楯無さんと弾さんは他愛も無い会話をしていました。

「虚ちゃん、久しぶりね」

「は、刀奈様もお元気で何よりです。流夏君もお元気で何よりです」

「フツ、ありがとう……それに」

刀奈さんは虚さんの背中にいる赤ん坊を見ます。

「滯ちゃん久しぶり、ほら、流夏？」

刀奈さんがそう言うと言いつつ流夏を虚さんに見せました、同時に虚さんは

身体を横にします。すると、その赤ん坊は滯ちゃんと言う名前でした。ふつくらとした肌にお母さん譲りの赤髪がかつた茶髪でありました。

「フアアアア〜」

「ウアアアア〜」

あらあら、流夏君と滯ちゃんたら互いの相手を見て破顔しました。そうです、滯ちゃんは五反田弾と妻の虚さんの間に産まれた長女なのです。

彼女も流夏君と同じ生後五ヶ月ですが流夏君の大好きな女の子なのです。そうなのです、刀奈さんが意地悪していたのは滯ちゃんに逢える事を隠していたのです。

お母さんの人誑し的な事に流夏君はまんまとはまっていたのですがとても嬉しいサプライズ。これには流夏君だけでなく、滯ちゃんも嬉しいのです。

「ウ〜ア〜」

「ウ〜」

あらあら、流夏君たら滯ちゃんを見て必死に手を伸ばしているみたいです。でもでも、滯ちゃんもお母さんに背中で抱っこ（抱っこ紐を着けています）されながらも流夏君に必死に手を伸ばしています。

そんな二人の子供に更識夫妻と五反田夫妻は微笑ましそうに見ていました。でも、そんな周りに二人は気にもせず必死で手を伸ばしていたのです。

でもでも、二人はとても嬉しそうですが必死に手を伸ばしていた事に変わりはありませんでした。それに今日は流夏君、いえ、流夏君と滯ちゃんはご機嫌いいみたいです。

「ウフフ！」

「ウアア〜」

流夏君、パパと遊びたいみたいです。パパは寝ているみたいで、遊べないみたいです。

「あう〜」

ある日の昼下がりに、ここは更識家の流夏君の遊び部屋。そこには流夏君と彼のお母さんである更識刀奈さんがいました。

「こら流夏、止めなさい」

刀奈さんは仰向けに寝転がっています。流夏君は嬉しそうにお母さんの顔近くで暴れていました。これにはお母さんもタジタジですがまんざらでもなさそうでした。

流夏君はお母さんに甘えています。暴れているようにしか見えませんが、すると、刀奈さんは笑いながら流夏君を抱き締めました。それも、頬と頬をくっ付けるように。

「うああ〜」

流夏君は嬉しそうに笑っていますが刀奈さんも笑います。

「ふふつ。流夏ったら、お母さんが大好きだからね〜」

「うあ〜」

お母さんの言葉を理解したのか流夏君は更に笑います。これには刀奈さんも微笑みます。流夏君を抱き上げると上半身を起こし、そして再び流夏君を抱き締めました。

「うああ〜」

あらあら、流夏君ったらお母さんの行動に破顔してしまいました。刀奈さんは未だに微笑むと、ある事に気づきます。

「そうだわ流夏、お父さんの所へ行こうか?」

「あう?」

お母さんの言葉に流夏君はキョトンとしました。何も解らないみたいです。でも、お母さんが流夏君に判り易いように訂正しました。

「パパの事よ? 判る?」

「うああ〜」

あらあら、流夏君ったら、パパと訊いて破顔しました。パパ〜。と

お父さんの事を思い出しているみたいです。それは流夏君の父であり、刀奈さんの夫である楯無さんの事です。

彼は今、暗部関係の仕事で書類整理をしていました。その為、ここにはいませんでした。ですが、刀奈さんがそう言ったのも、ある理由がありました。

「私達が行けば、パパも元気に仕事に取りかかれると思うのよ?」

「うゝゝ?」

「勿論、ママ達は遠くで見ているだけ、遊ぶ事は出来ないけど……それで良い?」

「うにゆゝゝ?」

流夏君は首を傾げていました。刀奈さんの言葉を理解していないみたいです。でも、刀奈さんはクスツと微笑むと、流夏君を抱っこしながら立ち上がりました。

「うああゝゝ」

流夏君、お母さんに抱っこされて笑いました。でも、刀奈さんは笑うと、流夏君を連れて部屋を出ました。向かうは、夫であり、流夏君のお父さんである楯無さんがいる書斎でした。

「あんたゝゝつ!!」

「あああーっ!!」

その頃、商店街では妙子さんが旦那さんである熊さんに叩きつけていました。理由は熊さんが五反田夫妻の長女、瀞ちゃんに対して、泣かしてしまっただからです。それも熊さん特有の強面の顔が原因でもありました。

「ハ、ハハ……」

「キャツ、キャツ」

そんな二人の夫婦漫才を五反田夫妻は苦笑いし、お母さんの虚さんに抱っこ紐で抱っこされている瀞ちゃんは泣いていました。が何時の間にか笑っていました。

「うゝゝ」

場所は戻って、ここは楯無さんがいる書斎の前の通路。そこには刀奈さんと、彼女に抱っこされながらキョトンとしている流夏君がいました。

流夏君は襖を見ていますが刀奈さんは微笑んでいました。

「ここよ流夏、ここにあの人、パパがいるわよ?」

「うああ〜」

流夏君は破顔しました。パパ〜と思っているようですね。でも、刀奈さんは微笑むと、襖の向こう側にいる旦那さん、楯無さん呼びました。

「貴方、ちょっと良いかしら?」

刀奈さんは楯無さんに対して訊ねます。ですが……。

「……あれ?」

おや? どうした事でしょうか? 楯無さんから返事はありません。これには刀奈さんも不審に思いますね?」

「う〜〜?」

流夏君はお母さんに抱っこされながらも襖をジ〜ツと見ていました。でも、刀奈さんは旦那さんの名を呼びます。

「貴方? どうしたのかしら?」

刀奈さんは不審に思い、襖を開けました。向こう側は楯無さんがよく使っている書斎でした。そこには難しい本が何冊も収められている本棚に机、パソコンもありました。

ですが、肝心の楯無さんは……。

「あら? ……ふふっ」

「うああ〜〜?」

刀奈さんは呆れています。が微笑み、流夏君は不思議そうに見ていました。二人の視線の先には座布団を枕代わりにしながら仰向けに寝ている旦那さん、楯無さんがいました。

彼は寝息を立てていますが起きる気配はありませんでした。そうなのです、返事が無かったのも寝ていたからなのです。

「あらあら、パパ、寝ているみたいね?」

「う〜〜?」

刀奈さんはそう言いながら襖を閉めると、楯無さんの所まで歩み寄り、彼の横に正座しました。

「貴方。ふふっ」

刀奈さんは悪戯っぽく訊ねます。でも、楯無さんは寝ている為、何の反応もありません。でも、流夏君は。

「あううう？」

流夏君、安心しているように寝息を立てているお父さんをジューツと見た後、必死に手を伸ばしています。

パパ、起さなくて遊ぼうよ。そう訴えているみたいです。でも、お父さんには何の反応もなく、静かに寝息を立てていました。

そんな中、刀奈さんは苦笑いしながら流夏君に注意しました。

「こら流夏ダメでしょう？　パパが寝ているでしょう？」

「ううう」

刀奈さんは流夏君にそう言いますが流夏君はお父さんに対して必死に手を伸ばしています。パパ、と甘えたいみたいです。でも、楯無さんは寝返りを打ちます。それも、刀奈さんの膝を見るように。

「貴方……ふふっ」

刀奈さんは楯無さんを見て微笑みます。旦那さんは無意識に自分の方を見ている事に嬉しかったのです。同時に、無邪気かつ子供のように寝ている彼を見続けていました。

ああ、この人は余程疲れていたのね……そう思っているみたいです。不意に視線をテーブルの方へと向けます。そこには書類の山がありました。三、四百はありますが全て終わった後でした。寝ていたのも多分、終わった後の安心感かつ、睡魔が襲ってきた為に、今の状況になったんだと、刀奈さんは直感しました。

刀奈さんは彼を見て哀しそうに微笑みます。彼は自分の為に楯無を襲名してくれた。それも愛する自分の為に自らを犠牲にした。

刀奈さんは楯無さんに対して感謝と後悔をしました。出来る事なら自分は彼の為にサポートしたい、同時に刀奈さんは流夏君を見ます。

「ムニユウウああ」

流夏君たら、お父さんに対して、まだ手を伸ばしていました。パパと遊びたい、そう思っているみたいです。でも、楯無さんは眠っている為、それは出来ません。

遊べるのは起きた後じゃなきゃダメみたいです。刀奈さんは流夏君を見て微笑みますが不意に口を開きました。

「流夏、今はママと遊びましょうね？」

「あううう？」

お母さんの言葉に、膝の上に座っている流夏君はお母さんをキョトンと見ました。ママ？ と不思議そうに見ているのです。

「パパはお休みしているし、起こしちや悪いからよ？」

「ううう？」

お母さんの言葉に流夏君は何も解らないみたいです。でも、刀奈さんは流夏君を微笑みながら見ていました。

「パパはね、ママや流夏の為に頑張ってお仕事したのよ？ それに今は疲れているから、少しの間はママと遊びましょう？」

「うあう？」

お母さんの言葉に流夏君は笑います。ママと遊ぶ。全く、流夏君は直ぐにパパからママに変えましたね。恐らく、優先順位はママの方が上だからでしょうね？

「パパは……フツ、今は私と遊びましょう？ それにママもパパが大好きなのよ？ パパはママの初恋の人で……クスッ」

刀奈さんは楯無さんの頭を撫でます。壊れ物を扱うように優しく、と、です。

「パパはママの事を大事にしている。勿論、流夏の事もね？」

「ううう？」

流夏君は何も解らないみたいです。でも、刀奈さんは微笑むと、不意に流夏君を見ます。

「それに、あなたも何れ……ううん、今は良いかしらね？」

刀奈さんはそう言うと、流夏君を優しく抱き締めました。

「うああう？」

あらあら、流夏君ったら笑いました。ママの温もりが嬉しいみたい

です。でも、刀奈さんは流夏君を見て、ある事を思っているみたいです。

それは流夏君が何れ、楯無を襲名する事。それは、刀奈さんと楯無さんが一番思っている事です。彼は何れ成長し、当主となるべき者。彼は多くの経験を積む事で一人前になる事です。

ですがそれは困難であり、茨の道です。でも、彼には多くの仲間がいます。勿論、自分達もいます。彼が一人前になるまで、多くの事を教えるのです。

父から子、子から孫、更に孫から曾孫と言う事になります。でも流夏君は後継者でありますが今は赤ちゃん、今は愛情を与える事が何よりの大事な事なのです。

「それにお義姉さんからも言われたのよ?」

「うゝゝ?」

ママの言葉に流夏君はキョトンとしました。ですが刀奈さんは瞑目しました。それは、ある人の言葉を思い出していたのです。

『更識姉、お前は母として流夏と言う愛息に愛情を注いでやれ、優しさを教えてやれ、間違つた事は間違つていと教えてやれ。母としての責任を果たすだけでなく、流夏を強く、誰よりも優しい青年として育てろ』

刀奈さんはその言葉を思い出していたのです。その言葉はとても重みを感じられますがお義姉さんの言葉でもあるのです。義理の姉としてのお願いとも捉える事が出来ますが刀奈さんはそれを重く受け止めているのです。

自分は楯無の妻であり、流夏君の母。それは彼等に愛情を注ぎ、妻として、母として彼等の傍にいと決めました。刀奈さんは頷くと、瞼を開き、流夏君を見ます

「うゝゝ?」

流夏君は首を傾げました。でも、刀奈さんは微笑むと楯無さんを見ます。

「流夏、私は貴方のママだけど、この人の妻でもあるわ……それに」

刀奈さんはクスツと笑いました。

「私は……いえ、今は良いわ」

刀奈さんは首を左右に振ると、ある事を思い出しました。

「あつ、でも遊べないみたいね？　流夏はもう、お昼寝の時間だからね？」

「うわああ〜？」

刀奈さんはそう言うと、流夏君は何も解らないみたいです。お昼寝〜？。そう思っているみたいですね。でも、赤ちゃんは寝る事も大事なのです。

刀奈さんは流夏君の為ですが彼女は微笑むと、立ち上がりました。

「あなた、私達は部屋で寝るからね？」

刀奈さんはそう言うと、流夏君を連れて、書齋を出ました。勿論、自分達の部屋で流夏君をお昼寝させる為です。でも、自分も寝る為ですからね。

流夏君はもうすぐお昼寝ですが今日も機嫌いいみたいです。

「うああ〜つ」

流夏君、ある事をして笑っていましたが、それはとても嬉しい出来事であり、ご機嫌良いみたいです。

「うふふ……」

某月某日の正午過ぎ、此処は更識家の広間。そこには正座をしている二十代前半の女性と、ある赤ん坊がいました。空色の長い髪に外側に跳ねているのが特徴的かつ、紅い瞳が特徴的な女性でした。

白いブラウスに、膝まである蒼いスカートを穿いていました。ですが、その女性はこの家の当主である楯無さんの愛妻、刀奈さんでした。そして彼女は微笑みながら、ある赤ん坊を授乳させていたのです。

その笑みは母親としての喜びと優しさとも言えました。視線の先には自分の胸をちゅぱ、ちゅぱ、と小さく音を立てながら母乳を飲んでいたのでした。

勿論、刀奈さんの愛息である流夏……あれ!? 流夏君じゃありません! 彼女が抱いているのは流夏君じゃなく、五ヶ月になる女の子の赤ちゃんでした。

肩まで伸びている水色の髪に、水が含んでいるようにふっくらとした頬っぺ。瞳の色は目を閉じている為に判断出来ません。桜色の赤ちゃん服を着ていました。

「……ムニユ」

すると、その女の子は何か気づき、瞼を開きました。とても紅く、澄んでいました。

「ふふつ、どうしたの春奈?」

刀奈さんはその娘を春奈と呼びました。そうです、刀奈さんは二人目を授かったのです。その娘の名は更識春奈ちゃん、楯無さんと刀奈さんの娘であり、流夏君の妹なのです。

春奈ちゃんは刀奈さんを見ながら何かを思っているみたいですが視線を自分の口元へと移しました。飲む事に集中したいみたいです。同時に瞼を閉じました。

静かに飲みたい。そう思っているみたいです。誰にも邪魔され

たかないからでしょうね？

「春奈……ふふっ」

刀奈さんは春奈ちゃんを見てクスツと笑いますがその場を動こうとはしませんでした。春奈が飲む事に集中している、そう気付いたからです。

愛娘を思つての事ですが母親としての使命と優しさだからですね。

「刀奈」

すると、広間を出入り出来る襖の方から声がしました。これには刀奈さんも襖の方を見ます。この声に聞き覚えがあるのもそうですが嬉しそうですね。

そうなのです、その声の主は刀奈さんの最愛の……。

「貴方」

刀奈さんは愛しそうにそう呟きました。すると、襖が開き、そこには二十代前半の一人の男性と、彼に抱き抱えられている一才半くらいの赤ん坊がいました。

整った顔立ちに黒髪黒眼。白い長袖のシャツに青いズボンが特徴的な男性でした。赤ん坊は抱き抱えてくれている人に良く似ていますが刀奈さんの面影が少し残っています。

そうです、彼等は刀奈さんの最愛の夫、愛息なのです。そして旦那さんの名前は更識楯無さん、旧姓を織斑、旧名は一夏さんです。そして、楯無さんに抱き抱えられているのは流夏君。

そうです、この子が流夏君なのです！ 彼は一年前までは五ヶ月だったのですが今はもう一歳半、立派なお兄ちゃんにもなったのです！

春奈ちゃんは流夏君の妹ですがお兄ちゃんである事には変わりはないのです。

「ママ……」

流夏君は抱き抱えられながらも刀奈さんを見て嬉しそうに呼びました。これには刀奈さんも微笑みますが楯無さんも微笑みます。ですが、流夏君は必死に手を伸ばしていました。勿論、刀奈さんに対してです。

流夏君はお母さんが大好き。でも、お母さんは今、春奈ちゃんに授乳している最中なのです。春奈ちゃんはちゅぱ、ちゅぱと音を立てていますが気にもしていません。

「こら流夏。ママは今、春奈にあげているだろう？」

そんな流夏君にパパの楯無さんは苦笑いながらも言いますが流夏君は聞く耳を持ちません。でも、楯無さんは流夏君を抱っこしたまま部屋の中に足を踏み入れ、後ろ手で襖をしめると、刀奈さんの方へと歩いていきました。

「貴方」

「刀奈……」

二人は互いの相手を見てそう呟きました。ですが、二人は愛しそうに見ていたのです。楯無さんは刀奈さんを、刀奈さんは楯無さんをする。楯無さんは刀奈さんの前で腰を下ろすと、流夏君を膝の上に座らせたのです。

「春奈、一杯飲んでるのか？」

「ええ。この娘つたら、飲み終えるまで離れないみたい」

「ははっ、そうか」

楯無さんと刀奈さんは春奈ちゃんを見やりました。春奈ちゃんは未だに飲んでいますが静かかつ、誰にも邪魔されたくないようにも思えました。

それはまるで、一年前まで乳児だった流夏君を思い出したのです。彼もまた、飲み終えるまで、そこを離れなかったのです。でも、彼も今は一歳半ですがお父さんの腕の中で春奈ちゃんをジッと見ているのです。

まるで幼い頃の流夏を思い出す。

でも、両親から見れば嬉しいのです。流夏君も大事だけど、春奈ちゃんも大事だからです。我が娘を思うが故でもありますが二人目が長女である事が嬉しかったのです。

流夏君と春奈ちゃんは二人にとって、大事な宝物なのです。

「な〜〜？」

あらあら、流夏君つたら、春奈ちゃんをジッと見続けていたのに声

をかけてしまいました。でも、流夏君はもうお兄ちゃんですが好奇心があるように春奈ちゃんを呼んでいるみたいです。

「ム、ニユ……?」

あらあら、春奈ちゃんったら、流夏君の言葉に反応したのか瞼を開き、流夏君を見ます。

「流夏、春奈が飲んでいる最中でしょ?」

そんな流夏君に刀奈さんが苦笑いしながら注意しました。でもでも、流夏君は春奈ちゃんを見て手を伸ばします。すると、春奈ちゃんは少し嬉しそうに笑うと、手を伸ばしました。

そして……流夏君の手と春奈ちゃんの手が触れました。兄と妹の軽いやり取りでしたが流夏君はニヤ〜と笑い、春奈ちゃんは恥ずかしそうに笑っています。

流夏君は春奈ちゃんを妹と認識していますが、春奈ちゃんも流夏君をお兄ちゃんと認識出来たみたいです。

「ハハツ……」

「フフツ……」

そんな二人の兄妹に楯無さんと刀奈さんは微かに笑っていました。愛息と愛娘のやり取りを微笑ましそうに見守っていたのです。宝物達が互いを認識している、可愛らしいやり取りをしている。

それだけでも嬉しいのですが今は家族団欒の時でした。今日は仕事が無いからです、ですが今はそんな事を考えたくない、更識夫婦はそう思っていました。

今は我が子達と一緒になりたい。それだけでした。すると、楯無さんと刀奈さんは互いの相手を見ます。そして笑いますが嬉しいからでしょうね。

そしてそして、流夏君、いえ、流夏君と春奈ちゃんは今日も嬉しうでした。

「な〜」

「……ム、ニユ……」

楯無さん、刀奈さんにある事を言われ恥ずかしそうですが、刀奈さんは嬉しいみたいです、

「うああ〜」

「うふふ、流夏ったら甘えん坊さんね？」

某月某日の正午過ぎ、ここは更識家の広間、そこには更識家の長男である流夏君とお母さんの刀奈さんがいました。二人は今、いえ、流夏君はお母さんにお昼ご飯を与えられていました。

人参や蒟蒻草等を使ったお粥ですが刀奈さんの手作りです。それを流夏君は沢山食べていました。刀奈さんは手にはスプーンと、もう片方の手にはお粥が少し入っているお碗を持っていました。

それで流夏君にご飯を与えているのです。

「フツ……」

「ス〜……」

近くには刀奈さんの最愛の夫であり、流夏君の父親でもありながらも胡座を掻いている楯無さんや、彼や刀奈さんの長女であり、流夏君の妹である春奈ちゃんが敷き布団の上で仰向けになりながら可愛らしい寝息を立てていました。

春奈ちゃんは兎も角、楯無さんは流夏君を微笑ましそうに見ていましたが刀奈さんはスプーンで掬った一口のお粥を流夏君の口元へと差し出しました。

「はい流夏、あ〜ん」

「あ〜」

刀奈さんが言うと、流夏君は口を大きく開けると、スプーン先端、掬いの部分を口に含みました。その後、刀奈さんはスプーンを流夏君の口から優しくとりました。

掬いの部分にはお粥はありませんでした。それは流夏君が食べているからです。流夏君は口をもぐもぐとさせていました。可愛らしい咀嚼音とも言えますが赤ん坊である為、仕方ありませんね？

「流夏、美味しい？」

刀奈さんは微笑ましそうに訊ねました。すると流夏君は……。

「……ウマツ！」

あらあら、流夏君たら嬉しそうに簡潔な感想を述べました。美味しい〜と。これには刀奈さんも微笑みますが楯無さんも微笑みました。我が子の可愛らしい声と歡ぶ姿、両親でもある彼等から見たら嬉しいとしか言えませんでした。

父として、母としての喜びを感じているのです。流夏君は「ママ〜」とお粥のおねだりをしていますがお粥はもう少しあるのです。刀奈さんは微笑みながら手にしているスプーンでお粥を掬おうとしました。

「……グスツ、うええ〜！」

あらあら、寝ていた春奈ちゃんが泣き声を上げながら起きました。これには楯無さんや刀奈さんも驚き、流夏君も驚きました。

「春奈、お腹空いたのか？」

楯無さんは春奈ちゃんを抱っこしながらあやします。春奈ちゃんは泣いていますが楯無さんは困惑していました。そんな春奈ちゃんを刀奈さんは微笑ましそうに見ながら。

「貴方、春奈を此方に渡して。貴方の言う通り、お腹空いたから上げるわ」

「判った、流夏の昼は俺がやつとくから頼む」

刀奈さんはお粥の入ってるお碗やスプーンをテーブルの上に置き、楯無さんは春奈ちゃんを刀奈さんに差し出しました。

「良々、春奈、お腹空いたのね？」

刀奈さんは春奈ちゃんをあやししながら服のボタンを外しました。一方で楯無さんはテーブルの方へと向かうとその近くに座り、お粥の入ったお碗とスプーンを手に取ると、スプーンでお粥を掬いました。

「流夏、あーん」

楯無さんはスプーンを流夏君の口元へと差し出しました。

「……………」

でもでも？ 流夏君はお母さんをジ〜ツと見ていました。お母さんは春奈ちゃんを優しく抱っこしています。春奈ちゃんに授乳し

ているのです。

春奈ちゃんはお母さんに授乳されていますが瞼を閉じています。さつきまでの泣き声が嘘のようにでした。流夏君はジーーーーツと見ていましたが、楯無さんが愛息に言いました。

「流夏、どうしたんだ?」

「あう~~~~?」

流夏君はキョトンとしていますが楯無さんは微笑んでいました。

「はは~~~~ん? さてはママのあれを飲みたいのか~~~~?」

「う~~~~?」

楯無さんは流夏君がお母さんを見ている事に気づいたみたいです。でもでも、流夏君はあれですが此の子は一年前まではお母さんの母乳が主食でした。

と言つても、大半がそれでしたけど、楯無さんは流夏君を煽ります。

「飲みたきや、ママに言うんだぞ? と、言つても、今は哺乳瓶や離乳食がメインだけだな?」

「あう~~~~?」

お父さんの言葉に流夏君は理解出来ないみたいです。まあ、彼もまた、どんな物を食べているのかは兎も角、今はお粥と言う離乳食がありました。

それに、楯無さんは今は流夏君に対して笑っていますですがそんな彼を刀奈さんは見ていましたが微笑んでいました。同時に何かを思い出したのか彼に、楯無さんに言いました。

「貴方、ちよつと此方に来て?」

「うん? どうした?」

「良いから早く、流夏、お粥、ちよつと待っててね?」

「あう~~~~?」

刀奈さんの言葉に流夏君は首を傾げます。でも、刀奈さんは軽く手招きします。楯無さんに対してでした。

これには楯無さんは首を傾げましたが彼はお粥やスプーンをテーブルの上に置くと、彼女に近づきます。

流夏君と春奈ちゃんはパパとママを見ますが楯無さんは刀奈さん

に言いました。

「どうしたんだ？」

楯無さんが言うと、刀奈さんは「耳貸して」と言いました。これには楯無さんは更に首を傾げましたが取り敢えず、刀奈さんに耳を貸すと。

「……………」

刀奈さんは楯無さんにボソツと耳打ちしました。そして……。

「……………はうつ!?」

これには楯無さんは驚きと共に徐々に顔を真っ赤にしました。そして、顔を両手で覆い隠すと、恥ずかしそうに俯きました。

「ふふっ……………」

一方の刀奈さんは頬を紅くしながらも嬉しそうでした。彼女は愛する夫の為にある事を耳打ちしたのです。それは二人にとって大切な事かつ、互いを……あらやだ、自分は何を言ってるのでしょうか!?!
だって……。

「うあ~~~~?」

「う~~~~?」

そんな二人を流夏君と春奈ちゃんは不思議そうに見ていました。どうしたの~~~~? と思っているかのかもしれません。でもでも、刀奈さんは二人を交互に見ていますが軽くウインクします。

これは私達夫婦の事よ? 流夏や春奈には未だ早いわよ? と。勿論、刀奈さんは何かに気づいています……私もそれは言えませんが。だって……言え、これは夫婦の問題かもしれませんがね?

楯無さんは未だに恥ずかしそうです。刀奈さんは嬉しそうでした。でも、流夏君と春奈ちゃんはお父さんの様子や嬉しそうなお母さんを見てキョトンとしていました。

ともあれ、今日もまた、流夏君と春奈ちゃんはご機嫌いいかどうか判らないのですが、二人はパパとママが何を話しているのかは判らないようです。

「うあ~~~~?」

「う、にゅ……………」

春奈ちゃん、大好きなお兄ちゃんに好きな人がいる事が知らないようですが、脅威とは未だ判らないみたいです。

「ウニユ……」

「ふふっ、春奈」

某月某日、此処は更識家の流夏君と春奈ちゃんの遊び部屋。そこには、少し多めの玩具に囲まれながら春奈ちゃんがお母さんの刀奈さんに抱っこされながらも甘えていました。

刀奈さんは愛娘の春奈ちゃんを見て微笑んでいますが春奈ちゃんは少し嬉しそうでした。ママを独り占め、そう考えているみたいですね？

「春奈は甘えん坊ね？ 誰に似たのかしら？」

「ニユ〜」

春奈ちゃんは更に甘えてきます。これには刀奈さんも笑いますが、ふと、ある事に気づきました。

「そうだわ春奈？ パパや流夏の所に行きましようか？」

「……ムニユ？」

お母さんの言葉に春奈ちゃんはキョトンとしていました、でも、刀奈さんは先を言います。

「パパと流夏はね？ ……フツ、それは春奈も一緒に来れば判る事よ？ 私達も行きましよう」

刀奈さんは笑いながらそう言った後、春奈ちゃんは。

「うああ〜」

あらあら？ 春奈ちゃんは笑いました。嬉しいと思っっているみたいです。春奈ちゃんの様子にお母さんは春奈ちゃんを抱っこしながら立ち上がり、部屋を出ました。

「流夏、今日はお客さんが来てるぞ〜？」

「う〜？」

その頃、楯無さんは流夏君と手を繋ぎながら通路を歩いていました。楯無さんはニカツと笑っていますが流夏君は何も解らないみたいです。さつきまでママと春奈ちゃんと居たのに、またパパと一緒にです。

無理も有りません、ママの刀奈さんは春奈ちゃんと一緒にいる為、後から来ます。本当だったら、ママと遊べる筈でしたがお客様が来た為に出来ませんでした。

そうです、実はさつき、従者の一人にお客様が来たからです。その為、二人は今、その状況だからです。

でもでも、流夏君も一緒はどうしてでしょうね？ 普通なら、お客さんはパパとママが対応します。でも、流夏君に何をさせるんでしょうかね？

楯無さんは流夏君を視て笑っていますが流夏君はキョトンとしていました。

「うあ〜」
すると、少し先の方から何かの声が聴こえました。楯無さんはそれに気付き笑いますが……。

「あう!？」
一方で流夏君は少し驚きました。そうです、流夏君は此の声に気づいたのです。それは懐かしくも、自分が大好きな人……流夏君はそれを聴いていても立ってもいられず……。

「う〜〜!」
流夏君は楯無さんから離れると、テテテテ！ と足早で其方の方へと歩きました。

「お、おい流夏!？」
これには楯無さんも困惑します。ですが流夏君は襖を開けようと背伸びしていました。でも、届かないのです。

「う〜〜う〜〜!」
流夏君は襖を開けようと、必死に手を伸ばしていました。でも、届きません。届け〜と自分に言い聞かせていました。そんな流夏君を楯無さんは苦笑いしていますがこう思っているみたいです。

流夏、そんなに彼女に逢いたかったのか？ と。勿論、流夏君にとって、あの娘は流夏君の大好きな人なのです。楯無さんはそれに気づきませんがふつと笑うと、愛息の方へと近づき、代わりに開けてあげようと思いました。

でもでも？ 彼が開ける前に、襖が開きました。流夏君が開けたのではありません、ある人が開けてくれました。それは襖の向こう側、客室に居る人がでした。

「流夏様？」

その人は楯無さんよりも年上かつ、茶色の長い髪を纏めており、琥珀色の瞳に眼鏡を掛けています。服も黄色の上着にピンクのシャツ、膝まである黄色いスカートを穿いていました。

彼女は布仏……いえ、今は五反田虚さんでした。彼女は流夏君を見てキョトンとしていましたが襖の向こう側から子供の声に反応して、開けたからです。

「うああ〜」

流夏君は虚さんを見上げていましたが虚さんは彼を見て微笑んでいました。ですが、楯無さんに気付きました。彼は自分に近づくように

「当主様」

「こんにちは虚さん、それに当主様は良いですよ？」

虚さんは楯無さんに頭を下げますが楯無さんは苦笑いしながら答えました。二人は学園で先輩後輩の立場にありますが地位は逆です。

でも、それでも友人としても接していました。それに浮気じやありませんよ？ 楯無さんは刀奈さんや家族一筋であり愛妻家。虚さんは旦那さん一筋でしっかり者のお母さんなのです。

何方も生涯の伴侶を大事にしているのです。虚さんが来たのも勿論、遊びに来た事です。彼女だけではありません、何故なら……。

「ウワアア〜」

「フアアア〜」

あらあら、幼児達の嬉しそうな声が聴こえました。その声に親達は微笑ましそうに見ていますが流夏君は部屋の中に入ります。そこに

は……。

「ウ~~~~！」

何と、虚さんだけではありませんでした。部屋には、客間には女の子の赤ちゃんもいました！ その娘は真ん中には向日葵の刺繍のされた黄色い服にピンク色のズボンを着ています。

顔立ちは虚さんに似ていますがお父さんの面影もありました、赤髪がかった茶髪に琥珀色の瞳が特徴的な女の子の赤ちゃんでした。そうです！ この娘は五反田濡ちゃん！ 虚さんの長女であり流夏君の幼馴染み！

そうです！ 流夏君が声に反応したのも、彼女の声だと言う事に気付いたので！ 同時に……あらら!? 二人共、あまりの嬉しさに抱き合ってしまった！

「おい流夏!?!」

「濡!?!」

これには楯無さんと虚さんも驚きますが流夏君と濡ちゃんは嬉しそうに声を出していました。

「あ~~~~」

「う~~~~」

流夏君と濡ちゃんは甘えています楯無さんは慌てて、流夏君を濡ちゃんから引き剥がそうと抱き寄せます。

「ウ~~~~!?!」

流夏君は濡ちゃんから離れません。そうです、流夏君は濡ちゃんに逢いたかったのです！ その為、それを補給する意味で甘えているのです！

「力強つ!?!」

楯無さんは愛息の行動かつ、濡ちゃんに抱き着く力が強い事に気付いていました。ですが、赤ん坊とは思えない程ですが流夏君は甘えたのです、濡ちゃんに。

濡ちゃんの方はお母さんの虚さんが流夏君から引き剥がそうと濡ちゃんを引き寄せます。

「う~~~~!」

漣ちゃんも負けじと、離れようとはしません。でもでも、赤ちゃんである為、二人は簡単に引き剥がされてしまいました。

「ウ~~~~レ~~~~!」

「ウアア~~~~」

流夏君と漣ちゃんは声を上げながら互いの相手に対し、手を伸ばしていました。

「ハハハ……」

そんな二人に親でもある楯無さんと虚さんは苦笑いしました。自分達の子供達が好きな人に対して行動している。そう気づき、思うだけでも苦笑いしか出来ませんでした。

「どうしたの? 貴方?」

すると、楯無さんの近くから声が聴こえました。その声に楯無さんと虚さんは反応し、見やると、そこには春奈ちゃんを抱っこしている刀奈さんがいました。

二人が我が子達の相手をしていた間、彼女は愛娘を連れて、此処まで来たのです。

「刀奈、実は……」

楯無さんは不意に腕の中にいる流夏君を視ます、彼は漣ちゃんに対して腕を伸ばしています。漣ちゃんも腕を伸ばしていました。

「うん? ……あつ、フツ、漣ちゃんに逢えたからかしらね?」

刀奈さんは何かに気付きますが楯無さんは苦笑いしていました。ですが、刀奈さんは流夏君が春を見せている事に微かに喜んでいました。

ませたとしか思えませんでした。流夏君は漣ちゃんが好きである事に気づいているからです。

「まあ……それに、虚ちゃんも久しぶりね?」

刀奈さんは虚さんを視ました。

「あつ、はい、刀奈さんもお久しぶりです、それに、春奈様も久しぶりです」

虚さんは春奈ちゃんを視ました。そうです、彼女等が来たのは遊びに来たのもそうですが、春奈ちゃんも視る為でした。五ヶ月ぶりです。

たが彼女達は春奈ちゃんを視る為であるのと、滯ちゃんを流夏君に逢わせる為に連れて来たからでもありました。

一方で二人は幼馴染みでもあります。今はママ友にも近いですがね？

「……………」

一方で春奈ちゃんはある場所をジッと視ていました。その先には大好きなお兄ちゃんに対して、必死に手を伸ばしている滯ちゃんを捉えていました。

滯ちゃんは未だに流夏君を視ていましたが凄く嬉しそうでした。

「……………」

春奈ちゃんは滯ちゃんを何とも思っていないように視ていましたが、この娘は気付いていないのです……何故なら、この先、流夏君を巡っての争奪戦を繰り広げる未来（可愛らしい物）が待っているからです。

でもでも、流夏君は大好きな滯ちゃんに逢えて、ご機嫌良いみたいです。

「ウフフ……！」

春奈ちゃん、滯ちゃんに嫉妬しますが、流夏君は滯ちゃんに有る事をしながらもご機嫌はいいみたいです

「それで弾さんは厳さんの教えで何とかりましたが、お玉を喰らいまして……」

「ハハハ……弾の奴、そうだったんだ」

「ええ。ですが、数馬さんとこの鈴さんも元気ですからね？」

「ああ……でもあの二人、結婚したんなんて驚いたよな〜」

「ええ、鈴ちゃんも漸と幸せを掴んだけど、少し前に産まれた狼君もいるからね？」

「そうだったな〜」

あれから数分後、更識家の客間では当主の楯無さんと、彼の妻である刀奈さん、その二人の友人かつ、刀奈さんのママ友でもある虚さんがテーブル近くに座りながら談話していました。

その話は最近遭った事ばかりの物ですが仕事に関する話は一個も有りません。それもその筈、プライベートに関する事しか話さない事に決めたのです。

理由は久しぶりの休日の仕事の話は御法度、楽しい話の方が一番良いからです。ですが……。

「でも……フフッ」

刀奈さんは何かを思うように笑うと、自分の膝の上に座っている愛娘を見据えました。そこには、刀奈さんに良く似た娘、春奈ちゃんがいました。

「う〜〜？」

春奈ちゃんは辺りをきよろ、きよろと視ていますが楯無さんや虚さんは頬を緩めてしまえますが彼等は何かを思うように視線を、同じ方へと向けるように見やりました。

そこには……。

「うああ〜」

「う〜」

そこには、近くには二人の赤ちゃんが玩具で遊んでいました。一人は楯無さんに良く似た男の子、流夏君。もう一人は虚さんの面影を良く残している漣ちゃん。

でもでも、二人は仲良く遊んでいます。積み木です。

「うあ〜」

流夏君は赤い四角の積み木の玩具に手を伸ばします。漣ちゃんもそれに手を伸ばしますが……。

「う!?!」

すると、二人の手は重なりました。これには漣ちゃんも驚きますが……。

「う〜」

あらあら、漣ちゃんったらあまりの恥ずかしさに頬を紅くしながら手を当てました。恥ずかしい〜と思っっているみたいです。流夏君が大好きだからでしょうが流夏君はと言うと。

「あう〜?」

流夏君たら、漣ちゃんの様子に気付かず、首を傾げていました。どうしたの〜? と思っっているのかもしれない。でも、流夏君には判らないみたいです。

それもその筈です、流夏君は漣ちゃんが好きでも、流夏君はそれに気付いていないのです。これには流夏君は……いえいえ、流夏君のお父さんだっって女性の気持ちは理解していませんでした。

それを、お父さんの心を驚掴みにした刀奈さんは流石と言えますが流夏君は二人の血を継いでおり、それも楯無さん、一夏さんの鈍感まで継いでしまったからです。

それでも流夏君は漣ちゃんをみてキョトンとしていましたが彼は積み木を手に取ると、それを、自分と漣ちゃんで作った物の上に置きました。

「あう〜」

あらあら、流夏君ったら手をパチ、パチと叩きながら破顔しました。完成したからです。出来た〜と思っっています。

「う〜」

漣ちゃんも気を取り直しますが完成した事に喜んでいました。二人共、嬉しそうですが共同作業で作ったからです。そんな二人に、親でもある更識夫婦、虚さんは微笑んでいました。

我が子達の嬉しい姿が何よりの宝なのです。どちらも、刀奈さんや虚さんはお腹を痛めてまで産んだ我が子を微笑ましく見ており、楯無さんは我が子が将来、自分の跡を継ぐ事に期待しているからでもあります。彼と彼女等はそう思っていますが一人、それをキョトンと見ている人がいました。

「にゅ……っ？」

それは春奈ちゃんです。この娘は流夏君と漣ちゃんを視て何とも思っていない感でした……。

「う〜……」

春奈ちゃんは何かを思ったかのように少し頬を膨らませました。嫉妬ですが可愛らしい物でした。ニイニ〜と流夏君に対して呆れていました。

でもでも、春奈ちゃんはお兄ちゃんが大好きなのです。その為、いえ、ニイニの傍にいる事が多い為、そう思っても仕方ないですからね？春奈ちゃんは少し頬を膨らましていましたが……あらら!! 流夏君、嬉しさのあまり、漣ちゃんに横抱きしてしまいました。

「にゅ!!」

「うにゅ!!」

「ふえっ!!」

「ええっ!!」

「あらあら？ やるわね流夏ったら」

これには春奈ちゃん、漣ちゃん、楯無さん、虚さんは驚きました。刀奈さんは少し嬉しそうですが流夏君の行動は赤ん坊とは思えないからです。でもでも、流夏君は嬉しいからであり、そうしたのは単なる行動でもありました。

でもでも、漣ちゃんから視れば恥ずかしいのと、大好きな人からそうされたらもつと恥ずかしいと思っていました。頬を真っ赤にして

いますが楯無さんと虚さんは顔を真っ赤にしています。

「うああ〜」

でもでも、流夏君は嬉しいのですが自分が何をしているのかは気付いていないみたいです。でもでも、澪ちゃんの事を考えていませんでした……。

「……プ〜っ！」

春奈ちゃんはお兄ちゃんの行動に愕然としていますが頬を膨らましました。嫉妬です、それも澪ちゃんに対しても、澪ちゃんは気付いていませんでした。

でもでも、春奈ちゃんは澪ちゃんに対してライバル意識を持ちましたがご機嫌は斜めでした。

でもでも、流夏君は澪ちゃんと造った物を視てご機嫌はいい物でした。

「ウフフ！」

流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、前編）

ある日の昼下がり……いえ、六時ぐらいにはなる頃、此処は更識家の玄関。

「流夏、もうそろそろ出掛けるぞ〜〜?」

「あう〜〜?」

そこには更識家の当主である楯無さんと、彼の息子である流夏君が居ました。流夏君はお父さんの楯無さんに抱っこされていますが……あらら!? 流夏君の服が変……と言うよりも、可愛らしい物でした!

彼は何時もの服ではありませんでした。彼は、流夏君は浴衣を着ていました。蒼を基調としつつも白の水玉模様がある浴衣でした。でも、流夏君はお父さんをジッと視ていました。

でもでも、お父さんも浴衣を着ていました。白を基準としつつも水色の水玉模様がある浴衣でした。正反対とも言えますがお父さんは夏をイメージした浴衣でした。

二人は玄関にいますがある人達を待っているからです。その人達とは……おや? 通路の方から声が聴こえました。

「お待ちせー!」

「ムニユ……?」

その人達は……彼の妻である刀奈さんと、その娘である春奈ちゃんでした! 二人はある事で遅くなりましたが彼等の前に来ると……。

「……………」
あらあら、楯無さん、刀奈さんを凝視していました。それどころか、頬を紅くしつつありました。何故なら、刀奈さんも浴衣を着ているからです。

水色を基調としつつも、紫陽花の花弁の模様が所々ある浴衣でした。ですが、それだけでなく、刀奈さんは浴衣が似合い過ぎたからで

す。それが原因か、楯無さんは頬を紅くしながら見惚れていました。
「……クスツ、貴方」

刀奈さんは微笑みながら訊ねました。恥ずかしいのか、嬉しいのかはわかりませんが頬を紅くしていました。

「あつ……い、否」

楯無さんは頬を紅くしながら頬を掻きますが最愛の妻の浴衣姿に言葉を失っていました。

「フフツ、流夏もよく似合うわよ?」

「うあ〜?」

刀奈さんは流夏君を視ながら言うと、彼はキョトンとしていました。でもでも、肝心の春奈ちゃんは赤ちゃん服ですが半袖でした。同時に彼女はお母さんに抱っこ紐で抱っこされていますがお母さんをジツと視ていました。

「よく似合うわよ? それにそれは特注で、流夏に合わせるように作られたのよ?」

「うあ〜?」

流夏君は未だにキョトンとしていますが刀奈さんは「フフツ」と笑いますが楯無さんを視ます。

「貴方、いつまでも私に見惚れないの」

「あつ、ああ」

刀奈さんの言葉に楯無さんは我に戻りますが、直ぐに流夏君や春奈ちゃんを交互に視ながら笑います。

「流夏、春奈、今日はお祭りに行くぞ〜」

「あう〜?」

「む、にゅ?」

お父さんの言葉に流夏君は彼を見上げ、春奈ちゃんはお父さんを視れませんがお母さんを見上げました。楯無さんと刀奈さんは笑っています。彼等は家族でお祭りに行く事になったからです。

三十分後、ここは河川敷近く。そこには多くの店や人でにぎわっていました。何故なら今日は祭日だからです。その為、お祭りがやって

いるのも祭日ですがお店は違います。

何故なら、祭日ならではのメインが夜にあるからです。

「あう〜?」

「二ユ……?」

そんな中、お祭りには彼等も居ました。更識家の面々です！ 彼等がお出掛けする先は此処だったのです！ それに流夏君は兎も角、春奈ちゃんは初めて来たのです！

流夏君は楯無さんに抱っこされていますが人混みの中で迷子にならない為でもですがはぐれない意味でも抱っこされているのです。

流夏君は辺りをきよろ、きよろと視ていました。此処何所〜?」

と思っっているみたいです。商店街とは違い、かなり賑やかだからでしょうね？ 流夏君はそう考えていますが楯無さんは笑っていました。

「流夏、覚えていないのか?」

「あう〜?」

「ははっ、まあ、覚えていないか？ それに一年に一回だからな?」

「うああ〜?」

流夏君は声を上げますが何にも判らないみたいです。でも、楯無さんは言いました。

「此処はお祭りといつて、年に一度だけの行事だ。お好み焼き、タコ焼き、綿飴、かき氷、ラムネといった飲食物もあるけど、お面や金魚すくい、射的や籤引き等のゲームもあるんだぞ?」

「うああ〜?」

楯無さんはお祭りにある物を一通り教えました。これには流夏君も流石に理解出来るかどうかはわかりませんが彼は再び辺りをきよろ、きよろします。

「うふふ、流夏ったら、判らないみたいね?」

刀奈さんが流夏君に言いますが流夏君は反応し、彼女を視ました。お母さんは微笑んでいます。彼女が不意に春奈ちゃんを視ます。

「にゅ、う……?」

あらあら？ 春奈ちゃんったら、周りをきよろ、きよろと視ていま

した。初めて見るからでしょうかね？ 何所なの〜？ と思っ
ているかもしれませんか？

「フフツ、春奈ったら、気になるのね？」

「にゅ……？」

刀奈さんの言葉に春奈ちゃんはお母さんを視ます。不思議そうに
ジツとですが刀奈さんは言いました。

「お祭りだけど……フフツ、春奈は初めてだからね〜？」

「うあ〜？」

「そんなに気になるのね？ フフツ、でも今は、ここにある飲食物は春
奈にはまだ早いけど、お母さんのので我慢してね？」

「にゅうう〜」

春奈ちゃんは声を上げますが刀奈さんは春奈ちゃんの背中を撫で
ました。

「うう〜」

あらあら、春奈ちゃんったら破顔しました。気もちいい〜と思っ
ているみたいです。でもでも、そんな春奈ちゃんを刀奈さんは微笑ま
しそうに視ていますが娘の喜んでる姿を視ているからです。

母親として愛娘の喜ぶ姿は何よりも嬉しいのです。彼女だけでは
ありません、楯無さんも春奈ちゃんを視て微笑んでいました。

「……あう？」

でもでも、流夏君はジツと視ていましたが……ふと、ある店を視て。

「……フアアア〜！」

あら？ 流夏君ったら声を上げました。それは嬉しそうな物であ
り、お父さんの楯無さんとお母さんの刀奈さんは驚きました。

「どうしたんだ流夏？」

楯無さんが訊ねますが流夏君は何か必死に手を伸ばしてしまし
た。

「うん？」

そこには、お面が何面も並べられている店が構えられていました。
その人はおじいさんでした。でもでも、おじいさんは流夏君を視て
微笑んでいますがお面はアニメ、特撮……まあ、これ以上は色々あ

れですが兎に角、沢山ありました。流夏君はそれを見ていましたが声を上げていました。

「流夏、欲しい物があるのか？」

「うああ〜」

楯無さんが言うと、流夏君は喜んだままでした。よつぽど欲しい物があるみたいです。どれも良いのですが一応、楯無さんは流夏君を、刀奈さんは春奈ちゃんを連れて、店の方へと近づきました。

「いらっしやい！」

おじいさんが彼等に言いますが流夏君はお面をきよろ、きよろ視ていました。どれが良いかな〜と思っっているみたいです。

「ゆっくり視なよ〜どれも良いからな？」

おじいさんは流夏君に対して優しく言いました。これには流夏君はあまり気にしません。彼は……おや？ 流夏君が。

「あう〜」

あらあら、流夏君ったら、それを教える意味で、あるお面を指差しました。とてもとても小さな人差し指は一面のお面を指しています。楯無さん、刀奈さんは流夏君が指したお面を見やりました。因みに春奈ちゃんはお母さんを視ていましたが喜んでいました。

それは、バイクに跨がる特撮ヒーローのお面でした。流夏君はそれを気に入っているのか声を上げていました。

「う〜う〜う〜」

流夏君は嬉しそうにそれに手を伸ばしていました。掴みたいみたいです。届け〜と必死でした。でもでも、それは楯無さんが抱っこしている為、届きませんでした。

そんな彼に楯無さんと刀奈さんは微笑み、春奈ちゃんはお兄ちゃんが何をしているのかを気にしていました。首があまり回らない為、横を向いていました。

「流夏、欲しいのか？」

「あう〜」

楯無さんが言うと、流夏君は嬉しそうに応えました。楯無さんは微笑んでいましたがおじさんを視ます。彼は微笑んでいますが流夏君

を視ているからですね。

「欲しいのかい？」

「うゝゝ」

「ほほっ、そうかそうか？」

「すみません……フツ」

おじいさんの言葉に楯無さんは軽く謝ります。でもでも、流夏君は一面のお面を欲しがっているように必死に手を伸ばしていました。刀奈さんは微笑んでいます。春奈ちゃんの背中を撫でていました。

でもでも、流夏君は、もうすぐ始まるメインイベントにどんな反応をするのかは彼には判らないのと、今は、ご機嫌は良いみたいでした。「フフッ！」

流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、中編）

「はい貴方、アーーン」

「あ、アーーン……」

あれから数分後、更識家の面々はお祭りの中にある休憩所にいました。でもでも、楯無さんは今、困惑していました。何故なら……愛妻の刀奈さんに食べさせてもらってしまいました。

彼等はお祭りで購入したタコ焼きを食べていました。ですが、刀奈さんは串で刺したままの一個のタコ焼きを楯無さんに口元に伸ばしていました。

これには楯無さんは困惑していますが逆に喜びを隠せませんでした。凜々しくも何処かお茶目な彼女の浴衣姿だけではなく、食べさせてもらう事は嬉しいとしか言いようがないのです。

そして、楯無さんは刀奈さんが差し出してくれたタコ焼きを口に含みました。

「美味しい?」

刀奈さんは訊ねます。楯無さんは軽く咀嚼していますが口内にタコの足の一部と餡が広がっていますがそれ等を全て食道へと飲み込ませると、恥ずかしそうに頬を紅くしながらも掻きながら。

「あ、ああ……美味しい」

「フフツ、恥ずかしがらないの?」

「うゝゝ」

刀奈さんは頬を紅くしながらも答えました。ですが楯無さんは頬だけでなく、更に顔を真っ赤にしました。恥ずかしいのです、食べさせてもらうのは嬉しいのですが此処はお祭り、しかも、周りには……。

「ねえ、ラムネが更に甘くなってるわい?」

「綿飴や林檎飴も甘くなってるわよ……前よりも」

「おい! コーヒーねえのか?! 自動販売機の方へと行くぞ!」

「お好み焼き……あまりしょっぱくない……」

周りに居る人達は更識夫婦の雰囲気、否、甘い空間に屈していました。彼等のやり取りが周りの人達に不幸と言う名のダメージを与えていたのです。

食している物は全て甘く感じられ、口内も砂糖のように甘く感じているからです。でもでも、元凶である二人は気付いていませんでした。同時に独り者から見れば怨みを感じられますがそれさえも気付いていませんでした。

「あう……?」

「ム、ニユ……?」

ですが、楯無さんの膝の上に居て、さつき買って貰った一面のお面を頭部の側面に付けている流夏君と、刀奈さんに抱っこ紐で抱っこされている春奈ちゃんには判らないみたいです。

二人は、更識夫婦の子供達はパパとママのやり取りの意味を知らないみたいです。だって、二人はこの光景を良く知っているからです。流夏君はパパとママが食事の時に何時もしているのを良く視ているからです。

春奈ちゃんはベビーベッドで横になっている時、パパとママのどちらかが流夏君を抱っこしながら寄り添うように見守ってくれていたからです。

その為、二人はパパとママのやり取りを良く判らないのも納得ですね? でもでも……。

「はい、アーン」

「あ、アーン」

刀奈さんは串で刺した一個のタコ焼きを楯無さんに差し出しました。これには楯無さんは頬を紅くしますが食べました。

「美味しい?」

「あ……ああ」

刀奈さんが訊ねると楯無さんは答えました。これには刀奈さんは「クスツ」と微笑みますが楯無さんは軽く目を逸らします。

「(やつべ……凄く可愛い)」

楯無さんは心の中でそう呟きました。何故なら、刀奈さんの浴衣姿が彼の理性を奪いつつあるのです。彼女は自分の愛する妻ですが似合い過ぎるからです。

たこ焼きの味は兎も角、彼は浴衣姿の愛妻が祭日に歩き回っている。周りの男性から視れば見惚れてしまうでしょうがその中で彼女持ちの人は彼女にビンタされたの言うまでもないですがね？

まあ、美男美女の夫婦ですが愛妻家と良妻賢母の二人だから良いとしますか。でも、流夏君と春奈ちゃんは二人を視ていましたが何も解らないみたいです。

「ほう、相変わらず夫婦仲は円満だな？」

「お姉ちゃん、ラブラブだね？」

すると、近くから声が聴こえ、楯無さんと刀奈さんは声がした方を見やり、更には流夏君も……。

「フアアア~~~~」

あらあら、流夏君、二人を視て破顔しました。同時に彼女等に手を伸ばしていました。一人は刀奈さんに良く似ていますが何処か大人しそうですねですが眼鏡を掛けており、水色を基準とした蒼い水玉模様がある浴衣を着ていました。

もう一人は大人の女性ですが凛々しくも楯無さんに良く似た顔立ちでした。長い髪をゴムで後ろに束ねています。白を基準とし、赤い椿の模様が幾つもありました。

そして……。

「簪ちゃん！」

「千冬姉！」

刀奈さんは自分と良く似た女性を簪ちゃんと、楯無さんは自分と良く似た女性を千冬姉と呼びました。そうですね！ 彼女等は更識簪さんと織斑千冬さん！

簪さんは刀奈さんの妹かつ、千冬さんは楯無さんの姉です。そうですね！ 彼女等も祭日に浴衣姿で来たのです。それにたまたま、更識家の面々を見つけ、近寄り、声をかけたのです！

「フフツ、久しいな？ 一夏に義妹よ？ ……まあ」

千冬さんは何故かにへらと笑います。

「流夏も久しぶりだな〜」

「う〜」

千冬さんは流夏君を視てそう言いました。流夏君は千冬さんを視て笑いながら必死に手を伸ばしていました。伯母ちゃん〜と甘いみたいみたいです。

「ふふっ、流夏め」

千冬さんは流夏君を視て笑みを零しました。何故なら千冬さんは流夏君が大好きなのです。勿論、甥っ子が出来た事に喜びを隠せないのもそうですがね？

「千、千冬姉!?! どうしてここに!?!」

楯無さんは千冬さんに訊ねました。その言葉に千冬さんは微かに不貞腐れます。

「何言ってる？ 私は祭日だから来たただけだ？ それに更識妹とは待ち合わせしていたんでな？」

「本当なの簪ちゃん？」

千冬さんの言葉に簪さんは頷きました。

「うん、織斑先生とはね。私も祭日だから……でも……」

簪さんは何かを思うように微笑みました。視線の先には刀奈さんに抱っこ紐で抱っこされている春奈ちゃんが居ました。

「春奈ちゃんも元気そうだからね？」

簪さんは春奈ちゃんを視ながら微笑みました。彼女は姉の刀奈さんが第二子を授かった事に喜びと嬉しさを隠せませんでした。ですがその第二子といえる春奈ちゃんを久しぶりに視たからです。

簪さんは春奈ちゃんを視ていました……。

「フフッ……」

あらあら、春奈ちゃんつたら、簪さんを視て恥ずかしそうに笑うとお母さんの胸の中に顔を埋めてしまいました。恥ずかしいと思っ
ているみたいです。

「フフッ、春奈つたら、簪ちゃんに失礼よ？」

「ニユ……」

刀奈さんが微笑みながら注意しますが春奈ちゃんは耳まで真っ赤にしていました。でもでも、簪さんは笑みを崩さないまま言いました。

「別に良いよ？ 春奈ちゃんは人見知り……ううん、赤ちゃんは小さい頃から人見知りが多いからね？」

「そう？ ……でもご免ね？」

「いいよ、お姉ちゃんが悪い訳じゃないし……それに」

簪さんは何かを思うようにある方を視ました。そこには……。

「ほほう……流夏は甘えん坊だなく」

「う……」

流夏君を抱き締めながら彼に頬擦りする千冬さんが居ました。彼女は頬を緩めていますでしたが威厳が有ったもんでもありません。凛々しいどころかそれさえもないのです！

でもでも、流夏君はまんざらでもなさそうです。喜んでいました。でもでも、楯無さんは困惑していました。姉の姿に苦笑いしているのです。刀奈さんも苦笑いしていますが千冬さんを視ているからでしょうね？

「あれ、一夏？ 千冬さん!？」

「刀奈様に簪様も?！」

「一夏じゃん!！」

すると、今度は数人の声が聴こえました。その声に彼、彼女等は声がした方を見やりました。

「フアアア……!！」

「ウアアア……!！」

あらあら!?! 流夏君ったら声を上げていました。が更には別の赤ちゃんの声が聴こえました。そうです！ その赤ちゃんとは濡ちやんです！

それだけではありません！ 濡ちちゃんは浴衣を着ていました！ 黄色を基調としつつも向日葵の刺繍がある物でした！ それだけではありません！

濡ちやんのパパとママである弾さんと虚さんもいました。弾さん

はラフな恰好をしていましたが虚さんはオレンジ色を基調とし、花火の模様がある浴衣を着ていました。

ですが、更には楯無さんと弾さんの幼馴染みである彼女等が居ました！ 一人は大和撫子を沸騰とさせる女性であり、黒く長い髪を一つに纏め、所謂、ポニーテールにしている女性でした。

彼女は白を基調としつつも紅い花卉の模様が幾つもある浴衣を着ていました。

もう一人は小柄ではありますが翡翠色の瞳に八重歯が特徴かつ、活発的な女性でした。長い茶髪を両側で纏め、所謂、ツインテールにしていますが薄ピンク色の浴衣を着ていました。ですが、彼女はある赤ん坊を抱っこ紐で抱っこしていました。

「ス〜〜……」

ですが、その赤ん坊は四ヶ月の赤ん坊ですがスヤスヤ寢息を立てていました。・

「箒、鈴?!」

楯無さんは彼女等をそう呼びました。そうです！ 彼女等は篠ノ之箒さんと、赤ちゃんが居るのは凰鈴音さんです！ 彼女等は楯無さんの幼馴染みですが彼女等は驚いていました。

久しぶりの再会だからです。

「ウアアア〜〜!」

でもでも、流夏君は千冬さんに抱っこされていながらも濡ちゃんに対し、手を伸ばしてました。でもでも、彼は凄くご機嫌がいいみたいでした。

「ウフフ〜〜!」

流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、篠ノ之箒編）

「それにしても、お前は良く成長したな〜立派なお兄ちゃんになったな〜流夏〜」

「う〜〜！」

あれから数分後、お祭りの休憩所には更識夫婦と二人の子供達、彼等の身内でもある二人に五反田家、幼馴染みの箒さんに鈴ちゃんと彼女の愛息でもある狼君がいました。

彼等は休憩所で休んでいましたが千冬さんは頬を緩めながら膝の上に座っている流夏君を抱き締めていました。彼女は流夏君が大好きなのです。

初めての甥っ子かつ、楯無さんと良く似ているからです。勿論、流夏君も千冬さんが大好きな為、甘えているのです。そんな千冬さんに楯無さんは言いました。

「千冬姉、そろそろ流夏を此方に渡してくれないか？」

「嫌だ」

「ハハ……」

千冬さんの即答に楯無さんは苦笑いしかありませんでした。千冬さんの子煩悩、いえ、甥っ子煩悩？ という様子にでした。周りは千冬さんの変わりように驚いています。流夏君が大好きな為、仕方ない事でした。

千冬さんは流夏君を抱き締めています。刀奈さんは言いました。

「それにしても義姉さん、流夏が好きなのは解りますが春奈はどうですか？」

「うん？ 春奈も良いぞ〜」

千冬さんは春奈ちゃんを視ようとしませんが向かい側に居る為、顔を視れません。でも、春奈ちゃんは。

「うにゆ〜」

あらあら、春奈ちゃんったらお母さんを視て破顔していました。マ
マ〜と甘えているみたいです。でもでも、刀奈さんは春奈ちゃんの
様子に気付きますが微笑んでいました。

「フフツ」

刀奈さんは微笑みながら春奈ちゃんの両頬を優しく摘むように触
れました。

「ウフフ〜!」

あらあら、春奈ちゃんったら破顔していますが遊ばれていると思っ
ているみたいです。ママと遊んでいる〜と。刀奈さんは微笑んで
いましたが簪さんも微笑んでいました。

虚さんも微笑んでいましたが彼女は自分の膝の上に座っている漑
ちゃんを視ました。漑ちゃんは流夏君を視ていましたが何処か寂し
そうでした。流夏〜と呼んでいるようにも感じられました。流夏
君には届いていないみたいです。

「漑? どうしたの?」

「うああ〜」

お母さんの呼ぶ声に反応したのか漑ちゃんほう〜と哀しそうに
言っていますが虚さんは微笑んでいました。気付いたのです、漑ちゃ
んは流夏君が好きである事に。

それは前から気付いていましたが弾さんが何かを言い出しました。

「あつ、そうだ!」

その言葉に周りは見やりますが弾さんは言いました。

「あれまで、未だ時間があるから此処は別れないか!」

「千冬姉、刀奈の所に行つてよ!」 千冬姉が居れば、何とかなるじゃん
か!」

「嫌だ! 流夏と離れたくない!」

「下らないよ!」

「ではお前が行けば良いだろうが!」

「嫌だよ!? 流夏に何か遭つたら困るじゃんか!」

「大丈夫だ！ 私が居るからな！」

「それでも心配なんだよ!？」

「ふ、二人とも、止めなよ?」

「そ、そうですよ千冬さん?」

数分後、楯無さんは自分の愛息である流夏君を抱っこしている千冬さんと口喧嘩していました。他にも箒さんと簪さんがいますが彼女等は二人のやり取りを視て困惑していましたが周りは気になっているだけでした。

事の発端は弾さんが二手に別れないかと言いだしたのです。あれまで時間がある為であり、他の出店を視る為でもでした。ですがそれはある事が原因で刀奈さんと春奈ちゃん、五反田家の三人、鈴ちゃんと狼君の方へと行く事になりました。因みに楯無さんは刀奈さんと離れ離れになった事に悔し涙かつ、元凶でもある弾さんに対し。

『弾、刀奈と春奈に何か遭ったら、覚えとけよ?』と脅し文句に近い事を言いましたが弾さんは何度も頷きながら納得しており、刀奈さんは頬を紅くしながら恥ずかしいと思い、春奈ちゃんはお母さんの様子に何も解りませんでした。

でもでも、話を戻しますが周りは姉弟の様子に驚きますが……。

「うゝゝ……」

流夏君は二人の様子に怯えていました、そして……。

「……う、うええんゝゝ!」

あらあら!?! 流夏君、何故か突然泣き出してしまいました! 喧嘩している事に気付いたのです。喧嘩は止めてゝゝと訴えているみたいですよ。

これには楯無さんや千冬さん達は驚きますが千冬さんは慌ててあやしました。

「どうしたんだ流夏? よしよしゝゝ」

千冬さんは流夏君をあやし続けましたが効果無し。

「千冬姉、俺がやるよー!」

楯無さんが流夏君を千冬さんから取り上げました。

「良々、流夏、お父さんだぞ〜?」

楯無さんは流夏君をあやしますがこれも効果無しでした。流夏君は泣き続けていますが楯無さんと千冬さんは困惑していました。流夏君は泣き続けている為、効果無しでした。

簪さんは困惑していますが……そんな中。

「全く、一夏もだらしがないな……?」

そんな中、簪さんが少し呆れながら楯無さんから流夏君を取り上げました。これには楯無さんも驚きますが簪さんは流夏君を視ながら微笑んでいました。

「大丈夫、大丈夫だ?」

「ウグツ……エグツ……」

簪さんは微笑みながら流夏君をあやしていました。そんな簪さんに流夏君は泣きながら視ていましたが簪さんは。

「大丈夫だ……誰も喧嘩しない……否、喧嘩する気は失せたのだぞ?」

簪さんはそう言いました。その言葉に楯無さんと千冬さんはハツとしました。そうです、流夏君が泣いたのは二人が喧嘩したからです。二人はその事に気付いていませんでした。

何故なら、二人は流夏君を巡って喧嘩していたからです。その為、流夏君が自分達のせいで泣いた事に気付かなかったのです。ですが、簪さんは。

「お前、中々、可愛いな……一夏と良く似ている」

「……う〜」

「そう怯えるな……私はお前が可愛いと言ってるだけだ……」

簪さんは流夏君を視ながらそう呟きました。無理ありません、彼女は流夏君を可愛いと思っただけなのです。誘拐する事なんて考えていないのです。

流夏君は簪さんを見続けていましたが簪さんは言いました。

「……せめて、お前の母親が……っ」

「簪?」

簪さんは何かを思うように言葉を閉ざしましたがそれを楯無さんは聞き逃しませんでした。少し、聴こえたのです。彼女の口から母親

と言う言葉がはつきりと。

それは何を意味しているのかを理解していませんでした。ですが、千冬さんは何かを思うように視ていました。否、気付いたのです。

彼女は自分の弟が好きである事に。しかし、彼は刀奈さんを選んだ為には彼女は失恋しているのです。未練たらたらと言いますが千冬さんは何も言いませんでした。

母親とは自分の事であり、流夏君の母親は刀奈さんではなく、箒さんだった場合でした。彼が彼女と結婚した場合、流夏君は……いえ、産まれなかったのかもしれませんが。

流夏君は楯無さんと刀奈さんの子であり、彼等の宝物なのです。その為、母親は刀奈さんであり、彼女ではないのです。酷とも言えるかもしれませんが。

千冬さんはその事に気付いていますが彼女も気付いていました。

「えっ……箒？」

刹那、楯無さんは驚きました。簪さんも驚きましたが千冬さんは何も言いませんでした。彼は、彼女等は箒さんを視て驚いていたのです。

彼女は……涙を流していたのです。

「(私は……絶対……いい人、見つける、から、な……!)」

箒さんは涙ながらに心の中で呟きました。幼馴染みであり、初恋の人である織斑一夏……いえ、更識楯無さんが刀奈さんを選んだ事は悔しいと思っていました。

母親は自分ではない事に気付きながらもそれを、母親の先でもあったであろう『自分だったら……』とは口にはしませんでした。楯無さんを心配させたくない……それだけが彼女のせめてもの気遣いでした。

そうさせたのは時間が箒さんを、彼女を変えてくれたのです、社会の厳しさや微かに残る優しさが彼女を支えてくれたのです。それだけではありません、彼女を献身的に支えてくれたのは家族です。

家族の存在があるのもそうです。しかし、一番気に掛けてくれた人がある事を、彼女は知りませんでした。その人は彼女が一番嫌う人で

もありましたが千冬さんの知り合いでもありました。

そして、彼女は千冬さんにある事を言ったのでした。千冬さんは箒さんを視て何も言いませんでしたがある人物の言葉が脳裏を過ったのです。

『ちーちゃん……箒ちゃんは大丈夫かな？ ……ううん、私が言うのもあれだけど、心配なんだ……姉らしい事はしてやれなかったからね……』

その人は寂しそうに語りました。自分のせいで彼女を困らせた。同時に、後悔もしました。自分があれを造らなければ……彼女の人生は変わっていたのかもしれないのです。

否、それは出来ませんでした。彼女は夢の為に造ったのです。しかし、その代償は大きかったのです。家族や想い人である少年と離れ離れになった事。それは過去として、最悪な事件でもありました。

それは必然だったとしても、彼女は得た物があるのです。IS学園での、かけがえのない友人達との出逢いや楯無さん——一夏さんとの再会を果たしたのです。

学園生活では様々な事件がありました騒動もありました。ですが……彼女は失恋しました。一夏さんは楯無さんを、否……楯無さんは刀奈さんを選んだのです。

彼と彼女の間には流夏君と春奈ちゃんと言う愛息と愛娘の宝達があります。彼女が失恋した切っ掛けでもありません。彼女は前に進むうとしていました。

彼女は一人ではないのと、弱い頃の篠ノ之箒でもないのです。千冬さんはそれに気付いていました。が敢えて何も言いませんでした。

彼女は変わっている。それだけでも気付いているのと見守るのも教師として、いえ、姉の友人としてもそう思ったからです。

力を貸すのは何時でも出来る。しかし、それでは彼女の為にもならないと思ったからです。

「箒……」

そんな箒さんに楯無さんと簪さんは見据えていました。が声を掛ける気配はありませんでした。周りの騒音が聴こえる中、彼等はその場

を動きませんでした。

「ウグツ、エグツ……」

そんな中、箒さんの腕の中にいる流夏君は泣きながら箒さんを見て
いましたが箒さんは泣きながらも微笑んでいました……。

番外編。元旦編、流夏君と春奈ちゃん、これからもう
機嫌がいいみたいです。

「あなた、準備はいい？」

「ああ、いつでもいいぞー流夏」

「春奈、もうすぐよ？」

「あう〜？」

「ニユ……？」

「二では、皆さん、明けましておめでとうございまーす！」

ある日の更識家、そこには新年を迎えた更識家がありました。えっ？

他のメンバーはどうしたかって？ それはそれ、これはこれ、作者の都合です。

まあ、それは置いてとして、更識家は軽く談話していました。なごやかかつ、同時に夫婦は自分たちの愛息、愛娘を微笑ましそうに見ていました。

服もお正月をイメージして、着物でした。楯無さんは袴を、刀奈さんは水色を基調とした和服を、そして……流夏君や春奈ちゃんも和服を着ていました！

流夏君は袴を、春奈ちゃんも袴を纏っていました！ 可愛らしいですぬ〜あつ、いけない、いけない！ では、本題に入らせていただきますね！

今回は新年を記念して、更識家が去年を振り返る事にしたのです！

まずは……楯無さんが口を開きました。

「あの時は泣けたよな〜」

「泣けたって、何を？」

「ああ、春奈が産まれた時だったな〜」

楯無さんは、刀奈さんの腕の中にいる春奈ちゃんを見ます。春奈ちゃんは楯無さんに気づくと、笑いました。パパ〜と笑っているかもしれませんね。

楯無さんは頬を緩めていましたが、刀奈さんが微笑みながら「貴方」

と我に返そうという意味で訊ねました。これには、楯無さんも「はっ!?!」と我に返ると、慌てて、言いました。

「あ、あの時は病院でわんわん泣いたなく息子だけじゃなく、娘も産まれたんだ」と思ってたな」

「ふふっ、その時、お義姉さんに「静かにしろ!」と怒られたんだもんね?」

「それは言わなくてもいいだろ、ち、千冬姉も喜んでいたから」
「ふふっ、そうね?」

刀奈さんは微笑みました。そうです、それは春奈ちゃんが産まれ、刀奈さんがいる病院での出来事でした。楯無さんは分娩室の前の通路でウロウロしていました。

挙動不審とも言えましたが、千冬さんや簪さん、刀奈さんの両親は細長い椅子に腰掛けていました。流夏君は千冬さんの膝の上に座りながら後ろから抱き締められていました。

千冬さんは呆れていましたが楯無さんが夫として、妻を心配している事に微かに喜んでおり、刀奈さんとそのお腹の子が無事である事を祈っていました。

流夏君はジツと見ていましたが千冬さんは「大丈夫だぞ、流夏、もうすぐお兄ちゃんになるんだぞ?」と笑っていました。流夏君はジツと見たままでしたが解らないみたいでした。

そして……おぎやあ、おぎやあ! と分娩室から赤ん坊の泣く声が聴こえたのでした! これには簪さんや刀奈さんの両親、千冬さんも驚き、流夏君は「あう!?!」と驚きました。

そして、楯無さんは驚きつつも、分娩室から中年の助産師が出てくると、彼女は微笑みながら「おめでとうございます、元気な女の子でしたよ」と言いました。

これには周りも喜びますが、楯無さんは泣きながら「ありがとうございます」
「ありがとうございます」と何度も言っていたのでした。

「凄く嬉しかった、刀奈が無事もそうだけど……春奈も産まれたから」
楯無さんは刀奈さんの腕の中にいる春奈ちゃんを見詰めます。春奈ちゃんは「うにゅ?」とキョトンとしていました。どうしたの

？　と思っっているかもしれませんね？

「ふふっ、そうね」

「ああ……あつ、そうだ。刀奈、実は面白い事があつたんだ」

「えっ、面白い事？」

「ああ、実は……」

楯無さんは話を始めました。それは、春奈ちゃんが産まれてから三ヶ月後、流夏君が幼児だけ参加出来る遊び場の時でした。

その時は刀奈さんは春奈ちゃんを見ている為にお留守番ですが、楯無さんと、休日だった為に伯母バ……おほん！　伯母の千冬さんも一緒に行った時です。

その時は何ともなかったのですが、お母さん方は楯無さんと千冬さんを見て、驚きを隠せなかったのです。有名でもありますが、二人のお子さんを持つ父親としても、彼の姉である彼女だから有名なのです。

でもでも、流夏君は大変な事になっていたのです。流夏君は周りの、特に女の子の幼児達から見られていたのです。中には恥ずかしそうに顔を真っ赤にしている娘もいたのです。

流夏君は気にもせず、遊んでいましたが楯無さんと千冬さんを見て破顔しました。これには千冬さんは顔を真っ赤にしながら頭から湯気を出しながら倒れそうになったのです。

楯無さんが慌てて支えますが、周りの女の子幼児達も恥ずかしそうに顔を両手で覆い隠したり、うくと声を上げていました。お母さん達は自分の娘達の様子に慌ててしまいました。何故そうだったのかは、判らない……訳ではありませんでした。

流夏君を見ていた事に気づいたのですが、全員、彼に惚れたかどうかは定かではありませんでした。

「あれは大変だったなく千冬姉を介抱しながら流夏を見ていたからな
〜」

「うふふ、そんな事があつたのね？　流夏、貴方も中々やるわね？」

刀奈さんは笑いながら、楯無さんの膝の上に座っている流夏君を見

ました。

「うう〜?」

流夏君はキョトンとしていました。どうしたの〜? と、思っているかもしれないね? 流夏君、貴方も罪な男の子ですね?

刀奈さんはそう思いながらも、ある事に気づきました。

「あつ、そうそう、私も大変だったわよ?」

「えっ? どうしたんだ?」

楯無さんが訊ねると、刀奈さんは微笑みながら春奈ちゃんの頭を撫でました。

「うにゅ〜?」

春奈ちゃんはお母さんの行動にキョトンとしていましたが、徐々に笑顔を浮かべました。刀奈さんの手の平の温もりがとつても大好きだったからです。

刀奈さんは微笑みますが口を開きました。

「あの時、春奈ったら私から離れようとはしなかつたもんね〜?」

「うにゅ?」

刀奈さんは、ある事を思い出しました。それは春奈ちゃんが産まれて四ヶ月。あの赤かった肌も肌色になり、徐々に笑顔を浮かべるようにもなっていた頃です。

その時の春奈ちゃんは可愛らしかったのですが……春奈ちゃん、お母さんから離れようとはしませんでした。楯無さんが抱っこしようとして剥がそうとしても、赤ちゃんらしくなく、力があつたのです。

楯無さんは苦笑いしていましたが結局、刀奈さんに抱き締められながら寝る事が何度も遭つたのです。

「春奈ったら、お母さんが大好き過ぎて、お母さんは困つたのよ?」

「うにゅ〜?」

「フフツ、判らないかもしれないけど、私は嬉しいわよ?」

刀奈さんは喜んでいますが母親として、過日、愛情を注いでいたからね? それが春奈ちゃんに伝わったからです。春奈ちゃんは当たり前前の事を下に過ぎないでしょうがそう思われていますからね?

そんな妻と娘を楯無さんは微笑ましそうに見ていました。

「あう〜？」

おや？ 流夏君ったらジツと見ていましたでしたが声を上げました。

「どうしたんだ流夏？」

楯無さんが訊ねても、流夏君は何も言いませんでした。

「あう〜」

あらあら、流夏君ったら、刀奈さんに対して、必死に手を伸ばしています。ママと甘えたいみたいです。これには刀奈さんも微笑みませんが楯無さんも微笑みました。

「ふふっ、流夏ったら」

刀奈さんは気づくと、春奈ちゃんを楯無さんに差し出します。

「はい、貴方」

「あつ、ああ」

楯無さんは気づくと、春奈ちゃんを抱き締めました。これには春奈ちゃんも喜びます。パ〜と破顔していました。楯無さんは頬を緩めますが流夏君は……。

「あう〜」

刀奈さんに抱っこされていました。ママと甘えていました。刀奈さんは微笑みますが嬉しいのです。ですが、更識夫婦と兄妹、彼等の日常は終わった訳ではありません。

これからも始まるからです。そして今日も、元旦でも流夏君と春奈ちゃんはご機嫌がいいみたいです。

「うふふー」

「にゅ〜！」

流夏君、大好きなヒーロー物の続きが気になり、ご機嫌は良くないみたいです。

ある日の夕方、ここは更識家の広間。広間には更識家の人達がいま
した。ですが……。

「う~~~~や~~~~」

更識家の長男、流夏君が目を輝かせながらテレビを観ていました。
そして、彼が観ているのは……。

『バトルライダーキック!』

テレビには数人の全身白タイツに囲まれながらも戦う、赤い人がい
ました。

夜六時半から放送されている、男の子に大人気アクションヒー
ロー、バトルライダー。

マフラーを付け、バイクに跨がる特撮ヒーロー。悪い奴を挫き、弱
き者を助ける正義のヒーロー。

流夏君はそのヒーローに釘付けであり、ファンでした。その証拠
に、手にはソフビ人形を持っており、それもバトルライダーでした。

流夏君は観続けていましたがこれは再放送であり、過去の話でも
あったのです。

そんな流夏君に両親の楯無さん、刀奈さんは微笑ましそうに見てい
ました。春奈ちゃんは刀奈さんの腕に抱かれていましたが授乳され
ていました。

「ふふつ、流夏、相変わらずバトルライダーが好きね」

刀奈さんは流夏君に訊ねますが流夏君はテレビを観ている為、訊い
ていませんでした。

それだけ、バトルライダーに集中してるみたいです。

「ははっ、流夏の奴、すっかり気に入っているみたいだな?」

お父さんの楯無さんが流夏君の頭を撫でます。流夏君は楯無さん
の行動に気づき見上げますがキョトンとしていました。

「あ~~~~?」

「ははっ、まだまだおこちやまだな？」

「う〜」

流夏君はキョトンとしましたが直ぐにテレビの方を観ます。画面にはバトルライダーが白タイツの人達を全員倒しましたが禍々しい怪人と一騎打ちしていました。

そして、バトルライダーは怪人に崖に落とされそうになっていました。それを観た流夏君は慌てて。

「う!?! う〜っ!」

流夏君はテレビに近づき、画面を叩きます。止めろ〜! と訴えているみたいです。

「お、おい流夏!?!」

楯無さんは流夏君の行動に驚き、慌てて流夏君を止めます。流夏君はやめませんが必死にバトルライダーを助けようと怪人を叩いていました。

刀奈さんは苦笑いしていましたがナレーションが流れました。

『大ピンチバトルライダー! バイトテロネズミの猛攻により、絶体絶命に陥ってしまった! はたしてバトルライダーはショックのフレンドマートのバイトテロによる壊滅攻撃作戦を止める事は出来るのだろうか!?!』

そして、続く、と。画面は切り替わり、次回予告が流れました。

「う〜!?!」

流夏君はショックを受けました。危ない状況の中で終わってしまったのです。しかし、流夏君には分からないみたいでした。

「う〜う〜!」

流夏君は画面を叩きますが次回まで持ち越しの為、出来ませんでした。楯無さんは苦笑いしながら彼を引き寄せます。

「流夏、もう終わったんだから、諦めろ」

「う〜」

流夏君は少し悲しそうに唸っていました。

「フッフ流夏、仕方ないわよ?」

「そうだぞ? 再放送だからまた放送されるし、それまで待てるか?」

「う〜」

流夏君はまだ唸っていますますが再放送と言っても一週間後です。それに、台風や緊急速報、野球中継で急遽中止することもあります。

最悪、二週間後と言う事もありますますが流夏君は待つ事は出来るかどうかも彼次第なのです。

「う〜〜ら〜」

「ハハハ……」

流夏君はテレビを観ます。画面にはニュースが流れていますがバトルライダーの事が頭から離れる事は出来ませんでした。

「う〜〜ん、流夏、ふう……」

楯無さんは頭を掻きますが流夏君がこのまま、テレビからはなれる事は出来ないと感じました。

すると、刀奈さんはある事を思い出したのです。

「そうだわ貴方、明日休みでしょ？」

「えっ？ 明日は休みだけど、それがどうしたんだ刀奈？」

楯無さんは刀奈さんを見ます。彼女は微笑みながら。

「実は明日、タツヤが半額セールをやってるのよ。そこでバトルライダーを借りたらどうかしら？」

翌朝、ここは大型ビルが並ぶ中、沢山の車が走る道路。その中には楯無さんと流夏君、運転手の三人が乗ってる黒い高級車が走っていました。

「成る程、奥様にDVDを借りてきたらと言われたんですね？」

「ああ、ごめんな」

「いえ、おきになさらずに……それよりも」

運転席には運転手、助手席には楯無さんが座っていましたが二人は会話していました。すると、運転手は何かを思い出したかのようにミラーのほうを見ます。

そこには、後頭部座席にはチャイルドシートに座りながらも暗い顔をしている流夏君がいました。一言も喋らず、いつものあく〜う〜う〜と言わないのです。

「流夏様はいつもあんなで？」

「いや……まあ、バトルライダーのことだな？」

「成る程、まあ、借りてくれば、それでよろしいのですね？」

「ハハハ……そうしてくれ、タツヤはもうすぐか？」

二人は苦笑いしながら会話していましたが車をタツヤに向けて走らせていました。

「よしよし、ぱくく」

「きやつきやつ」

そのころ、更識家では刀奈さんは春奈ちゃんと遊んでいました。二人はお留守番ですが刀奈さんは春奈ちゃんと遊べて、嬉しいのと、春奈ちゃんはきやつきやつと笑っていました。

そして今日は流夏君はご機嫌斜めで、春奈ちゃんはご機嫌がいいみたいでした。

流夏君、パパに逢えてご機嫌はいいみたいですが、騒動を起こした事は知らないみたいです。

「キヤアア〜〜！」

「織斑様〜〜っ！」

「握手して〜〜！」

「み、みなさん！ 落ち着いてください！ ちゃんと対応しますから！」

あれから数分後、楯無さんはファンに囲まれていました。実は楯無さんは流夏君の為にバトルライダーを借りようと運転手の松岡さんと言う男性と一緒にレンタルビデオ、タツヤに来たのです。

しかし、楯無さんの事を知っているファンが楯無さんに気づき、叫んでしまい、こうなってしまったのです。

楯無さんはファンの人達に囲まれていましたが流夏君と松岡さんは離れた場所にいました。彼らは楯無さんにファンが来たから先に行っててくれと言われたのです。

「あう？」

流夏君はお父さんが沢山の人に囲まれている事に疑問を抱き、首を傾げました。どうしたんだろ〜？ と思っていました。

「ははっ、流夏様、私たちは先に入りましょう？」

「う〜〜？」

「ははっ、大丈夫ですよ、ささっ」

松岡さんは流夏君を連れて、店内へと入りました。

「フアアア〜〜！」

あああら、流夏君ったら店内に入るや否や、目を輝かせながら声を上げました。

店内には何百ものDVCとCD、アクション、ホラー、SF、恋愛と言った様々なジャンルに別れながらも棚全体を埋め尽くす程、ありました。

店内には人が沢山いました。数人の店員さんに、大半お客さんが大半です。お子さん連れや一人、カップルもいました。

お目当ては何かは分かりませんが流夏君もお客様なのです。

流夏君は未知の世界に入ったと感じていましたが流夏君を抱っこしている運転手、松岡さんは微笑んでいました。

「流夏様、気になるようですがお目当ての物はアニメコーナーにありますよ?」

「あう?」

「分からないのも無理はありませんが、そこまで連れて行きますね?」

松岡さんはそう言った後、流夏君を連れて、アニメコーナーの方へと歩きました。

「う〜あう?」

すると、流夏君はある物を見て、指差します。

「どうしましたか?」

松岡さんは立ち止まり、流夏君が指差した方を見ました。

「……っ!」

おや? 松岡さん、突然、声を上げると徐々に顔を真っ赤にしました。そして、慌てて足早で離れます。

「り、流夏様、あ、あれは知らない方がよろしいのです! ま、まだ早いのですよ!」

「う〜?」

「さっつ! 早くアニメコーナーへと行きましょう!」

松岡さんはそう言いながらも恥ずかしそうでした。彼が、流夏君が指差した物の正体を知っているからです。

……あら、私も言えません……! だって、あれは……ピンクの暖簾でしたから……。

「う〜」

「さっつ、バトルライダーと言う物を探しましょう」

流夏君は松岡さんと一緒にアニメコーナーの方へと来ました。そこには数人の子供達がいきましたがなぜか大人もいました。

大人が借りる物は色々ですがここは省略させていただきます。流夏

君は松岡さんに抱っこされたまま歩きました。

「えつと……ビツクマンに、戦隊もの……あつ、あつた」

松岡さんは流夏君を抱っこしたまま探しました。途中、アンマンマンやジャガえもんと言うアニメもありましたが流夏君の目的はバトルライダーです。

流夏君もレンタル物を始めて目にしますが松岡さんはある物を手に取り、それを流夏君に見せました。

「う〜!?」

流夏君はある物、DVDを見て驚きました。そして、ニパツと笑いました。それはバトルライダーでした！ 流夏君は昨日の事もありませんでしたがとても嬉しそうです！

流夏君は手を伸ばしますが松岡さんは微笑みながら。

「落ちて置いて下さい流夏様、私が確認致しますので」

松岡さんは流夏君を抱っこしたままDVDの背面を確認しました。

『ポイ捨ては禁止！ ポイステポークの豚になるビームが飛ぶ！』

『やつさんの怒り！ キャクビキギユウの騙しの人さらい！』

『抹茶を使ったホワイトケーキ消滅の危機！ カビダシゴキブリの

悪質行為！』

『俺は風評被害だ！ ヒボウバエの魔の語り！』

背面にはそう書かれていました。しかし、それを見た松岡さんは。

「下らねえ作戦ばかりだなおい……」

松岡さんは色々突っ込みたかったです。しかし、怪人のデザインはなぜか良い物ばかりで、題名は色々とあれですが松岡さんはこれじゃないと思いませんでした。

「あう?」

「あつ、流夏様、これじゃないみたいです」

松岡さんは流夏君を降ろしました。流夏君はその場で立ちますが松岡さんは。

「私が探しますが流夏様はその場を動かさないでくださいね?」

松岡さんは流夏君が見たい物を見つけるべく、探し始めました。しかし、バトルライダーは全部で50巻もあり、見つけるのは、一苦労

です。

「……………う〜」

でもでも、流夏君から見れば暇でしょうがないのです。流夏君は少しほおを膨らませますが辺りを見渡します。

周りには人がいますが自分よりも年上の子供達もいました。皆、お目当ての物を探しています。流夏君は待っているだけです。

松岡さんは流夏君の為に探している為、相手にする暇はありませんでした。

「う〜」

流夏君は暇と思い、そしてパパを捜しに行こうとその場を離れてしまいました。

「これでもない…：えっ？ 『器物破損は悪い事！ モノコワシコウモリの破壊電波！』、色々と凄いな、おい」

松岡さんはバトルライダーの物をまだ探していました。それも、流夏君に気づかず、気づくのはまだまだ先でした。

「あ〜」

流夏君は店内を歩いていました。皆、DVDを探していますが借りたのを決めた人や、まだ悩んでいる人もいました。

流夏君から見れば関係ないのですが彼は一通り歩いていました。

理由は色々ですがパパを捜しているのです。でもでも、どこにもいませんでした。

まだファンに囲まれているのかな？流夏くんから見れば分かりませんが、そうかもしれませぬね？

「……………」

すると、流夏君はある物に気づきました。それは、松岡さんが教えず、そして気になっていた物でした。

あれはなんだろう？ 流夏君はそう思っていました。でも、あれは濡ちゃんの店にある物と全く同じ物でしたが色はピンクでした。それも十八と書かれていたのです。

それは…：あら、いやだ！ 私は何を言ってるのかしら!? だって

それは……あらあら！ 流夏君が……！

「……………パパ〜？」

流夏君は気になっていましたがテクテクとピンクの暖簾の方へと入って行きました！ 大変です！ このままじゃ流夏君が！

「流夏様ーっ！ 流夏様ーっ！」

その頃、松岡さんはバトルライダーを捜している最中、流夏君がいなくなった事に気づき、流夏君を探していました！ 必死に彼の名を叫びながら走っていますが流夏君はいません。だって彼は……しかし、松岡さんは青ざめているのです。

「どうしよう……このまま流夏様に何か遭ったら……！」

松岡さんは最悪の展開を予想してしまつたのです。流夏君が誘拐される……それでは楯無さんや刀奈さんの怒りを買ひ、悲しみに暮れさせてしまうのです。

流夏君は大切な更識家の長男。無垢な存在で自分たち部下にも可愛がられる存在。それを……松岡さんはそう思つてしまいました。

「流夏様……!？」

松岡さんは、ふと、ある物を目撃しました。それは。

「あつ、ま、まさか……！」

松岡さんは顔を真っ赤にしました。それは、彼自身も気づいていましたが流夏君がさっきまで気になっていた物でもありました。

でもでも、流夏君がそこにいる可能性も高いのです。彼はそこにいるのか？ 否、そこにいる事を願いたい。松岡さんはそう思い、ずっと見ていました。

「ねえママ〜あの人が、ずっとあれを見てるよ？」

「しっ！ 人を指差しちやいけませんし、見てはいけません！」

近くにいた親子連れが松岡さんを見ます。しかし、松岡さんは一瞬だけビクツとしますが顔を真っ赤にしていました。

「(ヤバイ……このままいたら、私があれば借りると思われてしまう……!)」

松岡さんはそう思いました。ですが、流夏君を見つけるのが先であ

り、松岡さんは。

「(いや……! 流夏様を見つけるのが先だ! ここは、男らしく!)」
刹那、松岡さんはピンクの暖簾の方へと向かい、いざ! 男たちの
花園……いやいや、流夏君を探しにゴー! でした。

ですが……松岡さんが暖簾をくぐった直後……

「あう?」

流夏君がいました! それもピンク暖簾の方とは少し離れた場所
で歩いていたのです! そうです! 流夏君はあの時、入ってすぐに
出たのです! そして、パパを捜そうと辺りをうろついていたのです
!

松岡さんはそれに気づかず、流夏君がまだあの中にいると思い、探
していました。

「あれ? 流夏?」

「う? ファアア……!」

流夏君に声をかける人がいました。そうです! 楯無さんでした
! 彼はファンたちの相手から何とか終わり、戻ってきたのです!

彼は流夏君と松岡さんを捜していましたが流夏君に気づき、声をか
けました。

流夏君はお父さんと逢えて嬉しいみたいですですが必死に手を伸ばし
ていました。楯無さんは微笑みながら流夏君を抱っこします。

「ファアア……」

流夏君はお父さんに抱っこされていますが甘えていました。やつ
と逢えたからです。楯無さんは松岡さんに気づきます。

「あれ? 松岡さんは?」

楯無さんは松岡さんが近くにいない事に気づきました。

「流夏様……っ! 流夏様……っ!」

「えっ!」

楯無さんはピンクの暖簾の方から叫び声が聞こえた事に驚きます。
そうです、松岡さんは未だに流夏君を探していました。まだそこにい
ると思っっているみたいですが楯無さんは困惑していたのです。

「ど、どうしたんだろう、松岡さん?」

楯無さんは松岡さんの行動に戸惑いますが流夏君は未だに楯無さんに甘えていました。

「流夏様ーっ！ 流夏様ーっ！」

その頃、松岡さんはピンクの空間の中、泣きながら流夏君の名を叫びながら走っていました。周りも彼の行動に驚きましたが松岡さんは気にもせず、鼻水をたらしながらも涙目になりながらも叫んでいました。

「流夏様ーっ！ ううつ、ひくっ！ 流夏様ーっ！」

松岡さんは叫んでいましたが流夏君はお父さんに逢えて、ご機嫌はいいみたいでした。

「ウフフ〜〜パ〜〜！」

滯ちやんと春奈ちゃん、流夏君を巡って戦いましたが、負けたみたいです。

ある日の昼、更識家の流夏君の遊び部屋。

その部屋には積み木や馬のおもちゃ、バトurlライダーのソフビなどが在りました。

幾つ在るかは変わりませんでした。が異様な雰囲気となっていました。

醸し出されるオーラは二つ、禍々しいと言うよりもどこか何とも言えませんでした。

部屋には大人は居ません、では、居るのは誰ですかね？

もちろん、流夏君と春奈ちゃん……滯ちゃんも居ました。

滯ちゃんは虚さんと一緒に遊びにきたのです！ 大好きな流夏君と遊べて嬉しい筈がライバルでもあるお兄ちゃん子の春奈ちゃんもいました。

どちらも互いに向ける目は恨めしそうでした。でもでも、どちらも流夏君を奪うライバルと思っている為、互いを敵だと認識していました。

二人からは、滯ちゃんからは虎の赤ちゃん、春奈ちゃんからは龍の赤ちゃんがでているようにも思われますがどちらも知らんぷりでした。

でもでも、そんな二人に対し、流夏君はのんきに遊んでいました。そして、二人の対決が今始まりました（何度めですかね？）！

第〇〇ラウンド！ 流夏君の気をこちらに向かせる！ です。

流夏君は今、楽しくバトルライダーのソフビ人形と積み木で遊んでいて、二人には気づいていません。彼女たちが、片方が自分に思いを寄せ、もう片方は自分が大好きなお兄ちゃん子。

彼がそれに気づくのはいつになるのやら、同時に彼は楯無さんの鈍感、気づかぬうちに女性を虜にする笑顔をさせる等の行動をするのです。

父親の血を強く受け継いでいるのと、それが彼女らに対立させる事
にしているのに気づいていないのです。

話を戻しますが流夏君がメインでは在りません、これは五反田澪
ちゃん、更識春奈ちゃんの仁義なき対決なのです！

どっちが流夏君を良く理解しているのか、どっちが流夏君を知り尽
くしているのか、それを知るチャンスでもありました！

同時に、二人の心境を、彼女らがこう語りました（嘘です）。

「わ～～りゅう～～わ～～ま～～」（私が流夏を良く知りちゆくしてい
る！ 私が負けりゆわげが無い～～！）

「う～～う～～」（いいには私が良く知っていいりゅ！ 私が勝ちゅ！）
彼女らはこう語りました。なんて言っているのかは判りませんが
どっちも流夏君を見ています。

どちらが動くのかは、彼女たちの行動次第です。最初に動くのは負
け、それともかつか、それは彼女らにしか判りませんでした。

「う～～」

あら？ 先に動いたのは澪ちゃんです！ 澪ちゃんはトコトコと
可愛らしく歩くと、流夏君の隣に座りました。

流夏君は澪ちゃんを見ます。澪ちゃんは恥ずかしそうに見ていま
すが流夏君はキョトンとしていました。

どうしたの～～？ と思っていました。澪ちゃんは恥ずかしそう
にしていますが流夏君を振り向かせる為、彼女は。

「う～～りゅ～～」

あらあら!? 澪ちゃんは片目だけでも閉じようとしていました。
澪ちゃんは何をしているんでしょうか？

顔を真っ赤にして、目を片目だけでもぴくぴくと動かしていまし
た。ですが、とつても難しく、う～～と言いながらなんとかしよう
としていました。

ですが両目を閉じ、ほおを膨らませ、体をぴくぴくとさせていたの
です、それだけでも可愛らしいのに……いえ、澪ちゃんはある事をし
たがっていました。

澪ちゃんがしたい事、それは片目でウインクしようとしていたので

す。どこでそれを知ったのかは五反田家で過ごしている中、お母さんの虚さんがお父さんの弾さんに対し、ウインクした為でした。

弾さんは恥ずかしそうでしたが虜になっていました。漣ちゃんから見れば、なんでそんな事で顔を赤くしているのかは判りませんでした。でも、これならば流夏君を落とせると思い、思い出したのです。

漣ちゃんは何とか流夏君の気をこちらに向けさせようと思いました。これで勝てりゆう！ そう確信しました。

「うああ〜？」

漣ちゃんがそんな事をしているのに気づいていない流夏君はキョトンとしていましたが流夏君は手を伸ばし……。

うにゆう!? 漣ちゃんは顔を真っ赤にしながら驚きの声を上げました！ 流夏君のある行動が彼女を驚かせ、理性を奪うような事をしていたのです！

漣ちゃんから見れば驚き、春奈ちゃんは口を上げながら愕然としていました。周りから見れば微笑ましく、異性から見れば一撃必殺の行動！

それは……流夏君が頭を撫でていたからでした！ 流夏君の必殺技であり、何気ない行動でした！ これには漣ちゃんは……。

「ウ〜〜！」

漣ちゃんは顔を真っ赤にしながら横向けに倒れました。目を回していますが気を失っていました。惚れさせるつもりがこちらが惚れさせられた。

漣ちゃんはそれに気づくのは遅くは在りませんでした。流夏君は漣ちゃんが倒れた事に対し、首を傾げました。何にも判らないみたいでした。

どうして倒れたんだろ？ 流夏君はそう思っていますね。そんな中、春奈ちゃんは頬を膨らませていました。いいな〜〜と思っっています。さすがにニパツと笑いました。

これで勝てりゆう！ そう確信し、四つん這いで流夏君に近づきました。とっても難しいみたいですが春奈ちゃんは流夏君の妹として、一番近くに居るのは自分だと意味させる為にも何とかしようとしてい

ました。

そして、澪ちゃんの向かい側に着くと、流夏君の横に抱きつきました。春奈ちゃんの必殺技、それは甘える攻撃でした！ 春奈ちゃんがそれをやったのはお母さんの刀奈さんが何時も、お父さんに抱きついて甘えていたからでした。

楯無さんは恥ずかしそうでしたが受け止め、甘え返していたのです。春奈ちゃんはそれで流夏君を落とそうと考えました。でもくく。「うにゅ？」

流夏君は何も判らず、首を傾げていました。妹の行動が判らないみたいです。鈍感でもあります。赤ちゃんの行動は想像もつかない程、何かを考えますからね。

流夏君は春奈ちゃんを見ていますが春奈ちゃんは何とか落とそうと顔を真っ赤にしています。

「うああ〜」

あら!? 流夏君ったら、春奈ちゃんに対し、一撃の技を繰り出しました！ それは春奈ちゃんにとって、驚きと恥ずかしみを与える出来事でした。

澪ちゃんも受けましたが春奈ちゃんも犠牲となったのです！ これには春奈ちゃんもうくくと言いながら横に倒れました。顔を真っ赤にし、目を回していましたが気を失っていました。

頭を撫でられたのと、嬉しいと言うよりも恥ずかしかったのです！ 澪ちゃんと春奈ちゃんは流夏君の必殺技を受けましたがどちらも起き上がる気配はありませんでした。

流夏君は二人を交互に見ますが首を傾げました。すると、ふすまが開き、更識夫婦と虚さんが部屋に入ってきました。

「えっ!? 春奈どうした!?!」

「澪!?! どうしたの!?!」

楯無さんと虚さんは互いの娘に駆け寄り、抱っこしました。二人はうくくと声を上げていましたが目を回したまま、顔を真っ赤にしたままでした。

楯無さんと虚さんは戸惑いますが刀奈さんは流夏君を見て笑いま

す。

「ふふっ、流夏ったら」

刀奈さんは何かに気づきましたが何も言わず、流夏君を抱っこしました。流夏君は笑っていましたが甘えていました。ママが大好きだからです。

でもでも、流夏君は自分の行動で二人を虜にした事には気づいていませんでした。将来が心配ですがどうなるのかは彼次第でした。

それはさておき、流夏君は今日もご機嫌はいいみたいですが、春奈ちゃんと濡ちちゃんは恥ずかしいみたいでした。

「ウフフ!!」

「ウ~~~~~~~~っ!」

第〇〇ラウンド、引き分け！　そして勝者、更識流夏！

流夏君、パパとママに対して恥ずかしい思いをさせているのに気づかないみたいだけど、ご機嫌はいいみたいです。

「あむっ〜」

「ふふっ」

ある日の更識家の昼食。そこには、リビングには更識家の面々が昼食を摂っていました。

献立は珍しく鯖味噌、煮物。茄子やタマネギ、人参などの色とりどりの野菜を使ったみそ汁等が並べられていました。

楯無さんや刀奈さんが食べています。流夏君は離乳食のカレーを食べていました。スプーンを使っていますがお口周りはドロドロ、それでも美味しそうに頬張っていました。

楯無さんも嬉しそうに見ていました。一方で春奈ちゃんはお母さんの胸の中でスヤスヤと寝息を立てていました。みんな、それぞれ昼食を摂っていました。刀奈さんが言いました。

「流夏ったら、美味しそうに食べてるわね？」

「うああ〜？」

「ふふっ、褒めているのよ？ 貴方を見ていたらこっちも嬉しいわよ？」

刀奈さんは流夏君に笑いかけました。お母さんとして嬉しいからです。子供は沢山食べた方が良い。我が子だと尚更そう願っているからです。

楯無さんは「そうだと流夏〜」と笑います。

「お前が沢山食べるのは嬉しいからなく〜流夏は俺たちの大切な宝だからなく〜」

「うああ〜ツ？」

「ふふっ、貴方、春奈も忘れないでよね？」

刀奈さんは腕の中にいる春奈ちゃんを教えました。春奈ちゃんはスヤスヤと寝息をたてていました。お母さんの腕の中が気持ちいい

からでしようかね？

自分たちがそう思っても、彼女のお父さんとお母さんはそう思っていますね、きつと。楯無さんは微笑むと頷きました。

「ああ。春奈も俺たちの大切な宝だ……俺は、否、俺たちが支えなければな！」

「ええ。私たちは親として、二人に愛情を注がなきゃね！」

「おいおい、俺たちちって言っても千冬姉や松岡さんたちもいるだろ？」
「ふふっ、そうね」

二人は頷き合うと、笑い合いました。仲のいい夫婦だけでなく、子供を守る親としてもそう決意していました。松岡さんたちもいすが一番の愛情を与えるのは自分たちの役目、そう思っていました。

二人の出会いには色々ありました。恋人となり、結婚し、互いに支え合いながら今があるのです。そんな二人の絆は固く、互いを愛し合う存在なのです。

どんな困難があろうと、二人は乗り越えられます、それに……。

「あう〜っ？」

流夏君はキョトンとしていました。二人は何の会話をしているのかは分からないみたいでした。無理ありませんね、だってまだ小さいから。

でもでも、流夏君は何かを思ったかのようにスプーンをお父さんの楯無さんに差し出しました。

「どうした流夏？」

楯無さんは流夏君の行動が分からず、首を傾げました。流夏君はじつと見ていましたが「あう〜」と何かを訴えていました。楯無さんは更に首を傾げます。

流夏君も首を傾げますがお母さんを見てスプーンを差し出しました。

「どうしたの流夏？ お代わり？」

刀奈さんは流夏君の行動に首を傾げます。お代わりと思っただけでもカレーはまだ残っています。お代わりとは思えないのと流夏君の行動は何を意味しているのかは分かりませんでした。

流夏君は二人をきよろ、きよろ、と見ていました。スプーンを伸ばしていましたがスプーンの丸い先端を口に入れました。ご飯はありません。でも、何かを訴えているみたいです。流夏君はじっと見たまま何も言いませんでした。

二人はどうしたのかと思っていました。我が子の訴えに何を意味しているのか、何かを考えているのか、と思っているみたいです。すると、刀奈さんは驚き、直に微笑みました。頬を紅くしながら。

「貴方」

刀奈さんは楯無さん呼びます。愛しそうに、です。楯無さんはドキツとすると、刀奈さんを見ます。刀奈さんは頬を紅くしていました。

同時に手に持っている箸を使って、味噌がのった鯖の白身を箸で摘むと、それを楯無さんに差し出しました。

うっ!? 楯無さんは刀奈さんの行動に驚き、顔を真っ赤にしました。気づいたのです、刀奈さんの行動に。

でもでも、それは刀奈さんがそうした訳ではありません、流夏君が訴えていたからです。

あれはくく? と訴えていたのです。そうです! 流夏君がスプーンを差し出し、口に入れたのはそう言う意味だったのです!

お母さんがお父さんにあくくんをしてほしかつたのです! 何時も見ているのと、何時ものあれをやっていないから、あれっと思ったみたいです!

流夏君はお母さんの行動にニパツと笑いました。あれが見れるくくと思っていました。早く早くくくと笑っていました。楯無さんは流夏君の笑顔に戸惑いますが刀奈さんを見ます。

刀奈さんは少し恥ずかしそうにそわそわしていました。早く食べてほしい、と願っていました。そんな妻の素振りに楯無さんは顔を真っ赤にしました。

かわいい、と。楯無さんは流夏君と刀奈さんを交互に見ます。流夏君は応援し、刀奈さんは恥ずかしそうでした。これには楯無さんは「くくく!」と声を上げそうになると、そのまま刀奈さんの箸の先端に

ある鯖の白身を食べました。

刀奈さんは恥ずかしそうに笑っています。流夏君はお父さんの行動に笑いました。パパくくやるくくと思っ
ていました。

楯無さんは恥ずかしそうに小さく咀嚼していました。鯖の味噌が
上手く絡んでいるのに、あまり味を感じられませんでした。理由は簡
単、何時もやっているのに流石に恥ずかしいからでした。

楯無さんは汗をかいています。刀奈さんを見ます。恥ずかしそう
にそわそわしており、何も言いませんでした。何時もしているのに、
今回ばかりは恥ずかしいと思っていました。

だって、今回は流夏君が促していたからです。不意をつかれたとは
言え、流夏君の行動は流石かつ、自分たちの愛息としては人たらし的
なことをしたからです。

楯無さんは言葉を詰まらせていますが何も言わず、天井を仰ぎなが
ら顔を覆い隠しました。恥ずかしいと思っていました。

そんな二人に流夏君は首を傾げ、春奈ちゃんを寝息を立てたまま、
起きませんでした。

「うああくく」

流夏君は首を傾げていましたが笑いました。何時ものパパとママ
だくくつと喜びました。でもでも、流夏君はご機嫌はいいみたいで
す。

「ういふー」

「流夏さま……はあくくこれは将来、色んな意味でもの凄い当主がで
きそうだ……」

そんな中、襖の外から一部始終を聞いていた松岡さんは溜め息を吐
いていました。デザートにあんみつと、流夏君にプリンを差し出そう
としましたが入れないみたいでした。

松岡さん、彼、護衛人の過去は悲しくも、流夏君と春奈ちゃんを守ろうと再び決意したみたいです。

ある日の正午。ここは更識家の庭が見える広間、そこには、玩具を手にして、嬉しそうに遊んでいる子がいました。

「う〜〜あ〜〜」

ご存知、その子は流夏君！ 流夏君は今、バトルライダーのソフビ人形で遊んでいました。近くにはお気に入りのお気に入りのバトルライダーもありましたが今は手に持っている二つで遊んでいました。

片方はコブラをモチーフにした人形を、もう片方はメモリーを使つた白い体に黄色い目が特徴の人形でした。

流夏君は破顔しながら遊んでいましたが、近くには松岡さんが微笑ましそうに見ていました。彼は楯無さんが仕事の間、刀奈さんが春奈ちゃんのオムツを取り替えに部屋を離れている間、流夏君を見ていたのです。

流夏君は子供らしく、無邪気な笑顔を見せており、バトルライダーでソフビ人形で遊んでいるのを見ていただけでした。

「流夏様は好きですね？ バトルライダーが」

「うあ〜〜」

「フフツ、私も嬉しいのですよ？ 流夏様の笑顔で疲れが吹っ飛ばすようにも思えるんですから」

「う〜〜」

流夏君は嬉しそうに笑う中、松岡さんも笑みを浮かべています。そんな中、ある生き物達が歩み寄ってきました。松岡さんはその生き物達に気づき、振り返ります。

そこにいたのは、二匹のドーベルマンでした。この屋敷の周りを警戒し、夜中でも侵入者が来たら吠えるよう訓練された犬です。二匹のドーベルマンは流夏君を見ていましたが、流夏君は二匹に気づくと、ニパツと笑いました。

「ほ〜〜く〜〜」

流夏君がそう言うと、二匹のドーベルマンの片方は困惑し、もう片方は胸を張りながら吠えました。

「く〜ん（止めるよ〜）ポチって名前嫌だよ〜」

「ワン！（クロ、流夏を守る！ 絶対！）」

片方はポチ、もう片方はクロと言いました。二匹は流夏君により、名前を与えられたドーベルマン達でしたが勇ましく、侵入だけでなく、流夏君と春奈ちゃんを守る為の番犬としても任されています。

二匹は流夏君の言葉で反応を見せる中、松岡さんは不意にあることを思い出しました……そして、ここからは、ナレーションも一旦敬語を止めます。

何故なら、松岡は最初、赤ん坊の世話を任されていたからだ。任されたのは当主の命であり、ある人物との約束だったのだ。

松岡は、とある過去を思い出す。流夏が産まれる前、彼の父であり、当主である楯無と友人である男性の三人で任務に赴いていた。

その任務はISを使える楯無のお陰で難なく終わった——しかし、一発の凶弾が友人に致命傷を与え、友人は倒れた。

その友人はとても明るい性格でおちよこちよい。暗部内では浮いた存在だったが、松岡にとっては鬱陶しくは感じられず、少し気を許す相手だった。

その任務で友人が倒れ、友人は松岡の腕の中で死ぬ間際、笑いながらこう言い遺していた。

『松岡——毅、当主様を守ってくれよな……！ 当主の、未来の当主様を、稚児を守ってくれよな……！ 俺との約束だぜ！』

友人はそう言った後、殉職した。松岡は、毅は友人の死に嘆き哀しみ、当主に支えられなければいけない程、酷く泣き叫んでいた。

それ以来、毅は、本来のクールな性格の彼が、身を潜めるようになりとそんな性格を見せなくなった。任務のとき以外は、全く見せなくなった。

その性格は、流夏に対しては亡き友人の性格を見せ、接していた。流夏だけでなく、春奈にもそう言う素振りしか見せなくなった。

友人との約束を果たすために、自分を押し殺していた。今も押し殺している中、——それに、私も敬語に戻ります。

近くには、ソフビ人形で遊ぶ流夏君がいました。流夏君はきやつきやつと笑っていましたが松岡さんはまた微笑むと、ゆっくりと彼の頭を撫でます。

流夏君も頭を撫でられて笑っています。松岡さんはフフツと微笑んでいました。すると、襖が開き、ある女性が女の子の赤ちゃんを抱きかかえていました。

「流夏、待たせたわね？」

「う〜」

お母さんの刀奈さんと妹の春奈ちゃんでした。流夏君は二人を見てふあふあ〜と笑うと、ソフビを置いて立ち上がり、テクテクとお母さんに歩み寄ります。

その間、刀奈さんは襖を閉めると、膝を曲げ、春奈ちゃんを片方へと移動させるように持ち替え、空いた方で流夏君を受け止めました。春奈ちゃんも笑う中、刀奈さんは流夏君と春奈ちゃんを見て微笑むと、ニツコリと流夏君を抱きしめたのです。

「……………」

そんな光景を松岡さんは微笑ましそうに見ていましたが、友人もいたら、と思いつつも友人との約束の為、流夏君と春奈ちゃんを守る、と再び決意したのでした。

流夏君、公園で遊んでいます。周りには気づかないみたいですよ。

「あう〜」

ある日の正午、快晴の中、流夏君はお父さんの楯無さんと従者であり、流夏君を守る任務もある松岡さんと一緒に、ある場所へと向かっていたのです。

と言つても、楯無さんに抱っこされており、腕の中にいる流夏君は嬉しそうです。

彼等が身につけている服は、休日の場合、いつもの普段着でした。彼等は今、休日を楽しもうとしていたのです。

今回、彼等が向かうのは、流夏君にとつて、一番好きな場所——その場所は憩いの場であり、流夏君が唯一、広々と遊べる場所！

そうです！ 彼等が向かうのは、おや？ 流夏君はその場所に気づいたのか、破顔しました。

「フアアア〜！」

流夏君は笑いながら、その場所を指差しました。そうです！ その場所は公園です！ その公園からは沢山の子供達の笑い声が聞こえますがとても広く、緑も多い場所でもあるからです！

流夏君はその場所を見て必死に手を伸ばす中、楯無さんと松岡さんは微笑ましそうに見ていました。三人が入り口に着くと、少し離れた場所では数人の女性——所謂、ママさんたちが話をしていた時に、誰かが楯無さん達に気づいたのです。

ねえ、あれって！

間違いないわ！ 織斑さんよ！

きやああ！ 嬉しいわ！

あれって流夏君じゃない!?

ほんとほんと、お父さんに似て可愛いわ〜

ママさん達はキヤアキヤアと嬉しそうに顔を真っ赤にする中、楯無

さんは気づき、苦笑いしていました。因に彼等は、流夏君を見ています。

「ああ〜っ、まただ……」

「仕方ありません、当主様は世界的に有名なお方、このような庶民の憩いの場所にいることに嬉しいのですからね?」

松岡さんは流夏君を見ながら理由を話します。

流夏君は緑の芝生をテクテクと歩きながら笑っていました。風が気持ち良く、更には家の中にある庭よりも広い場所を自由に歩き回れるからです。

流夏君は辺りを歩き回った後、「パパ〜」と歩み寄ってきました。楯無さんは膝を突き、両手を横に伸ばすように広げると、流夏君はテクテクと歩み寄り、お父さんに抱きつきました。

お父さんの楯無さんが抱きしめ返すと、流夏君は『うふふ!』と笑っていました。

二番目で大好きなお父さんに抱きしめられて嬉しいのですよ! お母さんにはない強さと、抱っこしてくれる温もりも違うけど、甘えなくなるのです!

流夏君は笑う中、楯無さんは彼を抱きしめたまま立ち上がりました。流夏君は笑う中、松岡さんは微笑んでいました。その光景を、周りは微笑ましくも、小さな女の子達は、何故か流夏君を見て顔を真っ赤にしていました。

「うああ〜」

流夏君はお父さんに笑う中、女の子達は突然、顔を真っ赤にしたままその場から離れ始めました。

突然のことでお母さん達は困惑し、自分達の娘さんを追いかけて始めました。

「う〜?」

流夏君は女の子達の様子に首を傾げていました。女の子達は恥ずかしがる中、松岡さんは苦笑いしていました。

ああ〜またやったな〜と思っていますが、流夏君は無意識のうち、女の子達を惚れさせていたからです。

さつすが流夏君！ 楯無さんと刀奈さんの子であって、二人の血を強く受け継いでいるからです。

松岡さんは流夏君花にも分ならずキョロ、キョロと見渡していました。

「……!？」

刹那、松岡さんは目を細め、視線をある方へと向けました。表情は険しく、その表情は仕事を受け持つ意味で、暗部の顔をしていました。楯無さんも気づくと、目を細めました。

「……どうした？」

「……近くに、嫌な視線を感じます」

「視線？」

楯無さんの言葉に松岡さんは頷くと、彼は口を開きました。

「この件は私に……当主様は平然とした顔で流夏様と戯れてください」

「……分かった——流夏」

楯無さんは微笑みながら流夏君を見ました。流夏君は「あう？」とキョトンとしていましたが、楯無さんは笑みを浮かべたまま、こう言いました。

「松岡さんは急用で暫くは離れるって、その間に、お父さんと遊ぼうな？」

「そうしてください、私は、トイレに行きますから——でかい方を」

松岡さんはそう言うと、楯無さんは松岡さんから離れ、流夏君を連れてその場を歩き去って行きました。

「う？」流夏君はキョトンとしていましたが、楯無さんは流夏君に微笑んだままでした。

「フフツ……さてと」

「あれが更識家の子供達のうちの一人、更識流夏か〜」

公園から離れた場所では全身汚い服をしたおっさんがいました。

おっさんはホームレスみたいに思えますが、流夏君を見て笑ってい

ました。

理由は簡単、流夏君を誘拐しようと考えていたのです。

この男はギャンブルで多額の借金を抱え、酒癖も悪く、奥さんや子供にも逃げられたのです。

流夏君を誘拐しようとするのも多額の身代金を手に入れるためでした。

流夏君がこの公園に来る日もあらかじめ知っており、いつ来るか、いつ帰るのかも把握しているのです。

そんな、人間の屑が流夏君を見て笑う中、離れた場所では流夏君はパパの楯無さんと遊んでおり、無邪気その物でした。

赤ちゃんだから、そうなりますもんね？　ですが、男は楯無さんを見て、少し困惑します。

「でも、どうすつかなく〜いつも親父や他の奴らがいるから、目を離れた隙はないしなく〜」

おっさんは悩みました。流夏君の傍には常に楯無さんか松岡さん、他の従者が見ており、中々、離れる隙はないのです。

それもその筈です、そんなことをしたら親失格であり、従者失格なのです。楯無さんは父親として、従者は当主の大切な子を守るために、それを義務としているからです。

従者は更識流夏という、大切な当主の子を守るためですから。楯無さんは大切な我が子を守るためでもあるからです。

おっさんは何も知らず、なおかつ、流夏君をどうすれば誘拐出来るかで悩む中。

「流夏様を誘拐する考えをする屑が消えろ」

刹那、後ろから声が聴こえ、振り返ると、腹を強く殴られ、そのまま意識を失いそうになりました。

おっさんが最期に見た光景は、憎しみに満ちた、松岡さんの顔が見えたのでした。

「流夏、もうそろそろ帰るぞ〜」

「あう?」

あれから一時間半が経った頃、楯無さんはそう言いました。流夏君はキョトンとしていましたが、楯無さんは微笑みながら彼の頭をなでました。

流夏君は嬉しそうに笑いますが、気もちい〜〜と思っっているみたいです。楯無さんの手の温もりがいいみたいです。

楯無さんは笑う中、懐からバイブ音がしました。

楯無さんは流夏君を引き寄せながら懐に手を入れると、バイブ音の正体はスマホであり、彼はスマホを取り出すと、軽く捜査し、それを耳に当てました。

流夏君を見ながら笑っています。が内心、少し怒っていました。

『不審な視線の正体を突き止め、此方で始末しました』

「そうか、松岡、その何かは?」

『男ですが、警察に届けますか? 猥褻物陳列罪とかで』

「其方に任せる、どのくらいで戻る?」

『一時間経たないうちに戻ります』

「そうか、すまないな」

『従者としての仕事なので、流夏様は大切な存在でありますからね』
「……こっちはそろそろ帰る。刀奈や春奈を心配させたくないからな」

『そうして下さい——私は帰りに、何かを買いにいきますね』

「そこまでしなくても……」

『いえ、流夏様を不安にさせた為の償いです、では』

「あつ、ちよつ」

松岡さんは携帯を切りましたが、楯無さんは「ああ〜」と思っっています。流夏君は「あう?」とキョトンとしていました。

楯無さんは流夏君に気づく中、微笑むと「帰るか」と言っつて、流夏君を抱っこしました。

「う〜?」

流夏君は首を傾げていましたが、楯無さんはそのまま、公園を出る

ように歩いて行きました。

女の子達は、まだ悶えています。流夏君はそれに気づかないまま、一応、ご機嫌はいいみたいです。

「ウ~~~~~！」

余談ですが、松岡さんは流夏君の為に、白いケータイを使った白い身体に紫色のラインがあり、背中に重たそうな装備を付けたバトルライダーを、春奈ちゃんには食パンの顔をしたヒーローを買ったそうです。

流夏君と春奈ちゃん、パパとママとお出掛けするみたいですがご機嫌は未だ判らないみたいです（お祭り編、鳳鈴音編）

「ウアア〜」

「フフツ、春奈、パパとお兄ちゃんは別行動だから、暫くはママと一緒にいましょうね〜?」

「ウ〜?」

その頃、刀奈さんは春奈ちゃんと、五反田家の三人に鈴さんと彼女の息子であろう狼君とお祭りの中を歩いていました。出店の人が人を呼ぶ声、出店を見て回る人達とすれ違います。

賑やかであることに変わり無く、彼女達はお客さんとして、出店を回っていました。刀奈さんは春奈ちゃんに笑っていますが春奈ちゃんはキョトンとしていました。

「うう〜」

「大丈夫ですよ弾さん、楯無さんは絶対にそんなことをしませんから」
「だけどよ〜」

一方で五反田夫妻は、落ち込む弾さんを虚さんが慰めるという光景がありました。弾さんは楯無さんの言葉に震えていたのです。

ですが、本当はそんなことをするつもりではなかったのです。弾さんは最初、インチキしようとしたのです。籤引きで自分達五反田家、更識家で回ろうとしたのです。

しかし、千冬さんに直ぐに見破られ、彼女からは『五反田兄、私を流夏と一緒にするようにしてくれ』と脅は……説得してきたのです。これには弾さんも何度も頷き了承したのです。

インチキすることはいけませんね? いえ、自業自得でしょうね。そんな事を刀奈さんは知りませんが楯無さんも知りません。彼は今頃何をしているのかも知らないのです。

「パパ〜」

あらあら、滯ちゃんが弾さんを慰めるように頭を撫でました。これ

には弾さんも「滯く」と涙ながらに嬉しそうでした。

そんな家族のやり取りに刀奈さんは微笑んでいましたが春奈ちゃんを視ます。

「ウフフ」

あらあら、春奈ちゃんったら、お母さんを視て破顔してしまいました。甘えたいみたいです。

刀奈さんはそれに気付き笑っていますが笑った顔の愛娘を視ているからです。

「相変わらずですね、一……言え、楯無に甘えられて、幸せそうで何よりです」

そんな刀奈さんに鈴さんが訊ねました。鈴さんの言葉に刀奈さんは振り返ると、彼女は笑みを浮かべていました。

安堵、その物を意味していましたが刀奈さんは微笑みました。

「ええ、彼は私のために良くしてくれたわ——流夏、春奈と言う大切な子供達もできた」

「そうですか……でも、私は嬉しいですよ？」

その言葉に刀奈さんは目を丸くしますが、鈴ちゃんは抱っこ紐で抱っこしている狼君を見ました。

「すくすく？」

あら？ 狼君の目がぴくりとし、もぞもぞしました。

すると、狼君の翡翠色の瞳が微かに見えました！ まだ眠たそうでしたが、鈴さんは微笑んでいました。

「私は失恋したけど、今は幸せです」

鈴さんはそう言っていました。狼君の頭を撫でていました。そんな様子に周りの大人達は心配そうに見ていました。

そうです、鈴さんは楯無さんが好きでした。箒さんを含めた他の三人と一緒に楯無さんを狙っていました。

しかし、彼が選んだのは刀奈さんでした。五人は、簪さんは失恋しましたが、酷く落ち込んでいました。

それでも、前を向きました。鈴さんは結婚式では何もしなかったのも、諦めたのです。本当はやけ酒を「呷《あおり》たい程、暴れたかつ

たのかもしれませんでした。

しかし、彼女はそれでも前を向きましました。失恋したのなら仕方ない、新しい恋をしたいと。

その結果、幼なじみであり、現在の夫である御手洗 数馬さんと意気投合し、交際し、結婚し、狼君をもうけましたから。

「今は……数馬や狼がいるから、寂しくないわ……」

鈴さんは狼君の頬を優しく包むように掴みました。

「ニユ〜」

狼君は眠たそうに船を漕いでいますがママを見て嬉しそうです。ママ〜と甘えたいみたいです。鈴さんは「フフツ」と笑っています。確かに幸せそうでした。

失恋してしまいましたでしたが彼女はもう、一人ではありませんでした。数馬さんや狼くんがいるのです。妻として、母としての幸せを得たからです。

鈴さんは笑みを浮かんでいます。刀奈さんと虚さん、弾さんは安堵していました。春奈ちゃんと澪ちゃんは何も分からないみたいです。が、狼君は、不意に、ある人を見ました。

刀奈さん——いいえ、刀奈さんが抱っこ紐で抱っこしている春奈ちゃんです。春奈ちゃんは狼君を見ていましたが、初めて逢うのです。しかし、狼君は……。

「……フオオ!？」

あら？ 狼君、春奈ちゃんの顔を見た途端、眠気が一気に吹っ飛んで、目をハートのようにしながら声を上げました。

その様子に鈴さんは「ろ、狼!？」と慌て、五反田夫婦と澪ちゃんは「?」とキョトンとし、刀奈さんもキョトンとしていました。

「う〜?」春奈ちゃんは狼君の様子に声を上げていましたがキョトンとしていました。赤ちゃんだからまだ分からないみたいです。

でもでも、狼君は四ヶ月とは思えない程、必死に手を伸ばしていました——春奈ちゃんにです。

その訳は、簡単です。狼君は春奈ちゃんに、惚れたからです。所謂、一目惚れでした！

柔らかい肌にお母さん譲りの水色の髪に赤い瞳は可愛らしく、成長すれば美しい少女になるからです。

狼君はそれに気づいたのかは、彼にしか分かりません。

彼の様子に、鈴ちゃん、虚さん、そして春奈ちゃんのお母さんである刀奈さんは気づいたのです。

「フッフ、春奈、狼君は恐らく、貴女にホの字よ？」

刀奈さんは春奈ちゃんにそう言うのと、春奈ちゃんは「うにゆ？」と何も分からないみたいです。

狼君の様子にどんな反応するのかは、どんな印象を抱いているのかは、狼君のこれから次第でしょうね？

「う~~~~う~~~~！」

狼君は必死に手を伸ばしています。春奈ちゃんに対してです。

春奈ちゃんはキョトンとした顔で狼君を見ていますが、ある人を出します。

「うにゆ~~~~に~~~~」

春奈ちゃんは流夏君を思い出していたのです。にいには~~~~？と考えているみたいです。

狼君よりも、流夏君を、お兄ちゃんを選んでいるのです。仕方ありませんよ？ お兄ちゃん大好きっこだから。

狼君が必死に手を伸ばしているにも関わらず、春奈ちゃんは流夏君を探していました。

「……………ぷ~~~~」

そんな春奈ちゃんに濡ちゃんは頬を膨らましました。狼君という（勘違い）男の子がいながらも、流夏君のことを考えている春奈ちゃんに嫉妬したのです。

それだけじゃありません。彼は千冬さんと一緒にいるのです。楯無さんや簪さん、箒さんとも一緒にいますが今頃、千冬さんに甘えられているかもしれないのです。

千冬さんは叔母ば…………ごほん！ 大切な甥っ子と一緒にいて、嬉し

いのです。こうなったのもお父さんが原因ですが、流夏君は甘ているのかもしれない——刹那、滯ちゃんは。

「ぶくく」

滯ちゃんは頬を膨らませてしまいました。流夏くくと可愛らしい怒りを覚えていたのです。千冬さんに甘えられている流夏、それを思い出すだけでも嫌な思いをしていたのです。

流夏は私の好きな人だくくと可愛らしい独占を考えていたのです。娘の様子に五反田夫婦は「滯？」と不思議そうに見ていました。でもでも、滯ちゃんは（流夏くく覚えていろおくく）と考えていたのです。

「どうしたの滯？」

虚さんが訊ねても、滯ちゃんは流夏君のことを覚えているため、聞いていませんでした。

「クシユン！」

「なっ!? り、流夏、寒いのか!？」

その頃、別行動をしていた楯無さん、千冬さん、簪さん、箒さんと一緒にいて、千冬さんに抱っこされた流夏君の様子に千冬さんは慌てるのでした。

流夏君はくしやみをしましたが、滯ちゃんが噂をしていることには分からないみたいでした。

千冬さんは慌てていましたが、流夏君は何も分からないままでした。

「うくく? にゆくく?」

ともあれ、流夏君はさつきとは違い、くく機嫌は普通でした。

第21話

更識流夏君（1歳六ヶ月）

ご存知、この小説の主人公！ 更識楯無（織斑一夏）と更識刀奈の間に産まれた長男です。

性格はとても明るく、誰にでも笑顔を向ける優しい男の子！

顔立ちはお父さんが幼い頃に良く似ています。

可愛らしい外見とは裏腹に、多くの女性（特に女の子の乳児や幼児）を落とす程の破壊力がある笑顔を持っています。（これで一応、赤ちゃんの間で前科持ち）。

父親と同じ鈍感さがありながらも、父親よりもあまり鈍感ではなく、お母さんが大好きであり良く甘えています。

千冬さんには色々と甘えられています、お母さん一筋。

滯ちゃんとは幼なじみですが、春奈ちゃんはお兄ちゃん大好きっこだのであるため、良く可愛い激突をしていることを知らないみたいです。

好きなのはバトルライダーであり、白い人達のが好きです（仮

○ライダー？ なんのこと？）

因にある黒いロボが好きだそうです（ライ○マンに出てきたガツ○ユ）

更識春奈ちゃん（0歳五ヶ月）

ご存知、我等の流夏君の妹！ 更識楯無（織斑一夏）と更識刀奈の間に産まれた長女です！

顔立ちはお母さん譲りであり、良く似ています。

性格は大人しく、お兄ちゃんに良く甘えているお兄ちゃん大好きっこだ！

お母さんに良く甘えています、流夏君が大好き。でもでも、良く零ちゃんとは流夏君を巡って激突しています。

狼君からも良く甘えられています、知らんぷりです。

好きなのは顔がこしあんでできているヒーロー。

五反田滯（1歳六ヶ月）

ご存知、この小説の赤ちゃんヒロイン！ 五反田弾と五反田（旧姓：布仏）虚さんの間に産まれた長女！

顔立ちはお母さん譲りで、良く似ています。

性格はしっかり者で、流夏君が大好きな女の子！

生まれは違えども、流夏君を誰よりも好いています！

でもでも、春奈ちゃんというライバルができてから、流夏君を巡って可愛らしい衝突を繰り広げています！

御手洗 狼（0歳四ヶ月）

御手洗数馬と御手洗（旧姓：鳳）鈴音の間に産まれた長男！

顔立ちは鈴さんゆずりで、良く似ています！

性格は分からないのですが、とても恥ずかしがり屋で春奈ちゃんに對してだけは勢いつきます！

春奈ちゃんに甘えていますますが、相手にされないみたいです。それでも赤ちゃんらしく、頑張っています！

エリカ・デユノア（1歳三ヶ月）

まだ不明。あるヒロインの養子。

フランス在住の赤子であり、流夏君や春奈ちゃんとは縁がある。しかし、その縁が後に可愛らしい修羅場を生むことをまだ知らない。

流夏君、春奈ちゃんにある事をして、更にはある合体ロボを手にしてご機嫌いいみたいです

「……」

「ウ、ニユ……？」

「……………」

ある日の正午、更識家の楯無さんと刀奈さん、流夏君と春奈ちゃんの部屋。その部屋はとても広く、家族四人がいるには広すぎるくらいの和室でした。

その部屋には書斎や棚、テレビもありますが更識夫婦は可愛らしい兄妹のやり取りを微笑ましそうに見ていました——楯無さんは持ち物であるスマホを片手に、カメラスコップを兄妹に向けていました。

その兄妹であり、夫婦の宝物である子供達は今、春奈ちゃんはお母さんの腕に抱かれていました。でもでも……流夏くんは……？

「……」 チュ~~~~

あらら!?! 流夏君ったら春奈ちゃんのこめかみにチュウ~~~~していました! キョトンとしていますがその光景は微笑ましく、赤ちゃん達の親でもある更識夫婦はこの瞬間を微笑ましく、そして大切な瞬間でもありました!

休日であり、愛息と愛娘との大切な時間を有意義に過ごしたいのです。そんな中、流夏君は春奈ちゃんを自分の方へと引き寄せながらこめかみに口づけしたのです。

どうしてそんなことをしたのかは、理由がありました。それは……春奈ちゃんがぐずっていた為にお兄ちゃんとして妹である春奈ちゃんを慰めようとしたのです!

流夏君は偉いです! でもでも……流夏君は春奈ちゃんが泣くのを止める為、妹の為にやったことでした!

春奈ちゃんは泣き止みましたが流夏君はニパツと笑うと、頭を撫でたのです。これに春奈ちゃんもキョトンと……あらあら、春奈ちゃんは顔を真っ赤にして、お母さんの胸に顔を埋めてしまいました。恥

ずかしいのです。

「な〜〜?」

流夏君は春奈ちゃんの様子に首を傾げていました。

コンコン

おや? 襖の方から襖を叩く音が聴こえて、楯無さんと刀奈さんは音がした方を見ました。

「誰かいるのか?」

楯無さんが訊ねます。でもでも、シ〜ンと言う音が似合うかのよ
うに反応はありませんでした。

使用人が誰かが悪戯しているのか? 楯無さんはそう思っていま
したが襖の方からは返事はありません。

「なんだろう?」

楯無さんはスマホをしまうと、立ち上がり襖の方へと近づき、そし
て、開けました。

「……あれ?」

おや? 楯無さんは何かに気づき、視線をしたの方へと向けまし
た。そこには、ある物が有ったのです。

しかし、辺りを確認しますが人の気配はしません、使用人が通った
気配もないのです。楯無さんは不審に思いながらも、したにある物
を、それを手に取りました。

「貴方?」

刀奈さんが呼ぶと、楯無さんは振り返りました——手には、ある合
体ロボの二体の恐竜ロボが同梱されていたのです。

「フアアア〜!!」

あらあら、流夏君ったら、楯無さんが持っている合体ロボの箱を見
て破顔しました!

そうです! 流夏君はその合体ロボを欲しがっていたのです!
そのロボは少し前に、楯無さんが見ていた戦隊ロボの、恐竜のロボで
した!

そのろぼは青い肉食恐竜と白い草食恐竜が同梱されている合体ロ
ボでした! 流夏君がそれに気づいたのは、楯無さんが久しぶりにD

V Dで観た時に目に留まったのです！

赤い肉食恐竜、青い草食恐竜、黄色い翼竜と戦っていたのです！
でもでも、流夏君はそれよりも二体の青いのと白い方を気に入っていたのです。

D V Dではそれが出ているのしか観ていませんでした。楯無さんと刀奈さんは流夏君がそれを欲しがっていることに気づいていましたが流夏君が本当に欲しいかどうかも分からなかったのです。

でもでも、流夏君の様子は嬉しく、嬉しそうに手を伸ばしているのです。ですが……。

「(……どうして、俺と刀奈がいるにも関わらず、気配はしなかったんだ?)」

楯無さんは、新品同様の青い肉食恐竜と白い草食恐竜のロボが同梱されている合体ロボの箱を見ながら、考え事をしていました。

流夏君が愛おしそうに抱きしめている箱——所謂、その箱に同梱されている二体の恐竜ロボの合体ロボはとても高く、限定品なのです。それを新品同様で手に入れるのは難しく、値段も四桁行くくらいなのです。

それを、難なく手に入れることは難しく、探すのにも一苦労するのです。それを簡単に手に入れることが出来る者は限られているのです——おや？ 楯無さんは何かに気づきました。はっ、としたのでしたから。

「(待てよ？ そういったことを出来る奴がいたな!? ——もしかして……ああく〜っ)」

楯無さんは頭を抱えました。そうです、そう言った芸当が出来るのは、知り合いの彼女……では無く、自分の部下の一人なのです。その人は性格は冷静ですが交流をあまりしないのです。

理由は簡単——その人は夜でしか行動せず、更には流夏君や春奈ちゃんを護衛、それも影の護衛者なのです。流夏君と春奈ちゃんが寝静まっている頃を見たり、夜の屋敷を護衛する人なのです。

戦闘力や信頼は高く、松岡さん同様、楯無さんの片腕のような存在

なのです。しかし、気配を消すのは暗部一であり、楯無さんや刀奈さんでさえも特定出来ない程なのです。

楯無さんはその人に対し、呆れているのと、こんな高い物を彼が買ったことに驚きと、彼が何をしているのかはまでは特定出来ない中、刀奈さんが訊ねます。

「貴方」

「うん？ どうしたんだ刀奈？」

楯無さんは刀奈さんの呼びかけに反応し、彼女の方を見ました。刀奈さんは微笑みながら視線をある方へと向けていました。楯無さんはその視線を追うように移動させると、そこには合体ロボの箱を必死に伸ばしていたのに、いつの間にか楯無さんの足下まで来て、必死に手を伸ばしていたのです。

箱から視線を逸らす様子もなく、嬉しさのあまり、声を上げ続けていました。そんな様子を楯無さんはじっと見ているうちに――頬を緩めてしまったのです。

「ふう〜多いなおい」

その頃、更識家の――屋敷内にある中庭――そこは何匹もいる錦鯉が池の中で泳ぎ、桜や紅葉になる木が幾つもある場所でした。

更識家、使用人達にとって憩いの場でもあり、心安らぐ場所でもありました。そんな場所を、中庭にある落ち葉を集めるように、竹の箒で掃いている松岡さんがいました。

運転手だけでなく、流夏君や春奈ちゃんの子守りだけでなく、こういった使用人のお仕事も兼任しているのです。小さな積み重ねが……なんて話がありますが彼は他の使用人とは違い、実力ある人だからです。

彼を知る使用人は沢山いますが本来の彼は……言え、これ以上はいわない方がいいかもしれませんね？ 取り敢えず、彼は箒で落ち葉を

掃いてると、ふと、池の方を見ました――。

「うわっ!？」

池の方を見た瞬間、驚きました。そこには、池の近くには、池の中を泳いでいる錦鯉達を見ている人がいたのです。その人は二十代くらいの男性で、左目を長い前髪で隠しているのです。

整った顔立ちに赤い眼、黒いスーツを着ているのです。物静かなのか、何も言わず、池の中を泳ぐ錦鯉を眺めていました。

「な、なんだ黒影かよ……」

松岡さんはその人を黒影、さんと呼びました。黒影さんは何も言わず、ずっと錦鯉を眺めているのです。これには松岡さんは頭を抱えま

す。

「黒影……少しくらい、話を聞いてくれたっていいだろう?」

「……………」

「まあ、お前があんまり人と接したくないのは分かるけど、俺達ぐらいには話をしたっていいだろう?」

「……流夏様」

「えっ?」 黒影さんの話に松岡さんは不意を突かれましたが黒影さんは言葉を続けました。

「流夏様にプレゼントを渡した……流夏様、喜んでいた……」

彼はそう言うと、立ち上がり、踵を返してその場から離れていきました。

「お、おい黒影!」

松岡さんは呼び止めようとしたましたが黒影さんは聞く耳を持たずにそのまま離れていきました。後ろ姿は寂しそうでしたが松岡さんは黒影さんの言葉に対して、何も分からないみたいでした。

「ういふ〜」

「きやつきやつ!」

その頃、流夏君は黒影さんがプレゼントしたであろう合体ロボの二

体の内、青い恐竜ロボを歩かせるように動かしていました。春奈ちゃん
んは白い恐竜ロボで遊んでいましたがお兄ちゃんと一緒に遊んでい
て、凄く上機嫌でした。

「ふふっ」

「ははっ」

そんな様子を更識夫婦は微笑んでいましたが流夏君と春奈ちゃん
は今日もご機嫌いいみたいです！

流夏君と春奈ちゃん、自分達はお昼寝している為、周りは何かをしているかには気づいていないみたいで
す。

ある日の正午、更識家の寝室——そこには部屋を暗くして、小さな
布団の上で仰向けに寝ている二人の赤ちゃんがいました、流夏君と春
奈ちゃんであり、その横には二人を見守り、子守りの役目を与えられ
た従者、黒影さんがいました。

松岡さんは別件で忙しいらしく、彼が変わりに子守りをしていまし
た。因に更識夫婦はある件でちよつとした問題がある為、流夏君と春
奈ちゃんの遊び部屋にいました。喧嘩ではありませんよ？ まあ、今
はお昼寝をしていました。

「……………くず、ウグつ……………」

あら？ 春奈ちゃんがくずっているみたいです。何かを訴えてい
るようにもお思えますが黒影さんは春奈ちゃんの様子に気づき、近づ
き間に……………あら？ 流夏君は眠たそうな目をしながらも、春奈ちゃん
に……………。

「なあな~~~~よ~~~~よ~~~~」

流夏君は布団の上で仰向けになり、くずっている春奈ちゃんのお腹
を優しく叩きます。ポン、ポンと小さな音がしている中、流夏君は春
奈ちゃんをあやしていました。

お兄ちゃんとしての役目と、お父さんからいつも、『妹だけは絶対に
守るんだぞ？ お父さんとお母さんや従者達が居ない時、春奈を守れ
るのは、流夏いないからな？』と言われていたからです。

まだ幼い頃の流夏君から聞いても分からなかったのかもしれない
ん——でも、今の彼はお父さんの楯無さんの言葉はしっかりと聞
いていたのです。

今の彼の行動は春奈ちゃんを気遣い、優しく声をかけているのです。その姿はお兄ちゃんとして、そして、その姿はお母さん、刀奈さんの言葉もありました。

『流夏、春奈をちゃんと守るのよ？ それだけじゃなく、女の子には優しく、大切な人ができた時には手をあげず、守るのよ？』

お母さんの言葉を流夏君は……思い出しているかどうかは分かりませんね？ 流夏君は春奈ちゃんを守る為、お兄ちゃんとして落ち着かせているのです。

流夏君は当たり前のことをしているのではなく、自分が出ることをしてからです。楯無さんと刀奈さんの間に産まれた長男として、次期当主(?)としての役目を果たしているのです。

そんな流夏君の行動に春奈ちゃんは流夏君のポン、ポンとした手が気持ちよかったのか、そのまま安心しきったかのように眉を寄せなくなる、

「……ス〜」

あら？ 春奈ちゃんったらお兄ちゃんの流夏君に甘えるように、お兄ちゃんの方を見るように身体の向きを変えました。

それだけでなく、小さな両手を必死に伸ばしているみたいです。お兄ちゃんを求めているようにも思います。甘えたいようにも思えます。

「……な〜」

妹のそんな行動に流夏君は優しく手を取ると、春奈ちゃんと共に、そのまま目を閉じると、可愛らしい寝息を立てました。

「……」

そんな様子を、黒影さんはじっと見ていましたが微笑むどころか、じつと見ていました。手助けしようと思っていましたでしたが流夏君の行動で止め、そのまま見守っていたのです。ですが、ある人物を思い出していました。

それは、黒影さんの妹である女性でした。彼に良く似ている中、とても優しく、母親のような慈愛に満ち溢れていたのです。暗部内でも

有名で、人気があつたのです。

しかし、その妹は……重い病にかかつており、余命僅かでした。本来の彼女の仕事は流夏君と春奈ちゃんを刀奈さんと一緒に見る仕事でした。

その妹の病は直すことも出来ず、更には気丈に振る舞っていたのです。ある日、黒影さんが訊ねたのです。どうして泣かないのか？

とーそしたら、

『お兄ちゃん……だつて泣いたら、春奈様や流夏様が哀しむからよ。』

妹さんの言葉は切なくも、悲しい物でした。死期を悟り、それでも二人の、当主とその奥様の子供達を可愛がっていました。

その光景を、今でも忘れることはありませんでした。妹がすべきことを、兄である黒影さん自身が引き継いだのです。

忍びの仕事もありながら、育児にも協力していたのです。妹さんが亡くなったのはそれから間もなくでした。多くの従者が泣き、楯無さんは辛そうに俯きながら、膝の上にいる流夏君を優しく抱きしめていました。

刀奈さんは春奈ちゃんを抱っこしながら泣いていました。周りが泣く中、黒影さんは泣いていませんでした。いいえ、泣くのを我慢していたのです。

妹の為にも生きる——暗部の仕事を引き受ける——そう決めたのです。でも……今の彼は、何も言わず、両手を二人の兄妹の頭を、そっと撫でるように動かしていたのです。

「ム、ニユ……」

「ウ、ニユ……」

二人の顔は寝ながらも笑みを零していました。その光景は可愛らしく、ほっこりします。その光景を見ているのは、黒影さん一人——独り占めしているようにも思える中、黒影さんは俯きます。

にやけを止めているのでなく、頬がにへらとした訳でもありません。彼は寝ている二人には見せまいと、ある表情をしていたのです。その表情は無表情ですが、悲しそうにも思えるのです。

泣くのを我慢しているのです——妹の葬式でも泣かなかつた彼は

泣くのを我慢しているのです。理由は、従者として涙を流すのは不要——仲間を喪う時でも、誰かが亡くなった時でも涙を流さないようにしていたのです。

黒影さんは何も言わず、二人の頭を撫でていた手をそつと離れさせると、そのまま風のように消えました。寝室にはお昼寝をしている流夏君と春奈ちゃんしかいませんが、黒影さんが傍で見守っている為、何の問題もありませんでした。

「刀奈くこのままじゃ、流夏が悪い奴になっちゃうよ〜」

「大丈夫よ貴方——流夏と春奈は私達の大切な子供達だから、悪い人間にならないわよ？ 貴方と私の血を強く受け継いでいるからね？」

「それでも心配なんだよ〜」

「……悪役の玩具を集めただけで、流夏は悪い人になるとは限らないけど……まっ、この人の弱気な姿を見るだけでも、良いかしらねっ！」

その頃、楯無さんは正座した体勢で座りつつも、刀奈さんの膝の上に頭を乗せていました。理由は流夏君が悪役ばかりの玩具を集めている為に流夏君が悪い人間になるのではと危惧していたのです。

そんな彼を、夫を妻である刀奈さんは微笑ましくも、愛しそうに見ていたのです。彼は当主でありながら弱気になっていました。そんな様子を刀奈さんは微笑ましそうに見続ける中、母親ののように頭を撫でていたのです。

「……それに、貴方が気になるのも仕方ないけど、流夏が決めたことだから、別に良いかしらね？」

刀奈さんは、ふと、流夏君が集めた玩具を見渡します。流夏君が集めている玩具は皆、悪役ばかりなのです。白い身体に黄色い目のライダー、コブラを仕える紫のライダー、青い肉食恐竜と白い草食恐竜のロボット、電池を使う青い肉食系の恐竜ロボに、紺色のスーツを纏う

レンジャー系の人、黒い身体に禍々しい赤いラインがある巨人。

どれも流夏君が自分の目で見て集めた物ですが、悪役ばかりでした。流夏君が何故それらを集めたのかは分かりませんが、刀奈さんは夫の楯無さんを宥めることにしたのです。

楯無さんは弱気になる中、刀奈さんは「よしよし」と慰め続けていました。

「ふむ〜これで良いかな？」

その頃、千冬さんは、流夏君に対して、ある玩具を買おうと通販をしていました。パソコンの画面には、紫の草食恐竜と、白い大きな翼竜が同梱されている玩具でした。しかし、千冬さんは知らずのうちに（終盤まで敵）悪役の玩具をまた買っていたことを、知らないでいたのです。

流夏君、一人の従者の心を少し救ったことには気づいておらず、ご機嫌はいいみたいです。

「……………」

「うふふー」

ある日の正午、更識家の流夏君と春奈ちゃんの遊び部屋。そこには、従者の一人であり、流夏君の子守りでもある黒影さんがいました。流夏君は青い肉食恐竜で遊んでおり、楽しそうでした。

そんな彼を黒影さんはじっと見ていましたが何も言いませんでした。自分は流夏君を守る——それだけなので、それ以外の感情は、あまり持たないようになっていたのです。

しかし、流夏君は黒影さんに近づきました——白い草食恐竜のロボを持って。

「く〜く〜ぼ〜」

あらあら、流夏君ったら黒影さんに一緒に遊んで欲しいと、白い草食恐竜を差し出していました。一人で遊ぶよりも、二人で遊んだ方が良いと思っただけです。

妹の春奈ちゃんも一緒にいたのですが、妹の春奈ちゃんはぐずった為に、一緒にいた従者の女性が奥様の方へと連れて行ったからです。

でもでも、黒影さんは流夏君の行動に何も言わず、視線を逸らしました。一緒に遊ぶ気は無く、そう言ったことはあまりしないからです。

「く〜く〜うにゅ?」

流夏君は黒影さんの行動にキョトンとしていました。でも、黒影さんは視線を逸らしたままある事を考えていたのです。

それは亡き妹さんのことでした。両親を喪い、たったひとりの家族をも喪ったからです。本来は妹の役目なのに、自分はこんなことをしている——やりたくはない訳ではなく、約束したからです。

「ただ、自分に出来るのか？ 妹の方が上手いのでは？ そんなことを考えていました……ですが、そんな中、流夏君は彼の気持ちを察したかのように……。」

「く〜よ〜よ〜よ〜」

「あら？ そんな黒影さんの頭を流夏君はポン、ポンと叩きました。キョトンとしていますが、黒影さんは流夏君の行動に驚きもせず、じつと見ていました。」

まるで、自分の心情を察し、自分を気遣っているようにも思えました。二つのつぶらかな瞳は黒影さんを見ている中、流夏君は黒影さんの頭を優しく叩き続けています。

可愛くて、何処か気遣っている——そんな感じがしました。流夏君の行動に黒影さんは見続けている中、ある異変に気づきます。目尻が熱く、その何かは触らなければ、いえ、頬を伝っていたのです。

黒影さんはそれを、頬に伝う何かを触りました。冷たく、水のようにも思えました。それを見て、液体であることには気づきました。それが何かは直に分かる、いえ、分かっていたのです。

それは、涙でした——自分はいつの間にか、気づかない内に涙を流していたのです。悲しいことや苦しいことがあると、自然と流す。感動すれば流れる——生理的なことですが、黒影さんは涙を流していたのです。

冷たくも、とても温かく、心が洗われる感覚に陥りました。子供の頃から影の世界で生きて、闇夜の世界で暗躍する自分には似つかわしくない物を、彼は流していたのです。

黒影は何も言わずに、驚きもしない中、流夏君を見ます。未だにキョトンとしている中、彼は、黒影さんは妹の言葉を思い出しました。病室で二人きりの時でした。

長い黒髪に美しい容貌の二十代女性。大和撫子を沸騰とさせる姿に誰もが振り返る程の綺麗な人でした。それが黒影さんの妹である、楓さんという女性でした。

『お兄ちゃん、私思うの——流夏様は当主様と奥様の血を受け継いで

いるけど、その子、とつても強い子だと思うの』

『……憶測だろ?』

『そんなことないわ、流夏様は奥様が春奈様の相手をしてても、奥様が平等に愛しても、流夏様はぐずる様子もなかったわ』

『……』

『まるで、春奈様を認識しているし、守るべき対象としても見ているようにも思えるの——お兄ちゃんみたいに』

『……流夏様とは違う』

『そんなことないわ、流夏様はお兄ちゃんと同じお兄ちゃんとしての役目を自覚しているようにも思えるの——お兄ちゃん、流夏様は強い子よ、当主様よりも、いえ、当主様を超える大きな器を持っているようにも思えるわ』

『……』

『流夏様は更識家を……それにお兄ちゃん……もしも私に何か遭ったら、流夏様を』

『……』

刹那、黒影さんは目を閉じると、俯きました。その言葉の先を思い出したくなかったからです。あの発言は、妹の遺言にも近く、今の状況になっているのも、流夏君や春奈ちゃんの子守りを松岡さんと、他の女性従者と一緒に行っているのも、楓さんの意志を継いだからです。

忍びの人でありながら、流夏君を守っているのも、楓さんとの約束だからです。黒影さんは亡き妹・楓さんを思い出す中、流夏くんは松岡さんの顔を覗くと、彼の頬を触りました。

黒影さんがそれに気づき、目を開け、流夏君を見ました。彼は、流夏君はキョトンとしていましたが黒影さんに対し、ニパツと笑いました。

そして、また、彼の頭を優しく叩きました。

「く〜〜よ〜〜よ〜〜え〜〜お〜〜」

その言葉に黒影さんは目を丸くしました——そして、目を閉じると、そのまま流夏君を抱きしめたのです。

「うにゅ〜？ く〜？」

流夏君は黒影さんの行動に驚きもせず、キョトンとしており、首を傾げていました。どうしたの〜？ と思っっているみたいです。

しかし、黒影さんは流夏君を愛しそうに、守っているように抱き包んでいたのです。彼がそうしたのも、言え、そうしたくなつたのには理由がありました。

楓さんを喪い、それを周りに吐き出すことも、甘えることも出来ない彼が唯一、心の拠り所を得たようにも思えたからです。流夏君の優しさに、少しは心を奪われ、救われたからです。

流夏君を抱きしめている中、流夏君はまた、彼の頭を優しく叩きました。

「じよ〜じよ〜」

流夏様は黒影さんを慰めていました。一切半とは思えない程、優しい子になっていました。同じお兄ちゃんとして、彼に何かを抱いたのかもありません。

でも、黒影さんを救った——流夏君は知らないうちにそんなことをしていたのです。黒影さんは声を上げず、声を殺すように涙を流していたのです。

亡き妹・楓さんを思い出し、泣いていたのです。流夏君は黒影さんを慰めている中、黒影さんは流夏君に甘え、今までの哀しみを吐き出していたのでした。

「おいおいおいおい!? 奥様は良くて、舞も良くて、俺はダメなの!?
ってか見る気ないからな！」

「ワン！（あつたり前だバカ！ 春奈様の授乳を見ようなんざ百年はええよ！）」

「クウ〜ン（春奈〜ちゅぱちゅぱ飲んでまちゅね〜）」

その頃、別室では松岡さんは二匹のドーベルマンの内、ポチに血走った目で睨まれ、威嚇されていました。クロは刀奈さんに授乳され

ている春奈ちゃんを愛しそうに見ていました。

そして、近くには長い黒髪を伸ばした、お淑やかな女性がいきました。二十代前半の若い女性でした。黄緑のブラウスに、膝まである緑色のスカートを着いていました。

その女性は春奈ちゃんの子守りをしたりする従者なのです。春奈ちゃんを連れてきたのは彼女ですが、松岡さんは刀奈さんに当主様がお呼びだと伝えにきたのですが、部屋にはポチとクロがいきましたが、ポチに睨まれていたのです。そして、こんな状況になったのです。

春奈ちゃんはちゅぱ、ちゅぱと音を立てていましたがクロを見ていました。刀奈さんは春奈ちゃんを見て微笑んでいましたがクロを見るとニコツと笑いました。

クロはにへらあくくと頬を緩めていましたが飄々とした性格をしており、ポチとは全く正反対な性格をしていました。ポチとクロは双子であります。流夏君と春奈ちゃんの兄妹を守ることは誰よりも強く、強い気持ちで一杯なのです。

ポチは春奈ちゃんやお母さんであり、自分達が仕える当主の奥様でもある刀奈さんを松岡さんから守るように威嚇し、クロは春奈ちゃんを見て頬を緩めていたのです。

流夏君と春奈ちゃん、其々の飼いだの相手をして、ご機嫌はいいみたいです。

「ふさ〜〜ふさ〜〜」

ある日の正午、更識家の庭が見える縁側では、流夏君が犬用のブラシでクロの身体の毛を掃いていました。

ふさふさ〜と声を上げながら喜んでいました。近くには楯無さんがおり、流夏君に何が遭っても直に対処出来るように傍にいました。

少し離れた場所の後ろには、春奈ちゃんを膝の上に座らせながら、後ろから抱きしめている刀奈さんが流夏君の行動を微笑ましそうに見ていました。

春奈ちゃんはおしゃぶりをしていましたでしたがキョトンとしていました。流夏君は嬉しそうにブラシでクロの身体を拭いている中、クロは嬉しそうに頬を緩めていました。

「ク〜ン（流夏、もつとやって〜）」

「ふさ〜〜ふさ〜〜き〜〜?」

「ク〜ン（気持ちいいよ〜）」

クロは寝そべると、もつとやってと訴えていました。流夏君はニパツと笑うと、クロの身体をブラシを掃き続けていました。クロは気持ちよさそうに頬を緩めていました。

その光景はじゃれあっているようにも見え、犬から見れば守るべき人に恩返しされているようにも思えました。流夏君は笑いながらブラシを動かしていました。

「……クウウウ！（いいな！ クロばかり!）」

そんな光景を、ポチは離れた場所から見えていました。青筋を立てています。クロに対して、嫉妬しているのです。本来ならば自分が選ばれる筈でしたが、流夏君は何故かクロを選んだのです。

クロは気持ち良さそうに声を上げている中、後ろにいた春奈ちゃんが手を伸ばしていました。

「う～～～～」

春奈ちゃんは可愛らしい声を上げていました。その声に流夏君、楯無さん、刀奈さん、松岡さん、クロは反応する中、春奈ちゃんは必死に手を伸ばしていました。

私もやりたく～い～と訴えているみたいです。そんな春奈ちゃんに刀奈さんは微笑みました。

「フフツ、春奈ったら、貴女もやりたいのね？」

「う～～～～」

「やりたいみたいね？ 流夏？」

お母さんの言葉に流夏君はキョトンとしていました。でもでも、春奈ちゃんは必死に手を伸ばしていました。私もやりたく～いと願っているのです。

その様子を流夏君は見続けていましたがニパツと笑うと、ポチを見ます。

「ポ～～」

流夏君はポチを呼びました。理由は簡単、クロが終わったから、次はポチの番だよ～～と訴えているのです、流夏君は平等にやってあげようと思ったからです。しかし……。

「クウン!?! (えっ?!? ちよっ?!?)」

あら？ ポチは目を見開くと、汗を流し始めました。何か疾しいことがある——そう思われても仕方ありませんが、理由があるのです。

まあ、どうなるのかは、もうすぐ分かりますからね？

その頃、此処はデパートの玩具売り場、そこには、黒影さんがおり、ある戦隊の玩具を見ているいました。

ソフビ人形ですが、恐竜系の戦隊であり、赤、青、黄色、黒とありましたが、彼はある人形を見ていたのです。

場所を戻し、更識家の縁側では……春奈ちゃんがポチの身体をブラシで……。

ペし、ペし！

「キャン!? (いて! いて!)」

「う〜」

「キャン! キャン! (いつて! ち、違うわ!?)」

あらら!?! 春奈ちゃんはやり方が分からず、ブラシでポチの頭を叩きました。ポチは声を上げていましたが悲痛であり、春奈ちゃんの行動に驚きもあったのです。ポチが不安になったのも、春奈ちゃんはやり方が分からないからであり、やる度にこうなるからです。

そんな春奈ちゃんの行動に楯無さんは慌てます。

「ち、違うぞ春奈!」

楯無さんは春奈ちゃんからブラシを取りあげました。ポチを助ける意味でもありますが、春奈ちゃんの行動が違う事を教えたかったのです。

楯無さんの行動に春奈ちゃんは驚きもしません——でもでも、楯無さんはがブラシを取り上げた事で徐々に目を潤ませていきました。泣く——そう言う意味での顔でした。楯無さんは「ツ!」と声を上げると、慌ててブラシを差し出すと、春奈は泣くのを止め、ニパツと笑うと、またやりました。

ペチ、ペチと、叩いていましたがポチは涙目でした。そして、ふと、流夏君を見ると、彼は……。

「あ〜〜う〜〜く〜〜」

その間、流夏君はクロに対して、可愛らしい声を上げながらクロに

ペロペロされていました。勿論、ほっぺたをですが、クロは嬉しそうにペロペロしていました。近くにはお母さんの刀奈さんがおり、微笑ましそうに見ていました。

大好きな流夏君に甘えられるのと、独り占め出来ているからです。

「クウ〜ン（流夏〜さつきのお礼だよ〜）」

「うふふ〜!!」

クロは流夏君に甘えており、流夏君は嬉しそうに笑っていました。その光景をポチは「クウ〜ン」と鳴くのでした。

「……………これ、いい……………」

黒影さんは先日の流夏君に対してのお礼と言う意味で、玩具屋さんである人形を眺めていました。

その人形は白い身体で黒い爪が幾つもある恐竜系の人でした。見た目は悪そうですがカッコいい人形でした。

黒影さんはそれを手に取ると、レジへと向かうのでした。しかし

…………ふと、ある人形が目に入り、立ち止まると、目を丸くしました。

「……………」

黒影さんはその人形を眺めていました。その人形は武士の格好をしており、長い黒髪に赤い目に黄色い瞳が六つもある人形でした。

黒影さんはその人形を眺めていましたが、その人形を手に取ると、頬を少し赤くしながら二つの人形を持って、レジへと向かうのでした。

春奈ちゃん、亡き犬の姿を見て、ご機嫌はいいみたいです。

ある日の更織家の庭の近く。

「う〜」

「ふふっ、春奈は甘えん坊さんね〜ママが大好きね〜」

「あ〜う〜」

春奈ちゃんを抱っこしている刀奈さんが歩いていました。楯無さんと流夏君はお買い物に行っている為に居ませんでした。でもでも、近くにはポチとクロがおり、二人の近くを歩いていました。

「うふふ〜」

春奈ちゃんはポチとクロに笑いました。その笑顔は赤ん坊特有と言っても良い程、穢れのない物でした。

「ク〜ン！（春奈様、その笑顔は反則だ〜！）」

「ワン！（良いよ春奈〜もつと笑って〜っ！）」

二頭の犬はそれぞれ違う反応を見せていました。ポチは恥ずかしそうに顔を逸らし、クロはにへら〜と笑っていました。

双子の兄弟でありながら、見た目も瓜二つの存在の彼等が其々の反応を見せるのには理由がありました。性格が違う——双子にはあり得る事であり、無い方が可笑しいのです。

双子は春奈ちゃんに対して片方は困惑し、もう片方は嬉しがる中、刀奈さんは立ち止まりました。

「来たわよ——ブランカ」

刀奈さんは悲しそうに呟きました。春奈ちゃんはキョトンとし、ポチとクロは刀奈さんの呟きに気づき、目の前を見ます。そこには立派な墓石が有りました。

その墓には『ブランカ 2000—2012』と刻まれていたので、その名はブランカと言いました。

ブランカ——ポチとクロの父にして、更織家最強の番犬。性格はポ

チのように厳しく、流夏君にはダジダジであり、可愛がつていました。また、当主の楯無さんや奥さんの刀奈さんも守る事も第一と決めており、更識家の庭全体を守る役目をも担っていました。彼には奥さんが居ましたがポチとクロを含めた四頭の犬達を産んで直に亡くなったのです。

それでも、ブランカは六頭の犬を、我が子を守る為に前を向いていたのです——しかし……、あの日がブランカの最期でした。

「あの日、動物園から逃げ出したライオンと戦った」

刀奈さんは悲しい笑みを浮かべながら寂しそうに呟きました。それは一年前、更識家は四人の従者やブランカ、幼いポチとクロと共に別荘に向かったのです。

理由は仕事から解放される意味でした。流夏君もいましたが、刀奈さんは二人でした。それは春奈ちゃんがお腹の中にいる時でした。しかし、近所にはある獰猛な生き物が動物園から逃げてしまったのです。ライオンが動物園から逃げ、更には森の中へ逃げ込み、更識家の別荘にまで迫ってきたのです。

更には楯無さんは松岡さんと共に森の中を警戒していた中、バラバラにならないように固まっていたのです。楯無さんはISを使えば間に合う筈でしたが、むやみに出すと、周りに被害が出る為に出せなかつたのです。

別荘には黒影さんが居ましたが、ライオンに警戒するのと、煙玉で視界を遮らせていたのです。そんな中、別荘の外にいたブランカはライオンの匂いに気づき、一直線に駆け出すと、ライオンに不意打ちしたのです。

ライオンに気づかれた中、ブランカは自分の子供達を、当主の愛息と愛妻を守る為に、周りの人達を守る為に単身、ライオンと戦っていました。一回り大きな相手に、巨軀な存在に血だらけになりながらも誰かを守る為、——ブランカはその思いだけで戦っていました。

一時間程でしたがライオンは楯無さんがISを使ってが何とか捕獲しました。しかし、ブランカは大量出血で事切れる寸前でした。

楯無さんや松岡さんが駆けつけた時には虫の息であり、目を閉じそ

うになっていました。楯無さんや松岡さんが泣きながら呼びかける中、ブランカは薄れ行く意識の中、二人の姿を確認して、安心しきったかのように鳴くと、目を閉じました。

楯無さんや松岡さんが泣く中、追いかけてきた黒影さんはブランカに気づき俯く中、刀奈さんや流夏君、二人の従者、クロとポチもブランカに気づき、黒影さんと二頭の子犬以外の人たちは泣いていたのです。

それから一年が過ぎましたが、春奈ちゃんが産まれたからこの墓に来たのです。春奈ちゃんから見れば初めてですが、今日が命日だからです。

「春奈、この墓の下に眠っている犬さんはね、貴女や私達を助けてくれたのよ」

「あう？」

「貴女がお母さんのお腹の中にいたからまだ分からないかもしれないけど、凄いい犬なのよ？」

「う〜〜？」

「春奈がまだ手を合わせるかどうかはお母さんには分からないけど、この墓にいる犬さんは私達の大切な家族なのよ？」

「うにゆ？」

刀奈さんは微笑みます。

「そうよ——でも、お母さんは手を合わせる事はできないわ——春奈を抱っこしているからね？」

刀奈さんは墓を見ます。立派な墓ですが、刀奈さんはまた悲しい笑みを浮かべます。

「ブランカ——春奈よ……貴方が命を賭けて守った命が、目の前にいるわよ……クロ、ポチ」

「クウ〜〜ン」

ポチとクロは墓に向かって頭を下げました。亡き父であり、偉大な父でもあるブランカに対して、です。二頭の子犬はもう、大人になっていますが、体格だけであり、精神面はまだまだ父には及びません。

それでも、二頭の犬は父親を超える為、そして意志を継ぐ為、当主

とその妻を守る為の番犬として、流夏君と春奈ちゃんを守るのと友達として支えようと決めていました。

ポチとクロは頭を下げ続ける中、春奈ちゃんはキョトンとしていました。そして、墓を見ると、ニパツと笑いました。

「うにゅ〜」

春奈ちゃんは手を伸ばしました。何にも無いようにも思えますが、春奈ちゃんには見えていたのです。墓の前にはクロとポチを父親の目で見守るのと、春奈ちゃんを温かい目で見ているブランカの幻影が見えたからです。春奈ちゃんはブランカを見て嬉しく、機嫌はいいみたいでした。

その頃、楯無さんは困惑していました。

「おい流夏？ 他はダメか？」

「……………う〜〜こ〜〜」

「マジかよ……………」

楯無さんは天を仰ぎました。流夏君が持っている人形は見た目はヒーローなのです。巨大ヒーローでありますですがそれは青く、スリムとした顔立ちが特徴的なヒーローの人形——所謂、ソフビ人形です。

でもでも、その人形は見た目はヒーローでも、悪役だったからでした。

楯無さん、姉に父親としての義務を褒められ嬉しそうでした。（暴力表現あり）

ある日の正午。更識家の縁側。

「うふふ〜〜！」

「ふふつ、流夏は可愛いな〜」

千冬さんが遊びにきており、流夏君に甘えていました。流夏君は嬉しそうであり、甘えています。そんな様子を隣に居た楯無さんや、少し後ろにいる刀奈さんは微笑み、刀奈さんの膝の上にはおしゃぶりを啜っている春奈ちゃんが居ました。

何気ない日常でしたが、千冬さんは楯無さんに言いました。

「一夏、良く立派なお父さんになったな？」

千冬さんの言葉に楯無さんは瞠目しました。突然の事でありました。しかし、千冬さんは言葉を続けます。

「一夏、お前は父親の顔を知らない中、良く立派になったな」

「あつ……う、うん」

楯無さんは表情を暗くしました。そうです、楯無さんは幼い頃に両親が蒸発した為に温もりを千冬さん以外知らなかったのです。その為、父親になった彼が、自分は父親になっても大丈夫なのかと思っていたのです。

手を挙げてしまわないのか？ 子供達を充分に可愛がっているのか？ と不安が有ったのです。ですが、千冬さんはそれを察したように言葉を続けました。

「私が言うのも変だが、お前が父親に不安が有るのも、誰だって同じだ」

「えっ？」

楯無さんは目を見開くと、千冬さんは微笑みました。

「お前は父親の偉大さや温もりを知らない——しかし、お前は充分に父親としての義務を果たしている」

「……そんな事は……」

「大丈夫だ、今時の父親は可愛い子達には甘くも、厳しく接している——夏はそれに当てはまるが手を挙げるような事は悪い事をした以外、何もしていない——今のところは、な？」

「そうかもしれないけど、でも……」

「一夏、否、今は楯無だったな？——お前はもう、立派な父親だ。誰がなんと言おうと、お前は父親だ」

「……………」

「大丈夫だ、私が言うのなら本当だ——お前は父親らしい事を充分にしている——息子や娘を、妻を大事にする姿は父として、夫として立派な役目を果たしている。誰もが見ても、羨む程にな」

「……………」

「不安ならば誰かに言えば良い。誰もお前の話を聞きたくない奴などいない——ここに居る者は皆、お前の事を理解する心優しい奴らばかりだ」

「……………うん！ うん！」

楯無さんは悲しい笑みを浮かべながら頷きました。

「パパ……？」

すると、楯無さんの様子に流夏君は不安そうに見ていました。どうしたの……？ と思っている中、お父さんの楯無さんが哀しんでいる事にも気づいたのです。

楯無さんは笑っていました。嬉しいようにも思えます——しかし、千冬さんの言葉が楯無さんを励まし、勇気づけたのです。

父親以上に、温もりを感じなかった彼には父親としての器や寛大さが有るからでした。千冬さんは気づいていたのです。楯無さんは、一夏さんは弟であり、流夏君と春奈ちゃんのお父さんであり、刀奈さんの最愛の夫なのです。黒影さんや松岡さん達従者の当主にして、クロやポチの飼い主。

更識楯無と言う存在は周りの人達に大きな影響を与えていたのです。両親の温もりを知らずとも、その両親を刀奈さんと共になったからこそ、息子や娘に愛情を与えていたのです。

自分が体験しなかった事を、二人の子供達と同じ思いをさせないよ

うにしているのです。それだけでも立派な父親なのです。良き弟であり、良き父だと言う事を、千冬さんは理解していたのです。楯無さんは笑うと流夏君に頬擦りしました。

「うふふ！ きゃっきゃつー！」

流夏君は不安が飛んだかのように笑いました。お父さんが元気になった、そう思ったからです。そんな様子を刀奈さんは涙ぐみながら見ており、お母さんの膝の上に座っている春奈ちゃんは笑っていました。

千冬さんは微笑んでいました——楯無さんの頭を撫でていたので。弟の成長を誰よりも望んでいたからです。今の彼は父親として立派になった事に安堵していたからです。天気がいい中、更識家と織斑叔母のやり取りはとても温かく、ご機嫌はいい物でした。

流夏君と春奈ちゃんもご機嫌は良く、更識夫婦の仲はより良好かつ、深まったのでした。

「おいおいおい！ お前等散歩はどうした!? 何時も好きだろうが!?!」

「ワン！（うっさいわ！ 今、手が離せないんだわー）」

「クウ〜ン（あ〜〜可愛い〜）」

その頃、松岡さんはポチとクロを散歩に連れていました。でもでも、二頭の犬は今、とある家にいる二頭のドーベルマン達を凝視していたのです。

二頭とも雌でした——でもでも、その姿は凛々しくもどこか可愛らしいのでした。老年の夫婦に遊ばれています。がそれでも可愛らしく、鳴き声も良いのです。それも、姉妹なのです。

そんな二頭の双子の兄弟は姉妹にメロメロ〜。松岡さんは犬紐で誘導しても頑固として動かないのです。松岡さんは困惑して

も、二頭は頑に動かなかったのでした。

「あがつ……！ もう、許して……！」

その頃、此処はぼろいアパート。そこには一人の男性と顔中を殴られた中年のぼろい服を来た男性が居ました。顔中を殴られた男性は殴ったで有ろう男性に命乞いをしていました。

男性を殴ったのは、黒影さんでした。彼は今、憤りを隠せませんでした。何故なら、彼の近くには幼い兄妹がおり、兄は妹を抱きしめながら覚えていたのです。

妹さんは泣いており、必死に兄に縋り付いていました。お兄ちゃんには殴られた痕が有り、痛々しい姿をしていたのです。虐待をされていたのです。

顔中を殴られた男性は彼等のお父さんであり、酒乱かつDV野郎なのです。母親は家を出た為におらず、三人しか居ないのです。そんな状況の中で男性は兄妹に虐待していたのです。黒影さんは薄々気づいており、それを察して、男性を殴ったのです。

目を当てられない程であり、警察が対応しなければならぬのです。それでも、黒影さんは気にもせず、男性を殴ったのです。男性は泣きながら命乞いをする中、黒影さんはまた殴ろうとしました。

「……くずが」

しかし、黒影さんは殴るのを止めると、男性を乱暴に放しました。男性はうめき声を上げる中、黒影さんは兄妹の方へと向くと、歩きました。

兄妹はビクツとする中、黒影さんは二人の前に来ると、屈み、お兄ちゃんの頬に手を伸ばしました。お兄ちゃんはビクツとする中、黒影さんは何も言わずに悲しそうに呟きました。

「……良く、守った」

その言葉にお兄ちゃんは驚くと、徐々に顔を歪めると、泣き出しました。妹さんはお兄ちゃんの様子に戸惑いつつも、泣きそうになりま

した。

黒影さんは二人を抱きしめました。幼い兄妹の為にも、です。兄妹は、お兄ちゃん泣きじゃくり、妹は泣きそうになっている中、黒影さんは悲しそうに二人を抱きしめていたのでした。

どうなるのかは彼の行動次第ですが、兄妹は幸せを掴めるかもしれません——それは、自分達の行動次第で、ですかね？

流夏君と春奈ちゃん、其々の犬と遊ぶ中でご機嫌がい
い中、二頭の弟である犬と新しい赤ちゃんが来ても判
らないみたいです。

「びえ〜ん!!」

ある日の正午、此処は更識家の縁側が見える和室。そこは今暗く、障子などで締めていました。しかし、松岡さんは今、大ピンチでした。理由は簡単、抱っこしている春奈ちゃんが泣いていたのです。

理由は、春奈ちゃんが近くににいるポチに手を伸ばしていたのです。ポチは寂しそうに見ていましたが、隣には敷き布団があり、春奈ちゃんが寝ていたのです。

松岡さんは春奈ちゃんを、彼女のお母さんである刀奈さんの所へと連れて行こうとしたら、泣き出したのです、今まではなかったのです——でも、理由はありました。

ポチと一緒にいる〜と。ポチはうるうるしており、松岡さんは困惑すると、ポチは「ワン!」と吠えました。

「どうしたポチ?」

松岡さんが訊ねると、ポチは胸を張りました。自分が春奈様を見る! と訴えていました。松岡さんは判らず困惑していましたが——春奈ちゃんは泣きじやくる中、ポチは胸を張っていました。

松岡さんは春奈ちゃんとポチを交互に見ると、徐々に気づき、溜め息を吐くと、春奈ちゃんを敷布団の上に寝かせました——すると、泣くのをやめました。でもでも、近くにポチが俯せで座っており、春奈ちゃんを見ていました。

何にも思わない中、春奈ちゃんを見て軽く鳴きました。

「クウン? (どうしたんだ春奈様?)」

ポチが鳴くように訪ねると〜?〜?

「ういふ〜」

あらあら、春奈ちゃんつたらポチを見て涙が残りつつも、笑ってい

ました。さつきまで、松岡さんに抱っこされても泣かなかつたのに、部屋を出ようとした瞬間、泣いていたのになくく？

今は赤ちゃんらしい可愛い笑顔を見せていました。松岡さんが嫌いではありません、春奈ちゃんはポチと居たかつたのです。

ポチが近くに居るからのと、ポチが常日頃から傍で見守ってくれから安心出来るのです。

ポチが傍にいるく。春奈ちゃんは嬉しそうに指をしゃぶり始めました。赤ちゃんは皆そんな事をする訳じゃないけど、春奈ちゃんはする方でした。

春奈ちゃんはお兄ちゃんの流夏君だけでなく、ポチとクロもお兄ちゃんと思っっているのです。ポチは春奈ちゃんの笑顔に顔を真っ赤にすると、にへらくくと頬を緩めました。

ああ、顔をペロペロしたい……！　ポチはそう思っています——でも、出来ませんでした。理由は簡単、ばい菌が付いたら可愛らしい頬に傷をつけたら悪いのです。

ポチはそう感じてうくくと唸りますが悲しそうな顔をしているのです。春奈ちゃんは指をしゃぶりながらキョトンとしている中、襖から声が聴こえ、松岡さんが襖が開けました。

「ポチくく春奈くく」

襖が開くと、てちてちと歩いてきた子が居ました。流夏君です。流夏君は春奈ちゃんとポチを見てニパツと笑いました。

春奈ちゃんは流夏君を見て「ふあああく」と声を上げて喜びました。ポチは慌てて平常な顔をします。流夏君は妹とポチを見て笑う中、てちてちとポチの方へと歩み寄ると、抱き着きました。

ポチは突然の事でビクツとする中、流夏君は嬉しそうに笑っていたのです。ポチは顔を真っ赤にする中、松岡さんは軽く揶揄いました。「あらら？　ポチちゃんどうしたのくく？　流夏様に抱き着かれて嬉しそうですねくく」

彼の言葉にポチはギロリと松岡さんを睨みます。松岡さんはポチの様子に「わつと!？」と驚きました。ポチは松岡さんに対して唸り声を上げ——ませんでした。

流夏君と春奈ちゃんを怖がらせる為に、しなかつたのです。流夏君はポチに甘え、春奈ちゃんはポチに笑っていました。二人の兄妹はポチに可愛がられ、可愛がる関係の中、障子で遮られている縁側の方から、鳴き声がしました。

松岡さんがそれに気づき、流夏君はポチを抱きしめながら障子を見ると、こう呼びました。

「クロ〜」

流夏君がそう呼ぶと、障子の方から嬉しい鳴き声がしました。遊んで欲しい、構って欲しい、と訴えているようでした。そんな様子に松岡さんは苦笑いしつつも、障子に近づき、開けるとく〜そこには、口をハツ、ハツとしながら嬉しそうにパクパクしているクロが居ました。

クロは流夏君を見て笑う中、流夏君はテクテクと歩き出すと、窓を叩きました。クロと遊びたいみたいです。クロはにへらく〜と笑うと、耳を羽のようにパタパタさせていました。

愛情表現のようでした。クロなりの流夏君への愛情と一緒に遊んで嬉しいのです。流夏君は『ふふふ！』と笑う中、松岡さんは微笑みしました。

「う〜」

一方で春奈ちゃんは指を咥えたまま、ポチに笑いました。ポチは春奈ちゃんに、にへらく〜と頬を緩めており、嬉しそうでした。春奈ちゃんとポチ、流夏君とクロ——其々の相手をしている中、流夏君が来た襖から、ある女性が部屋に脚を踏み入れました。

幼い兄妹の母親であり、当主の愛妻・刀奈さんでした。

「あらあら？　春奈と流夏ったら、ポチやクロと遊んで貰って嬉しうね〜」

お母さんの言葉に春奈ちゃんと流夏君はお母さんに気づき、流夏君は「ママ〜」と嬉しそうにてちと駆けよりました。お母さんは春奈ちゃんの近くまで来て、屈むと、流夏君を受け止めるように抱きしめました。流夏君は甘えていました。

春奈ちゃんはキヤツキヤツと笑う中、刀奈さんは流夏君を抱きしめ

つつも、春奈ちゃんの頬を触りました。春奈ちゃんは頬を撫でられてくずったように笑っていました。

そんな光景を松岡さんと、ポチとクロは微笑ましそうに見ている中、刀奈さんはある事を言いました。

「流夏、春奈——それにポチにクロ、今日はお客さんが来るわよ？」

「あう？」

「ワン？（お客様ですか？）」

お母さんの言葉に流夏君とポチは気にしました。すると、クロは突然、ある匂いを嗅いで、目を見開くと耳をピコピコさせながら吠えだしつつ駆け出しました。

「ク、クロ!？」

「ワン!？（クロ、どこ行くんだ!?!）」

松岡さんとクロは気にする中、松岡さんは縁側と庭を繋ぐガラス引き戸を開けると、ポチもその匂いに気づき、ゆっくりと歩き出し、庭に出ると駆け出しました。

庭の、特に玄関まで続く道近くでクロはある犬と戯れていました。その犬はドーベルマンでした。しかし、その犬はポチとクロにとつて、かけがえの無い家族なのでした。

「ワンワン！（ヴェルニカ〜〜!）」

ポチはそのドーベルマンをヴェルニカと呼んでいました。そうです！彼はヴェルニカ！ポチとクロの弟にして、フランスで生活していたのです！

そのヴェルニカの飼い主は、近くに居ました！二十代前半の長い金髪に薄紫色の瞳が特徴的な女性でした。オレンジ色の女性スーツを着ており、手には、ある赤ん坊を抱き抱えていました。

その赤ちゃんは女の子であり、オレンジ色の赤ちゃん服を着ており、女性と良く似つつも紺碧色の瞳が特徴的な赤ちゃんです！可愛らしくも、親指をしゃぶっていました。女性は微笑む中、ヴェルニカに行っただのです。

「ヴェルニカ良かったね。大好きなお兄ちゃん達に逢えてね？」

「う〜〜〜」

その女性はヴェルニカに対して優しい言葉をかけます。赤ちゃんはキョトンとしていました。でももで、玄関の方から、ある女性と二人の赤ちゃんが来ました。

刀奈さんです！ 春奈ちゃんを片手で抱きかかえており、もう片方の手は流夏君と手を繋ぐようにしていたのです。刀奈さんに気づいた女性は微笑むと、言いました。

「お久しぶりです刀奈さん」

「久しぶり！ シャルロットちゃん！」

女性はシャルロットと言うと、刀奈さんは答え返しました。お互いを自己紹介していたのです。すると、シャルロットさんは抱き抱えている赤ちゃんに優しく微笑みながら言いました。

「エリカ、私が言っていた流夏君と春奈ちゃんだよ？」

シャルロットさんは赤ちゃんをエリカと呼びました。彼女の名はエリカ・デュノア——女性のシャルロット・デュノアの姪であり、養女でした。

シャルロットさんの言葉にエリカちゃんは「うにゅ？」と流夏君と春奈ちゃんを交互に見ました。キョトンとしていました——いえ、直に恥ずかしそうにシャルロットさんの胸に顔を埋めました。

恥ずかしいようにも思える中、流夏君と春奈ちゃんはキョトンとしていました。流夏君は首を傾げていました——でもでも、それは可愛らしいのと、春奈ちゃんは兎も角、濡ちゃんにとって、後の、新たな恋のライバルが現れたのでした。

近くではポチ、クロ、ヴェルニカがじゃれあう中、今日もご機嫌は、う〜ん、判らないみたいです。

「うにゅ〜??:」